

二〇〇八年度 修士論文

吉備真備と陰陽道

教科教育専攻国語教育専修
国語・国文学分野
〇七三一〇三 岡本大典

序章	はじめに	1
第一章	陰陽道の始祖 吉備真備	2
第一節	歴史上の吉備真備	2
第二節	吉備真備説話の中の陰陽道	5
第三節	『靈篋抄』と吉備真備	7
第二章	吉備塚伝承と陰陽道	10
第一節	吉備塚古墳の概観	11
第二節	吉備塚伝承の成立	12
i	地誌に描かれた吉備塚	12
ii	地域に伝わる吉備塚伝承	15
iii	吉備塚を祀る人々	18
第三節	中世南都の陰陽師たち	20
i	横行・声聞師	20
ii	幸徳井家	23
iii	陰陽町の陰陽師	30
第三章	牛頭天王招来譚の生成	35
第一節	吉備真備「招来」説話の展開	37
i	歴史資料に見る吉備真備の招来したもの	38
ii	吉備真備入唐説話における招来伝説	40
iii	その他の招来伝説	44
第二節	吉備真備牛頭天王招来譚	48
i	吉備真備牛頭天王招来譚の展開	48
ii	牛頭天王という異神	52
第三節	播磨と吉備の陰陽師	58
終章	御霊信仰と吉備真備・今後の課題と展望	67

序章 はじめに

私は、六年間、高畑町に住み、奈良教育大学へと通った。通用門から坂を登り通う、通学時間は、五分に満たない程である。この坂は、付属小学校の児童達の通学路にもなっていて、毎朝、子どもたちの声が響く、ごく平凡な大学内の道である。

六年前の四月、私が、初めてこの道を通った時、道の脇に小さな土を盛ったような場所があることに気がついた。クヌギの巨木を中心に草が鬱蒼と茂り、なんとも曰くがありそうな場所である。そこには、碑が建てられており、足を止めて見てみると「吉備塚」と書いてある。奈良時代の学者であり、政治家でもあった「吉備真備」の墓とあった。岡山の出身である私は、郷土の偉人である吉備真備の墓が、大学内にあるということのをうれしく思ったことを、今でも覚えていてる。

しかし、この吉備塚は、ただの墓ではなかった。実は、奈良教育大学内で、語り継がれる七不思議の舞台の一つだったのである。つい最近（二〇〇八年五月頃）も、部活動の後輩からこのような話を聞いた。

少し前に、吉備塚の木を校長先生が切ろうとしたら、次の日、首を吊って死んでいった。

校長といえば、奈良教育大学構内にある付小の校長ことであろうか、それとも学長であろうか。いずれにしても、はたしてそんなことは本当にあったのだろうか。この他にも、ある先生からは、「吉備塚の木の伐採を業者に頼んだら断れた」という話も聞いた。吉備塚に関する都市伝説のようなものが、まことしやかに大学内で語られていたのである。

しかも、吉備塚に関する伝承は、今に始まったものでない。高畑周辺では、吉備塚に触れたり、掘ったりすると、病気になるったり、死んでしまうという伝承が語り伝えられているのである。なぜ、偉人である吉備真備の墓にこのような伝承が生まれたのであろうか。

また、「吉備塚」は、平成十年、十四年、十五年の発掘調査によって六世紀初頭の古墳であることが分かっている。八世紀の頃に活躍した吉備真備とは、時代的に合わず、残念ながら吉備真備の墓ではないようである。なぜ、六世紀の古墳が吉備真備の墓となっていたのであろうか。

この吉備塚周辺には、幸徳井と呼ばれる一族が居住していた。実は、この幸徳井家は、賀茂氏の流れを汲む陰陽師の一族なのである。どうやら、この吉備塚の伝承の生成には、南都で活動していた陰陽師たちが関わっているようなのである。

吉備真備の伝承は、平安時代の歴史的資料である七九七年成立の『続日本紀』や一〇八六年頃の成立の『扶桑略記』において、陰陽道の影響を受けた伝説化がすでに始まっている。その後、一一一〇年頃成立の『江談抄』などに見られる吉備真備入唐説話や一一二〇年頃成立の『今昔物語集』などには、陰陽師としての吉備真備が見られ、伝説化が進んで

いる。中世になると、陰陽道との関係はより、深いものとなり、『篋篋抄』によって、吉備真備は陰陽道の始祖として語られる。

本論文では、こうした吉備真備陰陽道始祖伝承の成立の過程を、古典文学の資料に歴史資料を加え、文献資料と伝承資料の両面から考究する。

第一章では、吉備真備が、いかにして陰陽道の始祖となっていたかを、平安時代に始まり、中世から近世にかけて大きく成長、展開を遂げる吉備真備の伝説化に焦点をあてて考察していく。

その上で、第二章では、「吉備塚伝承」に焦点をあて、吉備真備を始祖とする陰陽師、特に南都の陰陽師たちの活動に注目して、吉備塚伝承を生み出し、成長させた担い手がどのような人々であったのかを考察していく。

また、吉備真備は「太衍曆」や「囲碁」、「篋篋抄」、「兵法」、「九尾の狐」、「刺繡」など二十五種にも及ぶ多種多様なものを日本へと招来したとされている。その中の一つが陰陽道でも重要な神とされる「牛頭天王」である。兵庫県姫路市にある廣峯神社において、その招来の物語（吉備真備牛頭天王招来譚）が伝えられている。第三章では、吉備真備牛頭天王招来譚を手がかりとし、吉備真備と牛頭天王、さらには陰陽道との関係に着目して、その担い手と考えられる播磨と吉備の陰陽師たちの存在を明らかにしていく。

終章では、今後の課題として御霊信仰と吉備真備の関係について問題提起する。

第一章 陰陽道の始祖 吉備真備

第一節 歴史上の吉備真備

周知のように、吉備真備は、奈良時代に活躍した実在の人物である。史上の人物としての吉備真備の事績を伝えるものは、『続日本紀』¹⁾・『意見十二箇条』²⁾・『扶桑略記』³⁾の三つの史料である。それらの資料を整理した歴史上での吉備真備像は、おおよそ以下のようなある。

吉備真備は、持統九年（六九五）頃に下道朝臣罔勝の子として生まれたとされる。生まれた場所については、現在ははっきりしたことが分かっていない。霊龜二年（七一六年）の第八次遣唐使の時に阿倍仲麻呂、玄昉らと共に留学生として唐に渡り、唐で一二年間学ぶ。天平七年（七三五）四月に唐から帰朝し、日本に書籍や楽器など多くの物を招来する。日本に戻った真備は、天平十年（七三八年）に右衛士督に、天平十三年（七四一年）に東宮学士、天平十五年（七四三年）春宮大夫に任ぜられ、天平十八年（七四六年）に、吉備朝臣の姓を授けられる。天平十九年（七四七年）に右京大夫、翌年には元正天皇の崩御に伴って山作司になり、この時、位も従四位上となる。

しかし、天平勝宝二年（七五〇）正月に、九州に左遷され、都を去ることになる。天平勝宝三年（七五一年）に入唐副士に任ぜられ、第十次遣唐使として再び唐に渡る。天平

勝宝五年（七五三年）に帰朝し、天平勝宝六年（七五四年）太宰大貳に任ぜられ、再び九州に向かい、天平勝宝八年（七五六年）に山城である怡土城を築き、天平宝字四年（七六〇年）に都から大宰府に派遣された者に諸葛亮の八陳や孫子の九地などの兵法を教えるなど軍事面で活躍した。天平宝字八年（七六四年）に造東大寺長官に任ぜられ、都に戻り、天平宝字八年（七六四年）に起こった恵美押勝の乱の時には内裏に呼ばれ、軍務に参謀し、乱を鎮めるのに大きな働きをする。天平神護二年（七六六年）に、右大臣に任ぜられ、同時に従二位を授けられ、官位ともに吉備真備にとって最高のものとなる。宝龜二年（七七一年）に致仕の願いが受け入れられるまで、官職を全うし、宝龜六年（七七五年）十月、八十歳という当時としては大変な長寿でこの世を去る。

二度の渡唐や九州へ左遷されるなど波乱万丈の人生ではあるが、東宮学士や造東大寺長官、恵美押勝の乱での働きなど中央において様々な分野で広く活躍し、最終的には右大臣という高位に就いている。地方豪族の息子である吉備真備が、遣唐留学生という学生身分から右大臣にまで出世するというのは歴史上でも稀なことである。

しかし、こうした吉備真備の「事績」を伝えている『続日本紀』や『扶桑略記』の記述は、そのまま史実を伝えているとは限らない。これらの歴史的資料が書かれた時点で、すでに吉備真備の伝説化が始まっているからである。

例えば、『続日本紀』の吉備真備が左遷された時の記録に、次のような記述がある。

藤原広嗣（中略）起兵反。以討玄昉及真備為名。雖兵敗伏誅、逆魂未息。勝宝二年、左・降筑前守、俄遷肥前守。†

藤原広嗣の怨霊が鎮まらないことを理由に、真備を筑前守に任命し、その後すぐに肥前守へと転任している。吉備真備の左遷の理由を広嗣の怨霊が鎮まらないこと、つまりは、真備にその怨霊を鎮めることを期待したとも推測できる。もちろん、鎮魂が本当の理由であったとは考えにくい。このことについて後藤昭雄氏は『続日本紀』の注において「左降を広嗣の怨魂の仕業と考えているが、実際には仲麻呂にうとまれたのが原因であろう。」¹⁵⁰としており、この左遷は、藤原仲麻呂と橘諸兄との政争に巻き込まれたといった政治的要因である可能性が十分ある。

もちろん左遷の理由も大切なことなのであるが、ここで重要なことは、吉備真備が怨霊を鎮めるような力を持つていたとされている点である。怨霊を鎮めるなどということは、普通の人ではできないことである。『続日本紀』が書かれた時点で、吉備真備を超人的な人物として捉えていたという事であろう。

また、『扶桑略記』 天平七年（七三五年） 四月辛亥の条の吉備真備が唐から持ち帰ったり学んだりした記述の中にも次のようなものがある。

入唐留学生従八位下々道朝臣真備唐禮一百卅卷。太衍曆經一卷。太衍曆立成十二卷。

測影□尺一枚。樂書要録十卷。馬上飲水漆角弓一張。□種々書跡。要物等。留学之間歴十九年。凡所傳學。三史五經。名刑筭術。陰陽曆道。天文漏刻。漢音書道。秘術雜占。一十三道。或記云。爰吉備竊封日月。十箇日間天下令闇恣動。令占之處。日本留學人不能歸朝。以秘術封日月。勅令免宥遂歸本朝。

まず、ここには『唐礼』や曆など多くのものを日本へ招来したとある。ここで挙げられているものは、『続日本紀』天平七年（七三五年）四月の条にもすでに次のように挙げられている。

入唐留学生従八位下道朝臣真備、献唐礼一百卅卷、太衍曆経一卷、太衍曆立成十二卷、測影鉄尺一枚、銅律管一部、鉄如方響写律管声十二条、樂書要録十卷、絃纏漆角弓一張、馬上飲水漆角弓一張、露面漆四節角弓一張、射甲箭廿隻、平射箭十隻、

『扶桑略記』と比べると楽器や武器と招来したものは多い。しかし、陰陽道を学んだことや日月を隠した物語は書かれていない。『扶桑略記』には、陰陽道的な記述や物語が書かれおり、伝説化が進んでいることが分かる。これらの吉備真備が遣唐留學生の折に、招来したものについては、第三章で詳しく見ていく。

ここで、注目したいのは、真備が唐で学んだことについてである。多種多様なものを学んできたとされているが、その中でも「陰陽曆道。天文漏刻。」や「秘術雜占。」と、陰陽道に関係しているものが挙げられている。吉備真備は、平安のこの時期に唐で陰陽道や占いの知識を身につけ、陰陽道に関して特殊な能力を持った人物であったことが伝えられている。

さらに、それに続いて、真備が日本に帰るために、日月を封じたということが書かれている。占いによって日月を封じるということは、陰陽道や天文の知識によるものである。ここでは、陰陽道を学んだ人物としてのみでなく、陰陽道の術を駆使する陰陽道の達人としての真備が描かれているのである。

このように、七九七年成立の『続日本紀』と一〇八六年頃の成立の『扶桑略記』と年代の隔たりはあるものの、吉備真備の事績を記録する歴史的資料において、吉備真備は超人的な人物とされている。吉備真備は、歴史上卓越した学者、政治家であったと同時に伝説的な人物として捉えられていたのであろう。さらに、そこには陰陽道の影響をはっきりと見ることができ、吉備真備を陰陽道の始祖とする要素の第一歩がしっかりと刻まれているのである。

第二節 吉備真備説話の中の陰陽道

実は、第一節の最後で見た『扶桑略記』の日月を封じるといふ内容は、『江談抄』などで語られる吉備真備入唐説話の内容とほぼ同じものである。この吉備真備入唐説話は、真備が唐で鬼の援助を受けて、難題を乗り越えていくというもので、いくつかの書物にその断片を見ることができ、詳細に書かれているものは少なく、平安時代後期に成立した『江談抄』や『吉備大臣入唐絵巻』、鎌倉時代前期に成立した『吉備大臣物語』などが代表的なものである。しかし、この三本においても完全な形で伝えられているのは『江談抄』のみで、あとの二本は後半部が失われてしまっている。

吉備真備入唐説話の中には、吉備真備が様々な難題を乗り越えていく上で、日月を封じるといったような陰陽道に通ずる内容が随所に見られる。

例えば、鬼の存在である。吉備真備入唐説話の中で阿倍仲麻呂の霊が鬼として現れ、その鬼の助けを得て、難題を突破していく。物語の中で、この鬼に会ったものは死んでしまふとされているのであるが、その鬼霊に対して吉備真備は、屈するどころか衣冠を着けてくるように命じるなど、明らかに優位に立ち、従えている。

陰陽師が、鬼や識神などを従者のごとく従える力を持っていたことは、『今昔物語集』巻二十四「安倍晴明、随忠行習道語第十六」によっても知ることができる。

此晴明ハ、家の内二人無キ時ハ識神ヲ仕ケルニヤ有ケム、人モ無キニ、薙上ゲ下ス事
ナム有ケル。⁸

陰陽師である安倍晴明は、識神をあたかも従者や眷属であるかのように、自在に使役している。阿倍仲麻呂の鬼霊を従えている吉備真備の姿も陰陽道の影響が窺える。

次に、陰身の術、飛行自在の術、止むる封など真備が行った不思議な術である。

楼に居しむる間、深更に及びて、風吹き雨降りて、鬼物伺ひ来たり。吉備隱身の封
を作し、鬼に見えず。⁹

楼を閉ぢたるは、いかがして出で給はむずると言ふに、吉備の曰く。我は飛行自在の術
を知れりと言ひて、楼の隙より共に出でて、『文選』講ずる帝王の宮に至りぬ。¹⁰

石を計ふるに黒石足らず。よりて卜筮を課みて占ふに「盗みて飲めり」と云ふ。推ひ
て大いに争ふに、腹中に在り。しからば瀉薬を服せしめんとて呵梨勒丸を服せしむる
も、止むる封をもつて瀉さず。¹¹

「陰身の術」は鬼から身を隠すために使われ、「飛行自在の術」は幽閉された楼から抜け

出すために使用され、「止むる封」は腹を下さないために使用されている。物語の中で様々な術を駆使して難題に挑んでいる。

「陰身の術」は陰陽道において遁甲隠行の術とも呼ばれ、陰陽師によって使用される術の一つである。²²『今昔物語集』巻二十四「慈岳川人被追地神語第十三」に次のような記述がある。

試ニ隠レ可給キ事ヲ構ヘム(中略)川人其ノ廻ヲ密ニ物ヲ読ツ、繰返シ後、川人モ稲ノ中ヲ引開テ這入テ²³

陰陽師滋岳川人は、地神から隠れるために陰身の術を使用している。入唐説話において、吉備真備が陰身の術を使っているのは明らかに陰陽道の使い手としての真備を描き出そうとしていると考えられる。

「飛行自在の術」は、まさしく身を浮かし空を飛ぶものであるが、陰陽師が使用したという例は見られない。神仙系の術の一つと思われ、吉備真備が特殊な力を用い、術を使用する姿が確認できる。

最後に「止むる封」は、詳しいことは分からないが、医術に関係のあるものと考えられる。室町時代に作られたと考えられる『不動利益縁起』には、安倍晴明らしき陰陽師が、病にかかった僧のために祈祷をする場面が描き出されている。病気を治癒するため疫病払いの祈祷をすることも陰陽師たちの大きな役割のひとつであったことが分かる。

また、こうした様々な術を使うということ自体が、陰陽師を描いた説話の中に多く見える。例えば、『今昔物語集』巻二十四「安倍晴明、随忠行習道語第十六」に次のようなものを見ることができる。

庭ヨリ蝦蟆ノ五ツ六ツ許踊ツ、池ノ辺様ニ行ケルヲ、君達、「然ハ彼レ一ツ殺ソ給ヘ。試ム。」ト云ケレバ、晴明、「罪造リ給君カナ、然ルニテモ、「試ミ給ハム」ト有レバ」トテ、草ノ葉ヲ摘切テ、物ヲ読様ニシテ蝦蟆ノ方ヘ投遣タリケレバ、其ノ草ノ葉蝦蟆ノ上ニ懸ルト見ケル程ニ、蝦蟆ハ真平ニ□テ死タリケル。²⁴

安倍晴明が何らかの術を使って蛙を殺している。陰陽師として著名な安倍晴明が術を使用するという説話が語られているということからも、術を使うということは陰陽師としての要素の一つであったと考えられる。

このように、吉備真備入唐説話には、陰陽道的な要素がはっきりと見てとれる。そこでは、しばしば吉備真備は陰陽道的な術を使用する陰陽師としての姿で描かれているのである。

また、『今昔物語集』には、さらに進んで、陰陽道の達人としても語られている。まず、『今昔物語集』巻十一の「玄昉僧正巨唐伝法相語第六」を見てみよう。

広継悪霊ト成テ、且公ヲ恨奉リ（中略）其後悪霊静ナル事無カリケレバ、天皇極テ恐サセ給テ、「吉備大臣ハ広継ガ師匠也。速ニ彼ノ墓ニ行テ、誘ヘ可キ也」ト仰セ給ケレバ、吉備宣旨ヲ奉、西ニ行テ、広継ガ墓ニシテ誘ヘ陳ジケルニ、其ノ霊シテ吉備殆シク可被鎮ナリケルヲ、吉備陰陽ノ道ニ極タリケル人ニテ、陰陽ノ術ヲ以テ我が身ヲ怖レ無ク固メテ、勲ニ□誘ケレバ其霊止マリニケリ。¹⁵

吉備真備が悪霊となった藤原広継を鎮めるために西に向かい、陰陽の術をもって広継の悪霊を鎮めている。藤原広嗣の霊に関しては先に挙げた『続日本紀』にも吉備真備の左遷の理由として書かれている。

同じ『今昔物語集』巻十四の「女、依法花力転蛇身生天語第四」にも次のように書かれている。

其ノ人陰陽ノ方ニ達レルニ（中略）大臣、「然レバコソ。鬼ノ来テ人ヲ噉フ也ケリ」ト思テ、弥ヨ慎テ、身ヲ固メ呪ヲ誦シテ居タルニ、後ノ方ヨリ一人ノ女、微妙キ有様ニテ漸ク歩ミ来ル。（中略）君彼ノ墓ヲ堀テ其ノ金ヲ取出シテ、五百両ヲ以テハ法花経ヲ書写シテ我が此ノ苦ヲ救ヒ給ヘ。五百両ヲ以テハ其ノ功ニ君ノ財トシテ仕ヒ給ヘ。此ノ事告ムト思フニ、人皆我が体ヲ見テ憶気シテ死ヌレバ、干今不申ズシテ歎キ思ツルニ、幸ニ君ニ会奉テ申ツル、喜キ事無限シ」ト。大臣此ノ事ヲ聞テ、女霊ノ願フ所ノ事ヲ請ツ。女霊喜テ返去ヌ。¹⁶

吉備真備が女の霊の願いを聞いて、女の霊をなだめたということが書かれている。どちらも霊をなだめたという内容になっている。「陰陽ノ道極タリケル人」や「其ノ人陰陽ノ方ニ達レルニ」とどちらも吉備真備を陰陽道の達人としており、霊をなだめる力の源を陰陽道によるものとされている。

平安期に創作された『江談抄』・『吉備大臣入唐絵巻』・『吉備大臣物語』の三本を中心とする吉備真備入唐説話や『今昔物語集』では、吉備真備の伝説化はさらに進み、陰陽道の影響がより強くなっている。その中では、吉備真備は陰陽道の達人とされており、こうした陰陽道と結びついた吉備真備ということが、中世以降の『簠簋抄』への展開に大きく関係していく。

第三節 『簠簋抄』と吉備真備

吉備真備が活躍した時代からは遙かに下るが、中世後期から近世にかけて、吉備真備と陰陽道との関係はさらに強いものになり、遂には陰陽道の始祖として祭り上げられる。その代表的なものが、中世末期から江戸初期にかけて書かれたと考えられる『簠簋内伝』¹⁷の

由来及び注釈から構成された『簗篋抄』²⁰である。その中の「三国相伝簗篋金烏玉兔集の由来」において、帰朝後、聖武天皇に仕えた吉備真備は、八十歳になった時に、唐で助けもらった安倍仲丸の恩義に報いるため、仲丸の子孫のいる常陸の国を訪ねる。そこで、仲丸の子孫である一人の童子に会い、『金烏玉兔集』を授ける、という内容が加えられ、第二節で見た『江談抄』などに描かれている吉備真備入唐説話が陰陽道とさらに結びついた形で語られている。

いままでの存命は、まことに安倍の仲丸によつてなり。大唐武帝より給はる『金烏玉兔集』、いまの代にひろめず、これを仲丸が子孫に譲り、相伝したしと思ふに、仲丸子孫、いま関東常陸の国、筑波根の麓に、吉生といふところにもあり、また、真壁の猫島といふところにある義を聞く。かれに至り、やうやく吉生に近づき、筑波の麓に体居し給ふに、その村に六つ七つばかりの童子、十二、三人あり。遊ぶ中に、一人の童子に天蓋下りて、かれに覆ふゆゑに、吉備大臣不思議に思ひ、ある老翁に問ひ給ふ。老人答へていはく、「あれこそ、先年入唐せし、仲丸が子孫なり」と申す。そのまま、吉備大臣、かの童子の住居を尋ね給ひ、この書を譲り給ふといへども、童子幼少のゆゑに、相伝なし。正本ばかり渡し給ふなりと、云々¹⁹

この内容が、吉備真備入唐説話に追加された背景には、陰陽道の聖典『簗篋内伝』（『金烏玉兔集』）の由来を述べるといふ目的があったと考えられる。さらに、『簗篋内伝』を真備が日本に招来し、恩義から安倍氏（後の清明である童子）に授けると物語ることによって、安倍氏が陰陽道の正統の系譜にあるということを強調している。実際、『簗篋内伝』中で安倍氏の祖について次のような記述がある。

天文司朗安部博士吉備后胤清明朝臣入唐伝²⁰

ここでは、清明を吉備の後胤としている。安倍家においても吉備真備を祖とする伝承が語られ、『簗篋内伝』を招来した吉備真備を祖とすることで、自分達を陰陽道の正統な系譜としている。

このように『簗篋抄』の「三国相伝簗篋金烏玉兔集の由来」は『簗篋内伝』の招来を物語る伝承であり、その担い手を吉備真備としている。それは、吉備真備が、この時点における陰陽道の始祖として位置づけられていたということであろう。

また、『簗篋抄』からは、離れるのであるが、安倍家と並んで二大陰陽道家である賀茂家においても。ある時期に吉備真備は祖とされている。『尊卑分脉』「賀茂」や『賀茂氏系図』（群書類従）を見ると

吉備麿——小黒麿——(中略)——忠行——保憲——光榮²²

吉備麻呂——小黒麻呂——(中略)——忠行——保憲——光榮²²

とあり、吉備麿の説明には

真吉備朝臣元下道臣也²³

真吉備朝臣。元下道云々。²⁴

と吉備真備の履歴が簡単に記述されている。さらに、『賀茂氏系図』(群書類従)には

一説孝謙天皇天平勝宝四年五月賜賀茂朝臣²⁵

とあり、賀茂の姓を孝謙天皇から賜ったという記述がみられる。

また、貞享元年(一六八四年)に新賀村(現在の岡山県笠岡市新賀)出身の在田軒道貞によって書かれた『吉備物語』の吉備大臣の項でも、

天皇賀茂氏を下さる。²⁶

とあり、吉備真備に天皇が「賀茂」の姓を与えたとしている。『吉備物語』は、在田軒道貞による貞享年間(一六八四〜八八年)以前のフィールドワークによって書かれたものと考えられているものである。²⁷そのような地方の伝承をまとめたものにも、賀茂家の祖を吉備真備とすることは影響を与えている。吉備真備を賀茂氏の祖とする伝承は広く知られていたようである。

しかしながら、『尊卑分脉』「賀茂」の別注には「吉備真備傳、恐誤入」とあり、この吉備麿が吉備真備であるというのは誤りとしている。このことについて河原正彦氏は『吉備大臣入唐絵詞』の成立と陰陽道の中で同時代の刑部判事進大老鴨朝臣吉備麻呂という人物と混同したのではないかと述べている。²⁸

史実としての記録が残っていないため事実であるのか、伝承であるのかの判断は難しい。しかしながら、当時、吉備真備を賀茂氏の祖とする伝承が存在していたことは確かなことである。

『簠簋抄』の「三国相伝簠簋金烏玉兔集の由来」は『簠簋内伝』の招来を物語る伝承である。その物語が、吉備真備入唐説話を取り込んでいる。平安後期の『江談抄』「吉備入唐間事」・『吉備大臣入唐絵巻』・『吉備大臣物語』の三本は、様々な真備伝承を基に作られた吉備真備入唐説話であった。それに対して、中世から近世にかけての『簠簋抄』に代表さ

れる吉備真備入唐説話は、権威付けの物語として陰陽道に取り込まれている。その中で、吉備真備は、日本に陰陽道を持ち込んだ始祖的な存在として描き出されている。それは、平安時代に陰陽道の達人として伝えられていた真備を、より陰陽道において権威ある人物へと押し上げようとするものであった。

第二章 吉備塚伝承と陰陽道

第一章では、説話や文献の中に見られ、比較的広く知られた吉備真備と陰陽道の関係を示す事例の考察を行なった。しかし、吉備真備と陰陽道との関係は、広く知られたものだけにとどまらず、口承などによって語り継がれる地域伝承の中にも、はっきりと確認することができるのである。

現在、奈良教育大学構内北西部にある吉備真備の墓と伝えられる「吉備塚」(図I)がある。

実は、この吉備塚には、触ると祟りがあるとか、吉備真備が夜な夜な安倍晴明に会いに行き、その姿を見たものは死んでしまうといった様々な恐怖に満ちた伝承が、地域の人々たちによって語られている。

さらに、この吉備塚伝承が伝えられる場所の近隣には、同じようにして安倍晴明伝承が伝えられている。『今昔物語集』や『笠篋抄』の中で陰陽師や陰陽道の祖であるかのように語られている吉備真備伝承と陰陽道の代表的な存在である安倍晴明伝承が重なり合うようにして語られているのである。

これは、どういうことであろうか。このこと同様に安倍晴明伝承が伝わる茨城県吉生や猫島あたりには、松石江梨香氏の調査²⁶⁾によると、陰陽道の流れを汲む民間の宗教者集団が活躍したことが指摘されている。民間の宗教者達にとって安倍晴明といった強力な権威ある人物の伝説を語ることは、自分たちが活動を行なっていく上で、重要なことであったはずである。やはり、この陰陽道の祖とされる吉備真備の伝承を伝えるこの地にも陰陽道に関わった人々が活躍し、吉備塚伝承を生み出し、広げていく担い手となっていたのではないだろうか。本章では、吉備塚伝承を伝える南都の地の宗教者たちに注目し、吉備塚伝承と陰陽道との関係について考察を行なっていく。



(図I)

第一節 吉備塚古墳の概観

平成十年、十四年、十五年に奈良教育大学と吉備塚古墳調査委員会を調査主体として吉備塚の発掘調査が行われた。その調査結果は、平成十八年に『吉備塚古墳の調査』³²としてまとめられた。調査から分かった吉備塚古墳の現状は以下の通りである。

調査者	所在地	大きさ	埋葬施設	出土品
奈良教育大学、吉備塚古墳調査委員会	奈良盆地の北東、奈良県奈良市高畑町に所在する奈良教育大学構内北西部 ³¹	径約二〇メートル高さ約三メートル	第一埋葬施設、第二埋葬施設 木棺	画文帯環状乳神獸鏡、鉄製品、三累環頭大刀、貝装雲珠、挂甲（かけよろい）、布目瓦片、灯明皿片（土師質土器）、銭（寛永通宝）、埴輪、陶器、磁器、馬具

昭和六十一年に江田船山古墳出土鏡など九面の出土鏡と同型鏡で、古墳時代中期の特徴を有する画文帯環状乳神獸鏡などが発見されたことから、古墳であることが確認され、吉備塚から北西一〇〇メートルほどの場所にある玄昉の墓と伝えられる頭塔の下部の古墳や北へ三〇〇メートルほど行った、現在鹿苑と呼ばれる草原が広がる飛火野の春日山古墳群などの近辺に広がる一連の古墳の一つと考えられている。その後、平成十年、十四年、十五年と調査が行われた。以下は、岡本が『吉備塚古墳の調査』中の調査報告をまとめたものである。

まず、平成十年の調査では、花園大学によって墳丘の測量が行われ、規模と墳形が明らかにになった。

平成一四年の調査では、五世紀後葉から六世紀初頭の埴輪片が、中世から近世の整地層から灯明皿片や布目瓦片が、表土層からは銭（寛永通宝）や灯明皿が出土した。また、墳頂部からは、挂甲や鉄刀

平成一五年の調査では、南北に第一、第二埋葬施設が確認された。南側の第一埋葬施設は、箱形木棺の直葬で、この調査の区画以外は未掘だが、画文帯環状乳神獸鏡やガラス小玉が出土した。北側の第二埋葬施設は、割竹形木棺直葬で、挂甲や三累環頭大刀、馬具類、貝装雲珠が出土した。

三累環頭大刀は刀身に人物像・龍虎・植物の文様が表され、三累環式の柄頭には、その中央に神像を配する他に類をみないきわめて貴重な遺物であり、中国神仙図像の日本への伝播や日本における神像の成立に示唆を与えるものである。

以上の調査から、第一埋葬施設および吉備塚古墳の築造は六世紀初頭が妥当とされ、第二埋葬施設の被葬者は、その副葬品から特殊な地位や役割の武人、またはそれに類する人物の古墳ではいかと推定される。³³

『続日本紀』の宝亀元年（七七〇年）十月の条³⁴や宝亀六年（七七五年）十月の条³⁵によると、吉備真備が生まれたのは、持統六〜九年（六九二〜六九五）のことと考えられる。つまり、六世紀初頭の築造とされる吉備塚とは時代がまったく合わないのである。この点から吉備真備の墓と伝えられる吉備塚古墳の埋葬者が、吉備真備であるということはありえないことであり、その作られた背景にも、吉備真備と関わりがあるとは考えられないのである。

第二節 吉備塚伝承の成立

第一節で見てきたように、吉備塚古墳が作られたとされる時代と真備が活躍した時代とは二〇〇年近い差があり、この吉備塚古墳が、吉備真備の墓であることはありえないことである。しかしながら、この吉備塚は、いつのころからか吉備真備の墓として語られ、現在にまで至り、さらに、周辺地域に様々な伝承を生み出してきた。

では、吉備塚古墳を吉備真備の墓とする伝承は、どういう人たちによっていつ頃成立したのであろうか。

i 地誌に描かれた吉備塚

現在、吉備塚の名を、確認することができる最古のものは、江戸時代に書かれた奈良の地誌である。吉備塚が記載されている地誌は五つある。その中で、最も古いものが延宝三年（一六七五年）に書かれた次の『南都名所集』である。

又此社の坤の方に、吉備大臣の塚あり、名付て吉備が塚といふ、寶龜元年十月二日に
薨ぜらる、此大臣遣唐使にて、唐へ渡られし時、唐人等はちて相議していはく、我等女
からぬ事なり、をとるべからず、先楼にのぼせて心みるべし、偏に殺さば不便なり、
帰すも又はしなしなど議定し、先楼に居しむる間、夜深更に及び作りて、鬼にみゆる

（以下略）



36

(右下の塚が吉備塚)

ここでは、吉備が塚と呼ばれ、吉備大臣の塚、つまり墓とされている。画像の中の、右下の松が生えた塚が吉備塚で、横では耕作らしきものが行われている。近隣の人々にとつては、身近なものであったのだろう。この引用では冒頭のみを載せたが、その後には吉備真備入唐説話が続いて書かれている。

また、文中に「此社」とある。これは、画像の中にある社のことで、現在も吉備塚から北東の方角の新薬師寺に隣接する鏡神社のことである。鏡神社の近くに吉備塚があったことが、よく分かる。

この『南都名所集』は当時の観光案内のようなものである。その中で、図と共に吉備塚が紹介されているということは、よく知られた名所の一つであったのだろう。吉備真備の墓という伝説があったからこそ人々が訪ね、名所となったのであろう。

二つ目に挙げるのが宝永二年（一七〇五年）に書かれた『奈良名所絵巻』である。これには、興味深い絵が掲載されている。



37

詞書

吉備塚

在鎧地藏東南田

間右大臣吉備墓

宝亀元年十月

二日薨斯所云々

まず、詞書に「在鎧地藏東南田」とある。しかし、鎧地藏がどういうもので、どこにあったのかが分からないため、場所の特定はできないが、田の中にあっただのである。このことは、吉備塚の横で耕作らしきものが行われていた『南都名所集』に通ずるものがある。

また、「宝亀元年十月二日薨」とあり、真備の死亡を宝亀元年（七七〇年）の十月二日としている。この点も『南都名所集』と同様である。しかし、『続日本紀』の真備が亡くなった時の記事は、宝亀六年（七七五年）十月の条に書かれている。史実とは異なった伝承が伝えられていたのかもしれない。

絵には、吉備塚に対面する形でむしろを敷いて座っている人物が描かれ、吉備塚とされる古墳に向かって何かを行っている。この絵に関する考察については、後で詳しく見ていく。

次に、享保一五年（一七三〇年）成立の『奈良坊目拙解』と享保二十一年（一七三六年）成立の『大和志』、寛政七年（二七九五年）成立の『平城坊目考』の三本にも吉備塚の記述が見られる。

『奈良坊目拙解』（享保一五年（一七三〇年））

○幸下の町

○吉備塚 在於當郷東南野中、存松樹三四株於岳上而回各

為田畠矣

自古來傳伝、吉備大臣真備公古墳也云云³⁸

『大和志』（享保二十一年（一七三六年））

吉備ノ墓 在高畑村³⁹

『平城坊目考』（寛政七年（一七九五年））

幸下の町

吉備塚 當郷の後東の野中に在是亦其證なり云々⁴⁰

吉備塚または吉備の墓とされるものがあることを記録している。また、『奈良坊目拙解』には、『南都名所集』と同様に吉備真備入唐説話の内容が記述されている。

以上のように、江戸時代初期から中期にかけての多くの奈良の地誌において吉備塚を吉備真備の墓として記している。これらの記事から少なくとも江戸時代初めの頃の延宝三年（一六七五年）以前には吉備塚が吉備真備の墓とされていたことは確かである。この時期には、吉備塚が広く知られた吉備真備の伝説を伝える場所の一つであったと考えられる。しかしながら、江戸時代以前の記録は、今のところ確認することができない。

ii 地域に伝わる吉備塚伝承

吉備塚のような吉備真備の伝承は、近代になっても途切れることなく吉備塚の周辺地域の中で語り継がれていく。高田十郎によってまとめられた『大和の伝説』（一九五九年）には、次のような記述がある。

奈良市の東南端、鳴かず川の南側、学芸大学の構内（旧三八連隊管内）に、吉備塚と称する塚がある。吉備真備の墓地だといわれている。昔から、さわればたたりがあるといわれ、兵営設置前から、田圃の中で一鍬をも入れず、自然のままに残されてきた。

四

一つは吉備真備の墓であるということ、もう一つは触ればたたりがあるということが記録されている。

また、吉備塚から北東にある新薬師寺に隣接している鏡神社の宮司梅木春雅氏から聞き書きしたものは次のようなものがある。

- ・昔から崇りがあるから、触ったり近寄ったりしてはいけないと言われていた。
- ・子どもが触っていたら鏡が出てきたので、鏡神社がおはらいをした。
- ・木を切ったり、土を掘ったりして改装や縮小をすると人が亡くなる。
- ・基地にいた外国人が掘っていたら、原因不明の病気になった。
- ・人がまったく近寄らない時代があった。^五

梅木宮司の話にも、吉備塚に関わると死んでしまうとか、病気になったなどといった、たたりと関わった伝承が言い伝えられている。

さらに、梅木春雅氏によると吉備塚の伝承については氏の兄春和氏が、詳しくたたりであるが、すでに亡くなっており、お話を聞くことはできなかった。しかし、春和氏は「吉備塚縁起」^六という形で自ら聞き書きしたものをまとめており、そこには吉備塚に係る伝承が詳しく記録されている。以下はそれを整理したものである。

下高畑町 井岡楯清氏

○明治四十年ごろに、五十三連隊をこしらえる時、大林組の佐藤某が吉備塚の一角を崩し始めたところ、細い白蛇が出てきて睨んだ。彼はびっくりして発熱し、丹坂町の長谷川旅館で療養することになったが、蛇のような挙動をするので、蛇の霊に取憑かれたということになり、滝坂の妙見さんに籠らせた。祈祷を繰り返した挙句の果て、「障子を開けてくれ」というので開けてやると回復した。その後、何回も兵隊が崩そうとするが、みんな原因不明の病気になったり死んだりすることがあった。

○吉備塚は吉備大臣の邸跡で、吉備塚にこもる大臣の霊が毎夜、清明塚へ通われた。

44

高円町 川口平七氏

○九州から玄昉の首が飛んできた。首は連隊の隅のところへ落ち、そこをクビ塚と言っていたのが訛ってクビ塚と言うようになった。

○吉備大臣が勉強している時に、蛙がうるさく鳴くので声を封じた。そのため、その川を「鳴かず川」と言い、下流の方はかまわないと言われたので、「鳴る川」と言う。⁴⁵

連隊本部勤務 笠谷利雄氏

○吉備塚は、元は円墳かと思える形で、南側に小さい五輪塔のようなものが立っていた。草をむしっても腹痛が起るといわれる。

○吉備大臣が清明塚へ通われた、という伝えがあり、その道が続いている。この道を冒して家建てた人は良くないことが起る例が多い。暮六つの鐘が鳴ると、吉備大臣が安倍清明さんのところへ通われ、その姿を見ただけでも死ぬと伝えられている。⁴⁶

以上、地域に伝わる吉備塚伝承を見ていくと大きく三つに分類することができる。

① たたり

『大和の伝説』や鏡神社宮司梅木春雅氏の談にもあったように吉備塚に触ったり、工事をしようとしたら病気になったり、死んだりしてしまうと語られている。それは、「はじめに」でも記述したように現在にも、奈良教育大学の学生の間で新たな話形を形成しながら連綿と受け継がれているのである。また、たたりを受けるのは基地にいた外国人であったり、大林組の佐藤某であったり、校長であったりどのような人であっても吉備塚のたたりを避けることができないという点は注目すべき点である。このような吉備塚に対する畏敬の念は、梅木氏によると人がまったく近寄らない時代があった程であったようである。

つまり、この地域の人々にとってこの吉備塚は恐れ敬うべきものであり、不可侵の聖域

であったのであろう。それは、同時に吉備塚の主である吉備真備をも神聖化しているということでもある。

② 鳴る川

二つ目が「鳴る川」と呼ばれる川にまつわる伝承である。『大和の伝説』にも次のように記録されている。

昔、吉備真備が、この川のあたりで勉強していたころ、蛙の声が邪魔になるので、神仏を念じて一首の歌をよむと、たちまちその声が止まり、下流数百メートルのところからまた鳴き声をたてた。「なかず川」とはこれから起こった名で、下流のことは「なる川」と呼んだ。き

吉備真備が勉学の邪魔だと蛙の声を術によって封じてしまったため、この川では蛙が鳴かないのだというものである。この伝承は梅木春雅氏によると、鏡神社の前を流れる小さな川のこと、別名を「音無川」と呼び、この川がこの周辺の文化を作ったそうである。

このように術によって生き物を封じるといふ伝承は、貞享元年（一六八四年）に在田軒道貞によって書かれた岡山の地誌『吉備物語』に次のようなものがある。

夜学の障りとして清明符メイマじこめたりとして其屋鋪に蚊なしとなん。ま

吉備真備ではないが、安部清明が勉学の妨げとなるので、蚊を封じたというものも見られる。

やはり、この伝承の背景には、学者としての吉備真備像と、特殊な術を使う陰陽師としての吉備真備像の二つがあるだろう。また、安部清明にも同じような伝承があることから、術によって不思議な現象を起こす呪術者・陰陽師としての姿が強く影響していると考えられる。

③ 清明塚

三つ目が「清明塚」に関わるものである。この清明塚であるが、現在のところ地誌などの文献にはまったく見ることができず、いつごろ建てられ、どのようなものであったか分からない。しかしながら、梅木春雅氏によるとバス道から鏡神社に行く道の途中にあったようだが、詳しい位置は失念したそうである。そこには、十三重の塔があったが現在は般若寺に移動させたというお話であったのだが、般若寺の工藤良任氏によると般若寺に十三重の塔はなく、関わった記録もないということである。しかし、人から聞いた話では、氷室神社宮司の大宮氏の家が高畑町にあり（現在は移転しているそうである）、その一角に晴

明塚はあったのではないかということである。

晴明塚についての詳細は不明であるが、この地に安部晴明の塚があり、そこに毎夜、吉備真備が通っていたという伝承が伝わっているというのは大変興味深いものである。前述の通り、『篋篋抄』において吉備真備は陰陽道の聖典たる『篋篋内伝』を日本へ招来した人物であり、それを受け継いだのが安部晴明である。いうなればこの二人は陰陽道における二大大家なのである。この二人の伝承が重なり合うようにして高畑の地で語られているということは、この地に陰陽道の影響があることを窺わせよう。さらに、その二人の密会の姿を見ると死んでしまうという言い伝えには、卜占や呪術に関わる特異な能力を持った二人に対する畏怖すら感じられるのである。

また、この地域には「破石（わりいし）」と呼ばれる史跡がある。この石は、藤原氏・吉備氏・阿部氏の境界を示す境界石であると言われている。石には十字の傷があり、東南は藤原氏、南西は吉備氏、東北は阿部氏の領地とされている。また、さらに具体的に、東南は藤原広嗣、南西は吉備真備、東北は安倍晴明とする伝承も伝えられている。

実際、この石から東南の方向には藤原広嗣を祀った鏡神社が、南西の方向には吉備塚が、大体の方角ではあるが、位置している。東北の方角に晴明塚があったとも考えられるだろう。

現在のところこれらの「破石」に関する伝承が事実であったかは、確認することができない。しかし、この地域がこのような伝承を生み出す何らかの力を持っていたことは確かなのである。

iii 吉備塚を祀る人々

周辺地域に伝わる伝承を見ていくと、そこには陰陽道の影響を窺わせるような内容が多く確認できた。さらに、もう一つ吉備塚が陰陽道と深く関わっていることを感じさせる伝承がある。それが、吉備塚を先祖の墓として祀っている人々の存在である。

梅木春和氏が「吉備塚縁起」の中で、陰陽町の中尾氏と言う人物の次のような話を記録している。

御先祖の吉備大臣をお祀りしてあるのが吉備塚である。十月二日の御命日にはお参りします。ところが、私の家の位牌には賀茂〇〇と書いている。⁴⁹

ここで注目すべきは、御先祖の吉備大臣をお祀りしているという点である。後で詳しく考察していくが、この中尾氏というのは、奈良町の陰陽町にいた陰陽道家の一つである。賀茂氏の流れを汲む幸徳井家の衰退に伴い、曆を作製し、売っていた。つまり、陰陽師の後継の家が、その先祖を吉備真備と伝えているのである。

また、前掲のように、宝永二年（一七〇五年）に書かれた『奈良名所絵巻』には、次の

ような絵が見られる。



詞書
吉備塚
在鎧地藏東南田
間右大臣吉備墓
宝龜元年十月
二日墓斯所云々

この絵は、吉備塚を描いたもので、中央にみえる松の生えた小高い場所が吉備塚である。吉備塚に対面する形でむしろを敷いて座っている人物が描かれている。やや見えにくいのであるが、吉備塚と人物の間には、幣が二本立てられ、その真ん中に皿が一枚置かれている。吉備塚の後ろに描かれているのは、案山子や鳴子があることから田んぼと思われる。

注目すべきは、吉備塚の前にいる人物で、この人物の服装は烏帽子に衣冠束帯姿と、『東
北院歌合絵巻』（鎌倉時代）（図Ⅱ）に描かれた陰陽師の服装とよく似ている。

さらに、『不動利益縁起』（鎌倉時代）（図Ⅲ）に陰陽師が、病にかかった僧のために祈祷をする場面が描かれている。ここでは、右手にむしろを敷いて座っている人物が、祈祷する陰陽師である。この陰陽師は安倍晴明かと推定されている。ここでは、陰陽師が右図のごとき作法によって、師僧についた疫鬼を身代わりとなる弟子僧にうつし、師僧の病を治癒するのである。この『不動利益縁起』に描かれている、陰陽師が座り、その前に幣などを立てて祈祷を行っている場面と、『奈良名所絵巻』に描かれている場面とは共通した要素が多く見てとれる。『奈良名所絵巻』に描かれているこの人物は、僧侶でも、神官でもなく、陰陽師と見てよいだろう。

以上の点から、この『奈良名所絵巻』に描かれているこの絵は、恐らく、陰陽師が吉備塚の前で、先祖としての吉備真備を祀る先祖祭を行なっている場面ではないかと推察される。

この絵が掲載されている『奈良名所絵巻』が書かれた宝永二年（一七〇五年）の頃においては、中尾氏が言っていたような吉備塚を先祖墓として祀ることが陰陽師によって行われていたことが見てとれる。



52

(図II)

以上のように、吉備塚は、吉備真備を祖とする一部の陰陽師たちにとっては、祖先の墓とする重要な場所であった。しかし、先に見たように、吉備塚は六世紀初頭の古墳とされており、吉備真備の墓ではありえないのである。

第三節 中世南都の陰陽師たち

吉備塚があるこの南都の地には、三種類の陰陽道に関わる人々が確認される。一は横行や声聞師と呼ばれる人々、二は賀茂家から分かれた幸徳井家と呼ばれる人々、三は前述した陰陽町に住んだ陰陽師たちである。三つの陰陽道に関わる存在について、以下に考察を加えていく。

i 横行・声聞師

中世の南都には、「横行」と呼ばれる人々の姿が確認できる。彼らは寺社の支配下にあつて、清掃や浄化などの仕事を請け負うなどした人々であった。奈良の興福寺辺りや法隆寺周辺など各地に存在していた。

この「横行」と呼ばれる人々が最初に登場するのが『御参雑々記』の文永二年（一二六五年）十二月の春日社参詣のために奈良を訪れることになった関白一条兼経を迎える準備をしている時の記事である。

逆野辺掃除等事、横行併細工役、但下知ハナシハ

この中で横行は逆野辺の清掃を興福寺から命じられている。奈良県立同和問題関係史料



53

(図III)

センター編『奈良の被差別民衆史』によると、逆野辺は、「逆」は坂、「野辺」は墓場とし、「坂にある墓地」としている。この時期の奈良における「坂にある墓地」は、東大寺の北、奈良坂にある般若寺近くの墓地と考えられる。その掃除を命じられているということは、ただの掃除ではなく、死体の処理などを行なったのではないかと推測され、そうした役割を担って寺社の支配下に置かれていた人々であったのであろう。しかしながら、横行は、どういう人々であったか詳しくは分からず、『奈良の被差別民衆史』に従って「おうこう」と呼んではいるものの、その読み方すら分からないのである。

では、この「横行」はどのように陰陽道と関わっているのであろうか。それを示すためにはいくつかの資料を見ていかなければならない。まず、経覚の日記である『経覚私要鈔』を見てみる。

宝徳三年（一四五一年）二月

元興寺領 横行兩座五ヶ所共以召出了ま

十座、

横行に二つの座があったことが確認でき、それぞれ五ヶ所と十座と呼ばれていたようである。この五ヶ所と十座であるが、尋尊らによって書かれた日記の『大乘院寺社雑事記』では、次のように書かれている。

文明九年（一四七七年）五月十三日

五个所聲聞ハ、根本木辻子西方、西坂北方京ハテ・貝塚・鳩垣内以此五个所為根本在々所々ニ居住スル者也 東方、 南方

（中略）

自大鳥居北ハ悉以為芝辻子根本在々所々号十座唱聞テ門跡并寺門奉公致其沙汰也。自大鳥居南ハ号五个所シ門跡奉公一向致其沙汰計也計

ここでは、大鳥居を境として南北にこの五ヶ所と十座の二つの座はあったことが分かる。しかし、五ヶ所と十座は横行ではなく、「声聞」や「唱聞」とされている。これらは、声聞師（唱聞師）のことを言っていると考えられる。声聞師（唱聞師）とは『大乘院寺社雑事記』文明九年（一四七七年）五月十三日の別の記事によると次のような職能の人々である。

文明九年（一四七七年）五月十三日

唱聞之沙汰条々、陰陽師・金口・曆星宮久世舞盆彼岸経・毘沙門経等芸能、七道者自

専事事

唱聞の沙汰として、陰陽師、金口、曆星宮、久世舞、盆彼岸経、毘沙門経の六つが挙げられている。この中にはつきりと陰陽師と出てきている。南都では陰陽師のような仕事を行なう人々として声聞師（唱聞師）達は知られていた。

横行と声聞師（唱聞師）との関係についてはいくつかの可能性が考えられる。一つは、横行が先行し、のちに声聞師（唱聞師）らが現われたという可能性。一つは、両者が共に活躍していた可能性。最後に、もう一つが、横行と声聞師（唱聞師）が同じような活動をしていた限りなく近似した存在であった可能性である。様々な可能性が考えられるのであるが、はっきりしたことは分からない。

しかし、十五世紀のころ、この五ヶ所と十座には、少なくとも横行や声聞師（唱聞師）と呼ばれる人々が、居住し活躍していたことは確かなことである。

さらに、『大乘院寺社雑事記』寛正四年（一四六三年）十一月二十三日を見ると、五ヶ所と十座を知る上で興味深い記事がある。

寛正四年（一四六三年）十一月二十三日

七道者共ハ悉以十座五个所之進退之由申披由也

七道者

猿楽 アルキ白拍子 アルキ御子

金タヽキ 鉢タヽキ アルキ横行

猿飼ゑ

「七道者」と呼ばれる芸能者たちを五ヶ所と十座が支配すると主張し、統括する座（集団）として機能している。五ヶ所と十座は、猿楽や白拍子といった様々な民間の芸能者たちを束ねる存在であったようである。また、推測ではあるが「七道者」の中に「アルキ横行」とあることから横行と声聞師（唱聞師）には、支配関係があった可能性も考えられるだろう。しかしながら、横行が芸能者の一つであったことは確かなようである。

では、五ヶ所と十座の人々はどうのようなことを行なっていたのであろうか。一つは『奈良の被差別民衆史』によると興福寺や大乘院などの先に挙げた掃除などの様々な雑務を行なっていたようである。もう一つは、『大乘院寺社雑事記』長享元年（一四八七年）十一月十五日の記事に次のような記事がある。

長享元年（一四八七年）十一月十五日

弥勒御堂阿伽井事、今日事初、土供祭之、十座者也ゑ

弥勒堂がどこにあったものか分からないが、その阿伽井を掘る時の記事であろうか。十座のものが土供を祀る儀式を行なったと記録されている。土供とは土公とも表記し、五行説における土ニ中央を司る神のことである。『吾妻鏡』嘉禎元年（一二三五年）二月に次

のような記述が見られる。

三日日丙寅。於五大尊堂地。被始行土公祭。陰陽道相替連日可奉仕之由云々⁸⁰。

陰陽師が交代で土公祭を行ったとしている。陰陽師が地神を祀る祭祀を行っていたことが推察される。つまり、十座の人々が陰陽道の祭祀の一つである土公祭を行っているのである。やはり、先に挙げた声聞師（唱聞師）と同様に十座の人々も、陰陽師と同様の職能を行っている。また、十五世紀中期に成立したと考えられる⁸¹『大乘院門蹟領目録』には、五ヶ所についても次のようにある。

五ヶ所唱門（中略）曆新座本座⁸²。

この資料からだけでは詳しいことは分からないが、五ヶ所の人々によって曆の配布などを行ったのであろう二つの座があったことが確認できる。後で詳しく見ていくが、近世において、奈良では陰陽師たちが作曆や曆の頒布を行っていた。この資料から、それ以前の中世に五ヶ所の声聞師（唱聞師）たちも作曆や版曆などの陰陽師の仕事に携わっていたことが推察される。

以上のように、横行の座として見られた五ヶ所と十座であったが、いつのころからか横行の名は消えていき、『大乘院寺社雑事記』に陰陽師として記録される声聞師（唱聞師）の名しか見えなくなっていた。横行と声聞師（唱聞師）とが、相互に関わりがない、別種の存在と考えるのは難しい。ただ、資料がないため確かなことは言えない。

中世の初めのころから、この南都の地には、五ヶ所や十座と呼ばれる横行や声聞師（唱聞師）といった寺社に支配される下層の宗教者たちが活躍していた。彼らは、次で見ていく幸徳井家が南都の陰陽師たちを統括する以前に、陰陽師と同等の呪術に関わっていたと考えられるのである。

しかし、現在、横行や声聞師（唱聞師）の活動の中では、吉備塚との関わりは見えてこない⁸³のである。

ii 幸徳井家

奈良奉行の与力玉井与左衛門によって宝永年間（一七〇四〜一七二一年）前後に記録された『大和名勝志』の中に次のような記述がある。

符天曆鈔奥書曰家傳曰平城京四箇陰陽家

滋野朝臣家

神彖命子天道根命末孫也

吉備朝臣家後改賀茂朝臣

孝靈天皇子稚武彦命末孫也

阿倍志斐連

孝元皇子大彥命末孫也

橘朝臣

敏達天皇皇子難波皇子末孫也⁶⁷

滋野朝臣家、吉備朝臣家、阿倍志斐連、橘朝臣と平城京に四つの陰陽道の家があったと書かれている。先に挙げた横行や声聞師（唱聞師）のような民間の陰陽道的な宗教者だけでなく、奈良の地には、有力な陰陽師が住んでいたことが推察される。

その中でも注目したいのが、「吉備朝臣家」である。ここでは、後に「賀茂」と改めたとあり、恐らく安倍氏と並ぶ陰陽道家の賀茂家の事を言っているであろう。実は、この南都には、賀茂家の流れを汲む幸徳井と呼ばれる一族がいたのである。林淳氏の『近世陰陽道の研究』⁶⁸や渡辺敏夫氏の『日本の暦』⁶⁹によれば、幸徳井家は、十五世紀の頃、賀茂友幸という人物を初代とし、多数の陰陽頭を輩出した南都の有力な陰陽道家であった。初代の友幸は、明徳二年（一三九一年）に安倍友氏の息子として生まれ、応永二十六年（一四一九年）に賀茂家の養子となり、幸徳井家の初代となったという。

幸徳井の南都での活動は、後で確認する幸徳井が最初に住んだとされる幸下の町が、興福寺領でもあったことから分かるように、興福寺と深く結びついていた。『大乘院寺社雑事記』を見ると、幸徳井家と興福寺の門跡寺院である大乘院との関係がうかがわれる。

享徳三年（一四五三年）九月

仰付従三位友幸荒神供沙汰了⁶⁸

まず、ここで挙げた記事は、『大乘院寺社雑事記』における幸徳井初代友幸の初出である。ここでは、どのようなものか詳細は分からないが、「荒神供」と呼ばれる儀礼を仰せ付かっている。

また、長祿二年（一四五八年）閏正月の記事には次のようにある。

長祿二年（一四五八年）閏正月

撫物幸徳井三位申出間遣之了⁶⁷

ここでは、幸徳井が穢れなどを移す撫物を申し出たとある。この記事が、「幸徳井」の初出となっている。ここに見える「幸徳井三位」は、後掲の資料からも分かるように、友幸

のことであろう。これらの資料から、友幸の時代には、「幸徳井」を名乗っていたことが裏付けられる。それと同時に、十五世紀半ば、幸徳井の陰陽師としての活動は、当初から大乘院と結びついて確かに行われていたことが分かる。

次には、『大乘院寺社雑事記』に見られる幸徳井の働きが分かるものをいくつか挙げておく。

長祿元年（一四五七年）十二月

従三位友幸新曆并八卦進之記

寛正四年（一四六三年）十二月

八卦并新曆一卷正三位友幸進之記

文明二年（一四七〇年）十二月

幸徳井従三位友重新曆八个進之記

文明三年（一四七一年）十二月

節分析禱撫物幸徳井申出之并新曆一卷進（中略）八卦同進之記

定期的に曆や八卦を進上するとか、祈禱を行ったということが見られる。大乘院に対して、新曆や八卦を進上するといったことが、幸徳井の主要な職掌であった。この他にも、『大乘院寺社雑事記』には二〇〇を越える幸徳井に関する記事が見られ、幸徳井と大乘院とが密接に結びついていることが窺われるのである。

ちなみに、右に見える「友重」とは友幸の跡を継いだ二代友重のことである。『幸徳井系図』¹⁾には、初代友幸以来の系譜が次のように示されている。この系図は残念ながら由来が定かでないものである。事実とは言えないが、おおまかな記述として見れば、『大乘院寺社雑事記』と一致している。

<p>修徳大実 正三位 初名友徳 實兵衛前親部友重二男 大和國河内郡村宮郷高橋 幸徳井別名家シテ居ケル 明應二年辛未生</p>	<p>友幸 正三位内少輔 康永二十五年八月七日任修理亮 改名友幸 明應二十六年 月 日 北私學子 改修加賀親臣 明應三十年十月廿五日 任 明應三十八日 兼 兒 子 登 藤 上 岡 下 於 仙 洞 御影 藤 原 人 百 景 也 丸 也 (中略) 文明五年 月 日 日本八十三歳</p>	<p>友重 正三位内少輔 貞和少輔從五位上 生 大永三年十月二日 叙從五位下 開元正月廿八日任其部少輔 天文十五年正月十日卒</p>
<p>友胤 刑部卿從四位上 功名修理</p>	<p>友策 室内卿正四位上</p>	<p>友祐 兵部少輔從五位上</p>

こうした陰陽師としての活動は、その後も連綿と続けられ、昭和十四年に書かれた『奈良名産史』には次のようにある。

明治三年

十一月十七日

春日大鳥居の

西に於て

幸徳井従四位

清祓する

図



75

明治三年（一八七〇年）の十一月十七日に執り行われた春日大社のおん祭のことであろうか、春日の大鳥居において祓いを行っている。その姿は、先に見た『奈良名所絵巻』の陰陽師に通ずるものがある。中世の頃から近代の明治の頃まで幸徳井は奈良の地で陰陽師として活躍していたのである。

このように、幸徳井家は、中世のころから近代に至るまで南都の地において活動した陰陽道の家であった。その活動には、興福寺の門跡寺院である大乘院との深い繋がりが見られる。前述した横行や声聞師（唱聞師）も大乘院などの寺院の支配を受けた下層の宗教者たちであった。中世の頃に、南都において陰陽道に携わった人々が、共に大乘院と何らかの関係を持っており、幸徳井家と横行・声聞師（唱聞師）とが無関係であったとは考えにくい。

寛文十年（一六七〇年）に、土御門家が南都の声聞師に配下の免許を与え、陰陽師としての装束を許可したことをきっかけにして、土御門家と幸徳井家との間で声聞師（唱聞師）支配を巡る争論が起こった。³³その折、延宝三年（一六七五年）に幸徳井から朝廷に提出された「口上之覚」に次のような記述がある。

社家も拙者も唱聞師も無其別一ツニ成候事歎敷奉存候、第一今迄拙者被官家来之様ニ仕候者肩をならへ候段迷惑ニ奉存候³⁴

社家や自分たちと唱聞師が同じ身分のように扱って区別がなくなるのは歎くべきことであると訴えている。しかも、その「被官家来」のように扱っていた者と肩を並べるのは迷惑なことだと言っており、唱聞師を家来としている。このことから分かるように、幸徳井は声聞師（唱聞師）らを自分たちの家来として支配していたのである。つまり、幸徳井は先に見た五ヶ所や十座といった南都の民間の宗教者たちを束ねる存在であった可能性が強い。南都において幸徳井家は、陰陽師の中核的な家であったに違いない。

南都において横行や声聞師（唱聞師）といった民間の陰陽師たちを統括し、活動する家

であった幸徳井家には、吉備塚とも深い関わりがあった。幸徳井家と吉備塚との関係を示すものの一つが居住地である。幸徳井家の居住地については『奈良坊目拙解』と『平城坊目考』に次のような記事がある。

『奈良坊目拙解』

○幸下之町

往昔陰陽博士幸徳井氏族 加茂氏吉備大
臣真備末孫也 住居于此所也、今在古井於當町人家裏号幸

徳井、是即居地ノ遺跡也、

(中略)

幸徳井累世在于當郷吉備塚北邊乎⁸¹

『平城坊目考』

幸下の町 興福寺領

古翁云往昔幸徳井 陰陽博士加茂氏
吉備大臣末孫云々 當郷に住居す 今古井有て即幸徳井と号す是

其舊所の遺趾あり於幸井と号すと云々⁸²

この幸下の町は、現在の幸町や高畑町のあたりで、ここに幸徳井家が居を構えていたとある。そこには、幸井や幸徳井と呼ばれる古井があり、幸徳井家の名前はそれに由来するという。残念ながら現在、この古井は確認することができない。幸徳井が住んでいたことから古井を幸徳井と呼ぶようになったのか、それとも、賀茂友幸が幸町に移り住み、その古井の名にちなんで幸徳井と名乗るようになったのかは、右の資料からは明らかでない。しかし、南都の幸徳井が幸町の古井と古くから何らかの関係があったことは想像できよう。祓えなどを職掌とする陰陽師にとって神聖な水は不可欠なものであった。常陸の国猫島の有名な陰陽師高松家のように敷地内の湧き水を聖なる「随心水」として配り歩いた例もある。⁸³

しかし、幸徳井家はずっと幸下の町にいたわけではないようである。『奈良坊目拙解』には次のようにある。

○幸下之町

幸徳井累世在于當郷吉備塚北邊乎、其後移居于野田村山上

(中略)

○野田山上村

幸徳井移住居ヲ於京師京極今出川邊ニ²⁸

野田山上村は現在の県公会堂の辺りで、そこに幸徳井屋敷があり、幸町から移り住んだとある。さらに、その後、京都の今出川の当りに移ったとしている。『奈良坊目拙解』が書かれた享保一五年（一七三〇年）の時点で、奈良に住んでいなかった可能性がある。この十八世紀前後は、友景、友種、友傳と三代に渡って陰陽頭を務めた時代であった。そのため、この時期は、幸徳井がそれなりに力を持ち、王朝との関係も親密であったろう。今回資料を確認することができなかったのであるが、『近世陰陽道の研究』記載の『土御門泰重卿記』の元和二年（一六一六年）の記録に

御曆ハ南都幸徳井進上仕之由承候。²⁹

とあり、曆は幸徳井家を作り、院御所に曆を進上している。そのため、奈良のみでなく京都にも拠点を持っていた可能性は十分に考えられる。しかし、この時期の幸徳井家は「南都幸徳井」とあるように朝廷からも、南都の陰陽師として知られていた。このことから、奈良以外の活動もあったが、この時期においても幸徳井家が、南都において絶大な力や影響力をもっていたのは確かであろう。

さて、ここで再び『奈良坊目拙解』に戻って、注目したいのが「幸徳井累世在 當郷吉備塚北邊乎」という記述である。ここには、幸徳井が吉備塚の北辺りに住んでいたとある。実は、先に見た幸徳井家が住んでいたとされる幸下の町は、吉備塚がある地でもある³⁰。さらに、前に挙げた『幸徳井系図』³¹の友幸の項の傍注には次のように記されていた。

大和国南都畠幸村吉備墓邊幸徳井側ニ家シテ居ル³²

幸徳井家の邸宅が吉備塚の近くにあったとある。初代友幸の時代から、幸徳井家の居住地が吉備塚の「側」であったと伝えられている。

このように、時代と共に、幸下の町から野田山上村、京極今出川へと移ってはいるものの、記録として残っている南都最初の幸徳井家の居住地は、吉備塚の近くであった。

また、前述した『奈良坊目拙解』には「加茂氏吉備大臣真備末孫也」とあり、『平城坊目考』には「陰陽博士加茂氏吉備大臣末云々」とある。どちらも賀茂氏が吉備大臣の末孫にあたるとしている。幸徳井家も賀茂氏の流れを汲む家であり、吉備真備は自分たちの祖とする存在であったろう。

この居住地が吉備塚の近くであるということと幸徳井家の祖を吉備真備としていることは決して偶然でないだろう。自分たちの祖とする吉備真備の墓の近くに住むことは十分考

(中略)

幸邑ノ南竹藪ノ下ニ二間四方程モ有ク池澤ノ如ク残レルツ幸徳井ト申シ傳フ是ヲ次第ニ藪モ開キ屋敷モ開キテ田地トナレ今ハ終ニ田畠ニノコリテアル民コレヲ田トスルモノ崇ヲ受ルトテ注連ヲ引テ印トスルト語ル

(中略)

吉備塚ト云ウモ次第ニスカレテ田トナリ今は終ニコレリ彼幸徳井モ今ハ弘弘知人モ希ナランカ

右は幸徳井民部ノ助五條孝的友信カ注進ナリ也。

ここでは、長久元年（一〇四〇年）に安倍弘継が幸町に居住し、治暦元年（一〇六五年）から幸徳井と名乗るようになったとある。先に挙げた幸徳井の初代とされる友幸が活躍した時期とは三〇〇年以上の差がある。つまり、友幸以前に奈良と幸徳井とが深い関係にあった可能性が考えられるのである。

この系図は「右は幸徳井民部ノ助五條孝的友信カ注進ナリ也」とあるように十二代目（一六七九〜一六八五年）の頭首幸徳井友信によるものである。賀茂氏の流れを汲むはずの自分たちの系図を、当時、力を持っていた安倍氏と結び付けているのは興味深い。

この資料については検討が十分でなく、現在のところはつきりしたことが言えない。十一世紀の頃に、幸徳井がいたかどうかは、右の資料だけでは判断できない。しかし、すでに、一二〇〇年代には、横行と呼ばれる人々が存在していたのは、前で見たとおりである。

十五世紀半ばくらいにおける初代友幸の高畑移住以前に、すでに、陰陽師系の集団が居住して、吉備塚と関わりを持っていた可能性も否定できない。

幸徳井家が、いつ頃、南都の吉備塚の近くに移り住んだかを確定することは、現時点では難しいだろう。吉備塚伝承と幸徳井家がどのような関係性にあっただかについては、今後さらなる検討を加えていきたい。

iii 陰陽町の陰陽師

陰陽町と書いて「いんぎよちよう」や「いんようちよう」と読まれるこの場所は、現在、県道四十四号線、通称やすらぎの道から東へ二〇〇メートル程行った奈良市の施設である音声館の北に位置する町名である。町名の通り、昔から陰陽師の住む町として知られている。

陰陽町の陰陽師についてはいくつかの地誌からその存在を確認することができる。まず、貞享四年（一六八七年）に成立した『奈良曝』には、次のようにある。

陰陽町 町役十三軒 高御門町の内より西へ入町、此町の南側二十人陰陽師有、此内

小頭三人、北例二七人有、いにしへより陰陽師住するがゆへかく町の名とす、世の人唱門が辻子と云、唱門と云は門にてとなふるとかきて、人の門々に立て咒文をとなへ其家の祈祷をなす人を唱門師と云⁸⁷

この時点で、すでに陰陽町に二十人の陰陽師がいたことが書かれている。さらに、「いにしえより陰陽師住する」とあることから貞享四年（一六八七年）よりさかのぼることが十分考えられる。

次に『奈良坊目拙解』の陰陽町の部分には次のように見られる。

○陰陽町

俗謂當町曰唱門辻子

(中略)

當名ハ南都四家陰陽師居住其一所也、古老云、當所陰陽師加茂氏苗裔ニシテ而舊年在於吉備塚邊幸町ニ、其後令離散、移居于今地ニ云々⁸⁸

幸町の吉備塚周辺に住んでいた加茂を祖先とする人たちが陰陽町に移り住んだとある。また、「南都四家陰陽師居住其一所」とある。これは、前述した『大和名勝志』の滋野朝臣家、吉備朝臣家、阿倍志連、橘朝臣の四つの陰陽師の家のこと言っていると考えられる。最後に、『平城坊目考』を見てみる。

陰陽町

當町南京陰陽師等住居仍此名と号す亦

里俗唱門ヶ辻子と稱す斯の名是にあらす

當所南都四家陰陽家住所其一所なり

古老曰當所陰陽師ハ加茂氏吉備大臣真備公の裔而古へ吉備塚邊に住す其後令離散して今の地に移ると云々

(中略)

今按に四箇陰陽師ハ山上吉備塚幸町梨子原陰陽町四箇所科乎

(中略)

俗間此町を謂て唱門ヶ辻子と稱す是謬傳て不當の説なり

(中略)

或人の曰往年唱門師當所に住して興福寺に屬す民家を巡視して非常を告知らしむ漫に權威をなす是唱門ヶ辻子と云の言縁なり云々⁸⁹

ここでも、吉備塚辺りに住んだ陰陽師が移ってきたとあり、さらには吉備真備の子孫ともしている。また、「四箇陰陽師」とあり、これも『奈良坊目拙解』と同様に四つの陰陽師のことを指しているだろう。さらには、「四箇陰陽師」は「山上」・「吉備塚幸町」・「梨子原」・

「陰陽町」の四箇所の陰陽師とある。「梨子原」については、よく分からないが、前に見たように「山上」・「吉備塚幸町」は幸徳井の居住地と関係がある場所である。恐らく、時代と共に「南都四家陰陽師」や「四箇陰陽師」は、名ばかりになり、分からなくなっていた。そこで、後世になって、『平城坊目考』が書かれたころの陰陽師たちの活動拠点であったこの四つの地域を充てたではないか。

以上、陰陽町について三つの資料を見てみると、どれも陰陽町の別名を「唱門ヶ辻子」としている。『平城坊目考』においては、「往年唱門師當所に住して興福寺に屬す」ともあり、興福寺の支配下にある唱門師が住んでいたとある。これは、明らかに前に見た横行・声聞師（唱聞師）のことである。陰陽町に住む陰陽師たちが、横行・声聞師（唱聞師）の流れを汲んでいた可能性が考えられよう。

一方では、『奈良坊目拙解』と『平城坊目考』には、加茂氏の子孫であることや吉備塚周辺の幸町から移ってきたことが指摘されている。前述したように、吉備塚周辺に住む賀茂家と関係がある陰陽師といえ、もちろん幸徳井家である。陰陽町に住んでいた陰陽師も幸徳井と関係があった可能性があり、陰陽町の陰陽師たちの故地は、幸町であったのではないだろうか。

この陰陽町には陰陽師の家がいくつかあり、その代表的な家の一つが、前述した中尾家で、もう一つが吉川家である。明治四十二年（一九〇九年）にまとめられたものではあるが、『大和人物志』に次のような記述がある。

賀茂保豊

賀茂保豊は平安期の人、奈良の頒曆師中尾、吉川両家の祖なり。加茂氏は吉備真備の裔にして八世加茂保憲最も奥儀を極め、陰陽頭に任ぜられ、天文博士を兼ねしが天文道は門人安倍晴明に傳へ、曆道は子光榮に傳へたりといふ。保豊は光榮の子なり、家學を受けて陰陽生となり、曆法に精し、奈良幸町の巽位に當れる吉備塚の傍に住し、その地中尾と稱するを以て氏とせり。又、その別家は、吉城川の住所の傍を流るるを以て、吉川と稱したりとぞ。両家共に曆を頒行せしが、後、家を焼失して今の陰陽町に移り、永くその業を繼ぎたりといふ。⁸⁶

この中で、中尾家と吉川家は加茂保豊を祖とする奈良の頒曆師としている。共に吉備塚の傍に住んでいたが、後に陰陽町に住むようになったとしている。しかし、賀茂家の血筋であるにもかかわらず、吉備真備を祖とすることや幸徳井を名乗ってはいない。このことから、この中尾家や吉川家などの陰陽町の陰陽師たちは、南都において幸徳井家とは異なっていた存在の陰陽師たちであったことが推測される。

また、頒曆師とあるが、寛永年間（一六二四～一六四四年）の頃、俳人の松江重頼によって書かれた『毛吹草』⁸⁷の中で、曆は奈良の名産品の一つとして挙げられるほど、広く知られたものであった。延享三（一七四六）年に作られた南都曆にも次のようにある。



92

南都陰陽師という肩書きで、吉川若狹という吉川家の人物が作曆者と書かれている。また、宝曆五（一七五五）年に作られた南都曆には、次のようにある。

寶曆五祀年曆

南都陰陽師

中尾主膳

93

ここでは、延享のものと同様に南都陰陽師という肩書きで中尾家の中尾主膳という人物が作曆者とされている。このように南都曆の作曆者として吉川家や中尾家の名前をはっきりと見ることができ、彼らは南都陰陽師として活動しているのである。

このように、南都曆の作成の中心となったのが陰陽町に住む陰陽師たちであった。彼らによって曆が作られていたことを知るものとして中尾家に伝わる文書がある。

一歴人皇四十四代元正天皇御宇養老元年に吉備右大臣遣唐使帰朝之時七寶を帰国有り其の内第一の寶と申は此曆而御座候其後日本に行曆是也然るに吉備公陰陽頭陰陽職流之もの共に而致曆家業仕候中頃幸と申所に居住仕候其後方々に分れ居申候大和かなと申片かなにて曆也國迄賣曆仕事紛無御座候則ち片かな古曆壹幅御覽に入れ申候

一大經師儀は六十年餘以前迄は幸徳井より曆寫本遣申候其寫本に而致開板候然し曆賣に而曆師に而者無御座候其節幸徳井幼年に御座候故私共仲間より致作曆天和年中遣し候事天和四甲子年に改曆被遊候而止舊曆貞享曆と號同寅の年に私共先祖閑東へ罷下り御願奉申上候候賣曆 紙曆之御寫本被為下置候只今に至り無怠開板仕貞享四年丁卯年之古曆壹幅御覽に入申候

右之通相違無御座候以上

元々は、幸徳井家と結びついて、幸徳井家を作った曆を売っていたが、天和四年（一六八四年）頃、幸徳井家の頭首が幼かったため、陰陽町の陰陽師が自ら曆を作り、売るようになったとしている。この頭首とは友信のことであると思われる。彼は、寛文六年（一六六六年）の生まれで、父である友傳が天和二年（一六八二年）に没したため一六歳で頭首になった。

この曆の件を考えると、この陰陽町の陰陽師たちというのは、元は幸徳井の支配を受けていた幸町あたりの陰陽師であったのではないだろうか。事実「中尾家文書」の中でも「幸

と申所に居住仕候其後方々に分れ居申候」とあり、幸町から様々な場所へ移ったとしている。また、『奈良名所絵巻』に見られた先祖祭については、陰陽町の陰陽師が何らかの形で関わっていると推測される。幸徳井家が幸町から居住地を移したために、幸徳井と何らかの関係を持っていた陰陽町の陰陽師たちが吉備塚伝承の担い手になっていったのではないだろうか。その後も、梅木春和氏の「吉備塚縁起」に中尾氏が先祖の墓として毎年、吉備塚を祀っているとあるように、陰陽町の陰陽師たちによって吉備塚伝承は守り語り継がれてきたと考えられる。

十二世紀の頃、文献に始めて現われる横行やその流れを汲むであろう声聞師（唱聞師）たちは、寺社の支配のもと南都において広く活動を行っていた。その中で、十五世紀の中頃成立とされる『大乘院門蹟領目録』に次のような記述がある。

幸郷鳩垣内 東西行
唱門住所

88

幸徳井の南都移住とほぼ同じ頃、幸町の一角にあった鳩垣内には、声聞師（唱聞師）たちが住んでいたのである。幸徳井に先行する横行・声聞師（唱聞師）たちの時点で、幸町は、すでに陰陽道的な仕事に携わる人々の拠点の一つであった。

時代は下るが「幸郷の金タヽキ」とある。『大乘院寺社雑事記』寛政四年（一七九二年）十一月の条にあったように、「五ヶ所・十座」が支配する「七道者」の一つ「金タヽキ」も幸町に住んでいたのである。

その後、十五世紀の頃になると、幸徳井家が南都の地に来て、幸町の吉備塚近くに居を構える。やはり、幸徳井も南都移住にあたって幸町を選んだ背景には、古井を中心とした幸町周辺のこうした特殊な性格が大きく関与していたに違いない。幸徳井家は、幸町に住むことで、そこを拠点とした彼らの統括者、さらに言えば、南都における陰陽道の中心的な存在として地位を築いていたのではなからうか。

また、陰陽町に住んだ陰陽師たちも元の居住地は、幸町の吉備塚周辺であったという。彼らも、またかつて幸町に居住した陰陽師であったのではなからうか。

このように、中世以降、幸町の吉備塚周辺には、様々な階層の陰陽師たちの活動を見ることが出来る。中世以前から幸町が陰陽師たちの拠点であった可能性も十分考えられるだろう。このような点から、幸町周辺は、南都の陰陽師たちの故地であったことが窺われるのである。

この吉備塚を中心とした幸町、特に現在の高畑周辺には、南都の東に位置する春日山連峰の麓に広がる地である。この地には、吉備塚だけでなく、頭塔下古墳や飛火野春日山古墳群と、古墳が点在している。古代には、有力な一族の葬送地であったとされる。

また、周辺には、奈良時代に光明皇后によって創建された新薬師寺があり、二〇〇八年の発掘調査によって、奈良教育大学構内の北部から広大な金堂跡が発掘された。古来には、

幸徳井の古井を含む高畑町の周りの地域一帯は、広大な新薬師寺境内であり、吉備塚の前身である古墳もその中に入ったものと推測される。

吉備塚のすぐ北部には隣接して、春日大社の広大な社地が広がっており、両者の間には、春日大社の禰宜が多く住んだ「禰宜町」と称する一角があったという。

かつて、江戸時代に、吉備塚近辺には「隔夜堂」や「関伽井庵」と呼ばれる宗教施設があったことが知られている。

隔夜堂は、一所に一夜以上留まることなく、漂泊的な巡礼を続ける隔夜僧と呼ばれる修業僧が拠点とした寺である。寛政三年（一七九一年）に秋里籬島よって書かれた『大和名所図会』に次のような記述が見られる。

隔夜堂

高畑町の東丹坂町にあり開基空也上人也むかしより道心の僧四人つゝ住て二人は毎日長谷寺へ参籠しかくてかはりくゝに此堂と長谷寺とにありて観世音を祈念すること今にたへす故に隔夜堂の名ありと俗伝云也。⁹⁷

高畑の隔夜僧たちは、一夜以上留まることなく、二人ずつ組になって長谷寺と隔夜堂を、交互に参詣したようである。また、関伽井庵では、そろばんを使った占いが行われていたという。いずれの寺院も、高畑町に現存している。

このように、吉備塚周辺の地は、様々な宗教者の集まる拠点として一種濃密な宗教的空間を形成していたのである。

このような空間において、幸徳井を中心とする南都の陰陽師たちも活動していた。吉備真備を祖と仰ぐ、彼らのような陰陽師の活動が、吉備塚伝承を生み育てていったに違いない。

第三章 牛頭天王招来譚の生成

幼い頃、毎年六月になると田舎（岡山県都窪郡早島町）の鶴崎神社の祭りに参加していた。この祭りには特徴的なものがあり、お参りする前に茅で作られた輪を八の字に回り、さらに、そこで「蘇民将来之孫」と書かれたおふだをもらい、玄関先に貼っておくのである。これらの事を行なうことで、病気をすることなく過ごせるとされている。

これは、六月の晦日に行われる神事で「夏越の祓」と呼ばれるものである。その中で、茅で作った輪をくぐることで祓い清め、無病を祈る「茅の輪くぐり」が行われるのである。この神事の由来として語られるのが「牛頭天王」の物語である。室町の頃に成立したとされる『祇園牛頭天王縁起』によれば、その物語は次のように伝えられている。

①牛頭天王の顔があまりに恐ろしかったため、后のなり手がいなかった。

②ある時、山鳩が飛んできて竜宮に住む婆利采女が后となると告げる。それを聞いた牛頭天王は、数千万人の眷属をつれて竜宮へと向かう。

③その途中、日が暮れたので、そこに住んでいた古端長者（巨端将来）に宿を頼んだが断られる。それを聞いた牛頭天王は大いに怒り、蹴り殺そうとするが、家来が制止する。

④さらに宿を探していると、貧乏ではあるが慈悲を持つ蘇民将来という人物が宿を貸してくれる。それに感嘆した牛頭天王は、蘇民将来に様々な願いを叶えてくれる牛玉を授ける。

⑤竜宮に着いた牛頭天王は婆利采女と八年過ごし、八人の王子が誕生する。

⑥牛頭天王は后と八人の王子を連れて本国へ帰国する。その途中で再び蘇民将来の家を訪れる。

⑦一方、古端長者の家へ眷属を偵察に行かせると、占いによって牛頭天王が来ることを察知していた。牛頭天王の罰を避けるために、千人の法師に七日七夜大般若経を讀ませていた。

⑧それを聞いた牛頭天王は八万四千の眷属に古端一族を皆殺しにするように命じる。

しかし、千人の法師の呪力によって結果が張られ、侵入することができなかったが、一人の隻眼の法師が酔っ払って正しく読めなかったため結果に隙間ができた。その隙間から眷属が侵入し、一族を皆殺しにした。

⑨このとき、蘇民将来が古端の長女は正しい心を持っているので助けて欲しいと牛頭天王に頼んだ。そこで、その娘に「茅の輪」と「蘇民将来之子孫と書かれた札」をつけさせ、娘を助ける。⁸⁸

以上は祇園社に伝わる『祇園牛頭天王縁起』に記録されている牛頭天王の物語である。ここで語られる「茅の輪」と「蘇民将来之子孫と書かれた札」こそが、岡山の鶴崎神社をはじめとする全国の祭りや夏越の祓の「茅の輪くぐり」の由来とされるものである。物語の中で、恐ろしい神である牛頭天王の罰を避けるために使われたこの二つの「茅の輪」と「蘇民将来之子孫と書かれた札」が、現在では病を避けるためのものとされているのである。

さらに、この物語は陰陽道書の『篋篋内伝』においても語られている。内容はほぼ同じなのであるが、物語の終わりに次のような内容が書かれている。

爾して、天王、北天竺に帰り政を立て、道を行なふなり。曾ち、疫流神と成り行き、今の世に至るまで、巨旦が残賊を痛ましむ。爾に、今に明かす処の八王子とは、曆中に乗る所の八將軍是なり。然して后、かの巨旦が屍骸を切斷す。各、五節供に配当し、調伏の威儀を行ふ。所謂、肇歳の門松は、巨旦が墓験木なり。炭を結ふは、葬送の火炉なり。

正月一日の赤白の鏡餅は、巨旦が骨肉なり。同じく、唱道師の修する祭礼は、引導葬礼の儀式たるべきなり。又、草の粥は、不動明王七ツ把の髪、悪魔を降伏したまふ飽なり。はた又三笠林焼齋会は、三毒退治の義、又羽子は髭、輪は肝脾、蹴鞠は頭、的は眼なり。又三月の草餅は、耳舌なり。又五月菖蒲粽は、巨旦が髪。又六月一日齒堅、肝要なり。又七月七日の素麺は筋なり。又九月黄菊の酒水は、肝の血なり。⁸⁸

牛頭天王は疫流神とされている。疫流神とは、すなわち疫病を流行らす禍々しい神である。また、牛頭天王の子供たちは暦の神とされている。『篋篋内伝』にいう八將軍とは、大歳、大將軍、大陰、歳刑、歳破、歳殺、黄幡、豹尾である。疫流神と八將軍については後で詳述する。

さらには、殺された巨旦の体はバラバラにされ、その体の部位一つ一つが五節句に使われるものになっている。牛頭天王によって調伏された巨旦の体の部位によって骨肉が鏡餅など日本の五節句のカワリモノやツクリモノになったという由来として物語られているのである。

牛頭天王という一人の神の物語が夏越の祓をはじめとする様々な日本の行事の由来とされているというのは興味深いことである。さらに、その物語が陰陽道の聖典とされる『篋篋内伝』に書かれているというのは注目すべきである。

この物語の主人公である牛頭天王は天竺に住む外来の異神である。また、後で詳しく見ていくが、この牛頭天王は祇園社の祭神として祀られている神でもある。祇園社とは現在の京都の八坂神社のことである。祇園の祭神は、今では素盞鳴尊として知られているが、本来は、牛頭天王であった。牛頭天王が素盞鳴尊と同神とされていくのは、後世のことである。

祇園信仰の拡がりと共に牛頭天王も全国で信仰されていくのである。では、この祇園の祭神でもある異神牛頭天王はいかにして天竺から海を渡り、日本にやってきたのであろうか。

実は、この神を日本に招来したのは、吉備真備とされている。正確に言えば、牛頭天王は、吉備真備の帰朝の際に付従って日本へやってきたと伝えられている。牛頭天王という荒ぶる御霊神が日本で祀られる由来に、吉備真備が関わっているのはなぜであろうか。本章では、吉備真備牛頭天王招来譚を手がかりに吉備真備と牛頭天王、さらには陰陽道との関係について考えていく。

第一節 吉備真備「招来」説話の展開

第一章で見たように吉備真備は遣唐留学生からの帰朝の折、「唐礼」や「太衍曆」など多くのもの日本へと招来している。その他にも「囲碁」、「篋篋抄」、「兵法」、「九尾の狐」、「刺繡」などここで挙げるものだけでも二十五種にも及ぶ多種多様なものを日本へと招来した

とされている。その中でも、最も興味深く、大きなものが「牛頭天王」である。さらに、それらの招来譚は現在でも語り継がれ、招来するものとして吉備真備の姿が見られるのである。

では、「牛頭天王」という神を招来するまでに広がる吉備真備招来説話には、どのようなものがあるのだろうか。牛頭天王の招来について詳しく見ていく前に、吉備真備が招来したとされるものについて見ていきたい。

i 歴史資料に見る吉備真備の招来したもの

吉備真備に多くの招来譚が語られる理由の一つとして、吉備真備が二度唐に渡ったということや渡った先の唐で様々な新しい知識を身につけ、帰朝後に活躍したことなどが考えられる。実際、第一章で見たように、歴史資料に書かれていることのすべてが史実とは言えないが今日最も信頼すべき真備伝が見られる史書『続日本紀』には吉備真備が唐より持ち帰ったものが次のように記録してある。まず、遣唐留学生として吉備真備が招来したとされるものから見ていくことにする。

『続日本紀』 天平七年四月の条

入唐留学生従八位下道朝臣真備、献唐礼一百卅卷、太衍曆経一卷、太衍曆立成十二卷、測影鉄尺一枚、銅律管一部、鉄如方響写律管声十二条、楽書要録十卷、絃纏漆角弓一張、馬上飲水漆角弓一張、露面漆四節角弓一張、射甲箭廿隻、平射箭十隻¹⁰⁰

『続日本紀』を見てみると以下のようなモノを吉備真備が日本に持ち帰ったとしている。

- ・ 唐礼
- ・ 太衍曆経、太衍曆立成
- ・ 測影鉄尺、
- ・ 銅律管、鉄如方響写律管声、楽書要録
- ・ 絃纏漆角弓、馬上飲水漆角弓、露面漆四節角弓、射甲箭、平射箭

「唐礼」とは、唐の時代の物事の道理などが書かれた経書である。

「太衍曆経、太衍曆立成」は、太衍曆と呼ばれる曆のことである。この曆は『続日本紀』の天平宝字七（七六三）年八月の記事に

儀鳳曆を廃めて始めて大衍曆を用ゐる。¹⁰¹

とあり、天平七（七三五）年に真備が持ち帰ってから二十八年後に採用された曆である。

その後も天安二（八五八）年に五紀曆に変わるまで九十四年間採用された。宣明曆の八百二十三年使用に次ぐ長さで使用された曆であった。吉備真備が曆を持ち帰ったというのは注目すべき点である。前章で述べたように奈良の曆師である中尾氏は吉備真備を自分たちの先祖としていた。そのような背景には、この太衍曆のような曆を招来したとされていることがあるだろう。

「測影鉄尺」は詳しいことは分からないのであるが、影を測る鉄でできた尺ということ、日時計のようなものであったと考えられる。日時計ということから曆と関係のある道具であったのではないだろうか。

「銅律管、鉄如方響写律管声」とは楽器のことである。楽器の中でも「律管」と呼ばれるもので、調律用の器具である。主に雅楽で用いられて、十二本の管を一組にしているものが多い。元は中国の古代に作られたもので、この吉備真備の招来によって雅楽家の間で理論的に使われた。¹⁰²

「樂書要録」は、七世紀末から八世紀末に成立したと考えられる雅楽の文献である。則天武后撰とされているが、実際は学者によるものである。中世の頃に散逸し、現在は五七巻と逸文を残すのみである。内容は現存しているものを見る限り、既存の文献からの抄出、体系化したもので、儒教的な部分は薄く、道教的・陰陽道的なものになっている。¹⁰³

「絃纏漆角弓、馬上飲水漆角弓、露面漆四節角弓、射甲箭、平射箭」は、字の如く弓や矢のようなものと思われるが、それが戦いに使われるようなものであるのか儀式に使われるものなのかは分からない。

以上のように、吉備真備は唐から多種多様なものを招来したのである。しかもそれらは、当時、日本にはない新しい最先端の知識や道具であった。そのような知識を身に付け、それらを持ち帰ったとされる真備は、当時の人々にとって超人的な存在として受け入れられていたはずである。実際、第一章でも見た、真備の死後約三百年後の一〇八六年頃に書かれた『扶桑略記』天平七年（七三五年）四月辛亥の条には、次のようにある。

『扶桑略記』 天平七年四月辛亥の条

入唐留学生従八位下々道朝臣真備唐禮一百卅卷。太衍曆經一卷。太衍曆立成十二卷。測影□尺一枚。樂書要録十卷。馬上飲水漆角弓一張。□種々書跡。要物等。留學之間歷十九年。凡所傳學。三史五經。名刑竿術。陰陽曆道。天文漏刻。漢音書道。秘術雜占。一十三道。¹⁰⁴

招来したものは『続日本紀』と比べると「銅律管、鉄如方響写律管声」が減っているが、吉備真備が唐で学んできたものとして「三史五經。名刑竿術。陰陽曆道。天文漏刻。漢音書道。秘術雜占。一十三道」が記載されている。さらに、同じ条には、次のような記述もある。

或記云。爰吉備竊封日月。十箇日間天下令闇恠動。令占之處。日本留學人不能歸朝。以秘術封日月。勅令免宥遂歸本朝。¹⁰⁸

太陽と月を封じるような特殊な能力を持った人物として語られている。招来したものとや学んできたとされるものが、超人的な人物としての吉備真備をより色濃くしているのである。

ii 吉備真備入唐説話における招来伝説

一一一〇年頃、大江匡房の言談を藤原実兼が筆録したものとされる『江談抄』に次のような記述がある。

『江談抄』 吉備入唐間事

文選・困碁・野馬台はこの大臣の徳なり¹⁰⁹

「吉備入唐間事」文選の読解、困碁の勝負、野馬台詩の読解という三つの試練を唐の帝王に出され、その試練を阿部仲麿の援助を受けて吉備真備が突破するという内容になっている。この記述はその物語の結びに書かれているものである。試練で与えられた三つものを日本へと持ち帰ったとしている。

「文選」は、梁の昭明太子撰の周代から梁代までの文学作品を集めたものである。成立は選者没年の五三一年をさかのぼる数年間と考えられる。日本にも大きな影響を与えた古典的一大詞華集である。

「困碁」は、三世紀後半に張華によって書かれた『博物志』に堯や舜が創始したと書かれ、堯舜創始説が長く言い伝えられてきた。¹¹⁰江戸の中期になると幕府による碁の由来の調査が行われ、碁の家元の林家が次のように答えている。今回、資料を確認できなかったので、増川宏一氏の『碁』から引用する。

困碁の始は堯舜に起り、吉備公が帰朝の節に本朝に伝来し、流布したと聞き及んでおりますが、それ以前から伝わったとも聞いたことがあり、たしかなことは存じません。

108

困碁の始まりは堯舜で、それを日本に持ち込んだのは吉備真備としている。ただ、この説が正しいのではなく、世間一般に流布し、家元自身もそう聞いている程度のことであったようである。また、碁の家元の一つである井上家は、吉備真備を元祖して敬い、岡山県真備町の吉備寺に襲名の報告を行っていたと伝わっており、吉備寺に天保年中の署名の碁盤が保管されている。¹¹¹さらに、吉備真備困碁招来伝承は碁の家だけでなく広く知られ

ていたようで、俳諧の書である寛文十一（一六七一）年の書かれた山岡元隣の『宝蔵』に次のような記述がある。

碁盤

手談のわざはからくに、始りしを。大臣のきびよく傳へとり給ひてより。此くに、おほくひろごりて。諸人これをもてあそべり。 二〇

ここでも、囲碁を日本に伝えたのは吉備真備としている。このように、碁の家だけでなく広く知られた伝承であったようである。

この伝承は、現在でも語り継がれている。日本棋院のホームページ (<http://www.nihonkin.or.jp>) には吉備真備が伝えたという説がありと書かれていたり、鳥取市賀露町の吉備真備が祀られている賀露神社では吉備真備杯奉納囲碁と銘うって囲碁の大会が行なわれたり^{二一}と吉備真備と囲碁とは現在でも強く結び付けられているのである。

「野馬台詩」とは梁の宝誌和尚によって作られたとされる次のような詩である。

始定壤天本宗初功元建

終臣君周枝祖興治法主

谷孫走生羽祭成終事衡

填田魚膾翔世代天工翼

孫子動戈葛百国氏右輔

昌微中干後東海姫司為

白失水寄胡空為遂国喧

龍游窘急城土茫茫中鼓

牛飡食人黄赤與丘青鐘

腸鼠黒代雞流畢竭猿外

丹盡後在三王英稱犬野

水流天命公百雄星流飛^{二二}

以上が「野馬台詩」の本文である。見て分かるように実はこの詩、吉備真備入唐説話の中でも蜘蛛の糸に導かれて解読しているようにこのままでは読めないのである。次の図のように線に従って六行目の「東」から始まり、七行目の「空」で終わるように読んでいくのである。



東海姫氏国	百世代天工
右司為輔翼	衡主建元功
初興治法事	終成祭祖宗
本枝周天壤	君臣定始終
谷填田孫走	魚膾生羽翔
葛後干戈動	中微子孫昌
白龍游失水	窘急寄胡城
黃鷄代人食	黑鼠喰牛腸
丹水流尽後	天命在三公
百王流畢竭	猿犬称英雄
星流鳥野外	鐘鼓喧國中
青丘与赤土	茫茫遂為空

113

次にこの詩の内容であるが『江談抄』の「源中將師時亭の文会の篤昌の事」に

宝志の野馬台の讖 114

とある。「讖」とは予言のこととて、この「野馬台詩」は日本の終末を予言したものなのである。詩の概要については、小峯和明氏の『野馬台詩』の「謎」で次のように整理している。

君臣あい和して秩序が保たれていたのが、突如乱れて下克上が起こり、王の威は急速に衰え、緊急に非難し、残った臣下が政務に当るがそれもむなしく、ついに王家はほろび、世は英雄を称する異類の輩の覇権争いとなり、群雄割拠の時代を迎え、戦乱が全国に蔓延し、ついにすべてが滅び去り、世界は崩壊する 115

概ね詩自体の概要は以上のような内容であるが、その解釈については時代ごとに多くの注釈が行われ、様々な読まれ方で人々に享受されていったようである。小峯和明氏の『野馬台詩』の「謎」によると第二次世界大戦の空襲の予言としても機能していたようである。

中世末期から江戸初期にかけて書かれたと考えられる陰陽道書で『簠簋内伝』の由来及び注釈から構成された『簠簋抄』においても吉備真備入唐説話が語られている。こちらでも、吉備真備が招来したというものが、書かれているのであるが、『江談抄』と異なり招来したものが七つある。

武帝、七宝を吉備に給はる。いはゆる、一は七帝の政、二には当『籙籙抄』、三には「野馬台詩」、四には困碁、五には金鷄、六には日本領、七には火鼠彼なりと云々。右の七種、みな持ち来り、大船にうち乗り、帰朝す。¹¹⁸

文選が無くなり、「七帝の政」『籙籙抄』「金鷄」「日本領」「火鼠彼」の五つが新たに追加されている。ただ、ここでは唐の武帝から貰うという形になっているため「日本領」という持ち帰ることができないものも書かれている。

「七帝の政」とはどのようなものかよく分からないのであるが、『籙籙抄』の別の箇所にも次のように登場する。

武帝聞こしめし、「吉備、十六歳にして入唐す。三年滞留なれば当年十八歳なり。大事の智人を、当年殺しては惜しき事なり」と仰せられ、橋舟を走らし、吉備が本舟を呼び帰し、七帝の政をなし¹¹⁷

と武帝が天から短命であると予言された真備のために「七帝の政」を行うのである。このことから「七帝の政」とは、なんらかの儀式や祭祀であった可能性があり、そこで注目したいのが北斗七星に関しての祭祀である。そこで『政事要略』を見ると、次のようなことが書かれている。

有蔭招陰陽師弓削是雄。令祭属星。¹¹⁸

弓削是雄が属星祭と呼ばれる祭祀を行っている。この属星祭、岡田荘司氏の「陰陽道祭祀の成立と展開」によると「属星祭は生年干支にあたる日を本命日とし、これに北斗七星を宛てて、その人の属する本命星（属星）が一生の禍福を司るとされた」とある。つまり、属星祭とは北斗七星を祭る祭祀であったことが考えられる。

また、この術は『籙籙抄』以外にも吉備真備と深い関係を持つものでもある。藤原明衡によって平安後期に書かれたとされる『新猿楽記』の「十の君の夫」の部分で陰陽の先生である賀茂道世が「七佐法王ノ道」を身に付けていたという一節に次のようにある。

吉備大臣、七佐法王ノ道ヲ習ヒ伝ヘタルモノナリ。¹¹⁹

「七佐法王ノ道」とは、確かなことは分かっていないが、北斗七星の祭祀の一つと考えられ、「七帝の政」と同一であった可能性があり、その祭祀を吉備真備が伝えたとしている。

120

また、覚禅によって鎌倉初期に書かれた『覚禅鈔』の「属星祭傳來事」の項にも唐の天文博士から中臣鎌子に授けられ、道鏡がこの法を使って高位についたという伝来について

の内容の後に、次のように書かれている。

吉備大臣修^ス此法^ヲ登^ル高位^ニ云々¹²¹

『覚禅鈔』の「此法」も属星祭の中の属星法のことを言っており、真備もこの法を使って出世したと書かれている。

どちらも、直接、「七帝の政」という言葉は出てこないが、北斗七星に関しての祭祀を、吉備真備が日本に伝え、その法を使って出世していったという伝承が語られていたことが考えられる。『新猿楽記』は平安後期、『覚禅鈔』は鎌倉初期に成立したものである。中世初期には、北斗七星の祭祀と吉備真備の関係が見られ、そのことを受けて『簠簋抄』の中でも吉備真備が日本に持ち帰ったとして書かれていると推定される。

『簠簋』は、『簠簋内伝』のことであると考えられる。この『簠簋内伝』を吉備真備が持ち帰り、のちの清明である童子に渡すのである。このことが吉備真備を陰陽道の始祖として位置づける一つの要素になっているのである。

「金鶏」とは、どのようなものか分からない。『日本古典偽書叢刊 第三卷 簠簋内伝金鳥玉兔集他』の深沢徹氏らの注によれば次のように考えられている。

金鶏は天上の金鶏星に棲むという鶏で、暁にこの鶏が時の声あげ、地上の鶏がこれに応じて鳴くと考えられた。一般に鶏は朝一番に鳴いて闇を破る意から陰陽道で重視され、四角四境祭などの祭祀とも関わった。¹²²

ここでも陰陽道との関係が指摘されている。

「火鼠彼」は『竹取物語』の中で、かぐや姫が婿候補に出す難題の一つとしても登場する。火鼠の毛皮のことで、火に焼けないとされた。

iii その他の招来伝説

貞享元年（一六八四年）に在田軒道貞によって書かれた『吉備物語』の備中人物志の吉備真備の項に次のようにある。

人皇四十四代元正天皇の御宇養老元年に入唐在て、十三經陰陽曆算諸藝兵法軍書八陣の圖迄唐十七年の間恙相傳し、天平五年癸酉帰朝せり。依之聖武天皇右大臣をゆるされ吉備公と申、孝謙天皇賀茂氏を下さる。又かたかなを作り今にキヒカナとて世の重寶たり。¹²³

ここでは、伝えてきたものを「十三經陰陽曆算諸藝兵法軍書八陣の圖」としている。「十

三經陰陽曆算諸藝」については、前述した『扶桑略記』とほぼ同様の内容である。残りの「兵法軍書八陣の圖」は兵法や戦、軍事に関わるものであると思われる。実際、『続日本紀』天平宝字四（七六〇）年の条に

授刀舍人春日部三開、中衛舍人土師宿禰開ら六人を大宰府に遣して、大式吉備朝臣眞備に就きて、諸葛亮が八陳、孫子が九地と結營向背とを習はしむ。¹²⁴

とあり、都から大宰府に派遣された者に諸葛亮の八陳や孫子の九地などの兵法を教えたことがみられる。明らかに眞備が兵法の知識を身につけていたということであろう。また、『続日本紀』の眞備が死亡したときの略伝（宝龜六（七五七）年十月）には次のような記事も見られる。

仲満謀反す。大臣、その必ず走らむことを計りて、兵を分ちてこれを遮る。指摩部分甚だ籌略有り。賊遂に謀中に陥りて、旬日にして悉く平く¹²⁵

恵美押勝の乱が起こり、兵法に長けていた眞備は内裏に呼ばれ、軍務に参謀し、眞備の兵法の策によって恵美押勝を退け、乱を収めた。知識だけでなく軍師として実際に指揮をとっているのである。この後、宝龜元年（七七〇年）には中衛・左右衛士の統率を任されるなど眞備の軍事面での働きは突出したものがあつた。

さらに、兵法の知識だけでなく、『六韜・三略』と呼ばれる兵法書を持ち帰ったとされている。『六韜・三略』とは、『六韜』が文、武、竜、虎、豹、犬の六つからなり、『三略』上、中、下の三つからなる二つの書である。日本では、これらが擬せられ『兵法秘術一卷書』などと呼ばれている。また、『義経記』の中で、鬼一法眼から源義経に譲り受けたとされるのもこれで、『義経虎の巻』とも呼ばれている。

『六韜・三略』の伝来については、いくつかの型があり、その中の一つが吉備眞備の招来に始まり、鞍馬寺への奉納、藤原利仁、鬼一法眼、源義経へと受け継がれていくという伝承である。今回、本文を確認することはできなかったが、蓬佐文庫蔵の『兵法秘術虎之卷（奥書文禄二（一五九一）年）』に吉備眞備招来譚が書かれている。¹²⁶

さらに、『吉備物語』では、右に挙げた招来したとされるもののみでなく、「キヒカナ」と呼ばれる「カタカナ」を作り出したと記している。このことについては、室町時代に花山院長親（耕雲）によって書かれた『倭片假字反節義解』に次のように書かれている。

到於天平勝寶年中。右丞相吉備眞備公。取所通用于我邦假字四十五字。省偏旁點畫作片假字。抑四十字音響及阿伊宇江乎五字。此及天地自然之倭語焉。是故豎列五字。横列十字。加入同音五字為五十字。且又横十字隨唇舌牙齒喉。用官商角徵羽變徵七聲哉。

蓋世俗傳稱之。云吉備大臣倭片假字反切。¹²⁷

吉備真備がへんやつくりを除いてカタカナを作り、さらに、それを縦に五字、横に十字並べて五十音図をも作ったとしている。

しかし、現存する五十音図の最古のものは平安時代中期のものである。国語学においては、五十音図を吉備真備の作とする説は否定されている。¹²⁸

次に、嘉永年間（一八四八〜五四）の『日本国見在書目録』を見ると、次のような記述がある。

東漢観記百卅二卷

右隋書経籍志所載教也。而件漢記吉備大臣所将来也

129

『東漢観記』がどのような書物であるのか分からないのであるが、この書も吉備真備が日本へ招来したとしている。

以上、いくつかの招来を見たが、どれも書物や道具などであった。しかし、文化元（一八〇四）年に高井蘭山の『絵本三国妖婦伝』を見ると、吉備真備はとんでもないものを日本へともたらしているのである。

吉備真備の御座船に二八ばかりの美女黙然として端座せりこれを見ておどろき吉備公婦人にむかひ汝いかなるものなれば断もなく乗船せし何ものなるやと問れば女こたへて妾は玄宗皇帝の臣に司馬元脩と云るもの、娘にて若藻といふもの也。君かねて唐わたらせ給ふ節より成長までもましく、帰朝なし給はば日本に具し給らんとを願ひ奉らんと年来心にかけてれとも父母にかくし妾が心ひとつにして願ひ奉るとも中く取あげゆるさせ給ふと有まじと出帆の以前密に打乗兩日御船の底に忍びかくれ在しがもはや冲遙に出船ましませば時節よしと立出候也あはれゆるさせ給ひて日本の地までつれさせ給へ（中略）次の間に在て心まゝに起臥すべしと宣へはかの少女いさも嬉し気なる躰にて礼拝して悦びぬつづく日和の追風に十分に帆をあげ船路しづかに走りつゝ程なく筑前の国博多の津に着船し驛館までもしたかひ至らずいづくへ行けん跡方も見へずなりける（中略）かの船中にあらわれてなきねがひてもなはれし女こそ殷を亡し天竺耶竭国を傾けんとしそれより周を危ふしたりし金毛九尾白面狐褒姒の生し伯服に精をつたへて婦人となつて吉備公を偽り倭へわたり方便なりと後にぞ思ひ合わされけり（中略）去程に吉備大臣帰朝ありしは聖武天皇天平七年此時謀て金毛九尾白面の狐は日本国に渡り¹³⁰

吉備真備が帰朝する際に、日本に連れて行って欲しいと言う女が知らぬ間に乗船しており、それを吉備真備が承諾し、日本に連れて行くのであるが、その女は忽然と姿を消してしまう。その女は「金毛九尾白面狐」であった。つまり、吉備真備は九尾の狐を日本につれて帰っているのである。ちなみにこの「金毛九尾白面狐」は後に鳥羽院の寵を受ける玉

藻の前になる。傾国の原因をも吉備真備は招来している。

以上、文献に見られる吉備真備が招来したのを見てきた。しかし、現在、文献には残らないものの吉備真備招来のものとして語り伝えられているものもいくつか存在している。

まず、一つ目が「刺繍」である。大阪刺繍商工業協同組合のホームページ(<http://www.osaka-emi.jp>)などによると吉備真備を刺繍の祖としている。大阪市北区天神橋の大阪天満宮には吉備真備を祀る吉備社があり、その創建には大阪の刺繍組合が関わっている。吉備社の由緒にも吉備真備が刺繍を持ち帰ったとある。また、この吉備社には、吉備講が開かれたことが元文元（一七三六）年の天満宮所蔵の文書見られ、その講は縫屋講とも呼ばれていた¹³¹



吉備社



吉備社由緒



針塚



吉備講と刻まれた石柱

132

二つ目が「金戒光明寺の吉備観音」である。京都市左京区黒谷町にある金戒光明寺に吉備観音と呼ばれる観音像がある。この観音は行基の手によるものと伝えられている。吉備真備が唐からの帰朝の際、船が遭難しそうになったので「南無観世音菩薩」と唱えるところに難を逃れた。そのことに感謝して行基に頼んで唐から持ち帰った梅檀香木で観音を作ってもらったと寺では伝えられている。¹³³

これら以外にも「三重県の椿大神社においての獅子頭の奉納」や「和歌山県の太子町を開いたという伝承」など吉備真備が始祖や伝えたという伝承が数多く見られる。しかし、これらについては詳しいことが現時点で分からないため、刺繍や吉備観音も含め、今後さらなる調査を行なっていく。

以上のように、吉備真備には招来したとされる伝承や始祖とされる伝承が多く伝えられ

ている。そこには、吉備真備の遣唐使や学者、政治家、軍師、優れた智者、異能者といった数多くの姿が描き出されている。そのどれもが一般の人々にとっては、人知を超えた特殊な力を持つものであり、敬意を持つと同時に恐れをも感じる存在であったはずである。このように人々にとって超越した存在であったからこそ、吉備真備を権威あるものとし、多くの招来譚や始祖譚を生み出し、語り継がれていったのであろう。

さて、このような多くの招来譚が語られる吉備真備であるが、その中でも、最も興味深く、大きなものこそが「牛頭天王」である。先に見てきたものは、どれも重要なものであるのであるが、それらにも勝って「神」までをも日本に招来したとされているのである。

第二節 吉備真備牛頭天王招来譚

i 吉備真備牛頭天王譚の展開

では、吉備真備はどのようにして牛頭天王を日本へと招来したのであろうか。前述した、『祇園牛頭天王縁起』では、吉備真備と牛頭天王の出会いが描かれているのみであった。しかし、次に挙げる南北朝時代の『峯相記』には、吉備真備と牛頭天王との出会いに留まらず、牛頭天王という神を日本に招来したということが描かれている。

廣峯山ノ事利生掲焉ニ、賞罰嚴重ナル間自国歩ヲ運シテ崇敬スル事熊野ノ御嶽ニモヲトラス萬人道ヲアラソイテ参詣ス結縁ノ為ニ是モ一度詣テ、候シ。次ニ起立ノ根本ヲ尋申候シカトモ存知シタル者モ候ハス。空ク下向シテ麓ノ禅院ニ一宿シニ老僧ノ語り候シハ元正天皇御宇靈龜二年吉備大臣入唐ス。在唐十八年。所学十三道。殊ニ陰陽ヲ極芸セリ。聖武天皇御宇天平五年ニ帰朝。当山ノ麓ニ一宿シ給ヘリ。爰ニ夢ニモ非ズ現ニモ非ズ貴人出来シテ。我古丹ガ家ニ追出サレ蘇民ト為ニ助ラレテ浪人ト成テヨリ以来。所未定汝ト唐朝ニ契タリシオ憑テ追来也云々。則当山ニ崇メ奉ル。牛頭天王是也。数年ヲ経テ後平安城ヲ立ラレシ時。東方守護ノ為ニ祇園荒町ニ勸請シ奉ルト云々。恐ラクハ当社ヲ以テ本社ト云ベシト云々。¹³⁴

吉備真備が帰朝の際に廣峯山に立ち寄った。その夜、夢とも現ともつかない人が現われ、吉備真備はその人を廣峯山に祀った。その人こそ牛頭天王である。これが、現在伝わる牛頭天王招来譚である。

この廣峯山は、兵庫県姫路市にある山である。JR姫路駅から北に位置している。そこには、現在でも廣峯神社が鎮座している。廣峯神社が出している社記に次のようにある。

今より二千有余年前の太古、崇神天皇の御代に素盞鳴尊とその御子神で植樹の神様である五十猛尊が白幣山に御鎮座しました。

聖武天皇の御代、奈良時代（西暦七三三）にこの地に訪れた吉備真備公が神託を受

け、現在の奥の院、吉備社がある位置に社殿を建立しました。 135

社記によると奈良時代に神託によって現在の奥の院の地に吉備真備が建立し、素盞鳴尊と五十猛尊、奇稻田媛命の三神が祀られている。また、蘇民将来を祀った地養社や吉備真備を祀った吉備社などがある。さらに、廣峯神社の特徴的なものとして「九つ穴」と呼ばれるものがある。この穴はこよみにある一白水星などの九星を表し、それぞれの穴深くに星の守神を祀っている。参拝者は自分の星の穴に賽銭と願い札を投げ入れ、口をあてがい小声で神様に願ひ事をする風習が残っている。暦の神が祀られているというのは注目すべきである。



廣峯神社正面



九つ穴（本殿裏）

136

吉備真備牛頭天王招来譚は『峯相記』だけでなくその他の文献にも確認することができ

る。

神社啓蒙（兵庫神社誌より）寛文（一六六一〜一六七三年）年頃

社記云人皇四十四代元正養老元年吉備真備入唐ス其後四十五代豊櫻彦天皇天平五年癸酉帰朝之日止此地偶々佇立船舳望乾維者山後有山峻高支天深谷遶腰穿岸之形（今白幣山是なり）云々公所誘感情而凝眸則有白幣時々放光公怪以除々登臨也老翁現出云吾是素盞烏命也為 137

播磨鑑 宝曆（一七五一〜一七六三年）頃

○廣峯社 國衙庄 當国第五の宮也 社領七十二石八斗

祭神三座 素盞鳴尊 稻田姫 八王子

社記二曰 委細ノ社記故略之詳ニ下本ニ

載之

聖武天皇天平五年三月十八日長吉備帰朝於此地見異神乃素盞鳴命也遷到京師奏
旨奉 勅同六年令營社其後 圓融院天祿三年自西峯遷 廣峯其後又貞觀十一年
遷 山城 京祇園之社是也¹³⁸⁾

内容的には先に挙げた『峯相記』と同じように廣峯山において吉備真備が神と出会った
というものである。しかし、『峯相記』と違い、牛頭天王ではなく、ここでは素盞鳴尊にな
っている。一見すると違う神なのであるが、実は、牛頭天王はいつのころから素盞鳴尊と
同神であるかのように扱われていく。さらに言えば、牛頭天王は素盞鳴尊に取って代わら
れていくのである。いづごろ牛頭天王イコール素盞鳴尊になったのかは、分からないのだ
が、江戸後期の学者、平田篤胤（一七七六～一八四三年）の『牛頭天王曆神辯』にも

素盞鳴命を牛頭天王とまをし。 139)

とあり、素盞鳴尊を牛頭天王している。少なくとも江戸期には牛頭天王と素盞鳴尊とを同
体とする思想があったようである。さらに、倉敷市浅原の素盞鳴神社の宮司室山武彦氏に
よれば、文政七（一八二四）年の「祇園牛頭天王宮御神殿」という額が残っており、江戸
時代までは、牛頭天王宮と名乗っていたが、明治二八（一八九一）年に素盞鳴神社へと変
更させられたそうである。同様に全国の牛頭天王の名前は素盞鳴命へと変わっていったの
である。

牛頭天王は素盞鳴命と名前を変えて信仰されているのであるが、その素盞鳴命を祭神と
している神社の総本山的なのが京都府東山区祇園町の「八坂神社」である。かつては八坂
神社でも素盞鳴命ではなく牛頭天王を祭神としていた。九条道家の日記『玉蘂』の承久二
（一二二〇）年に次のような記事がある。

祇園焼亡事、内々遣尋勘例於大外記師重朝臣許、付使者注進也、

祇園社焼亡例事

延久□年□□十四日、辛未、戌剋感神院榊地焼亡、牛頭天王御足焼損、八王子御躰同
焼亡¹⁴⁰⁾

延久（一〇六九～一〇七三）年中に祇園社（八坂神社の旧称）が火事で焼けたときの記
述である。この時、焼けたものの中に牛頭天王の足が記録されている。これは、恐らく牛
頭天王の神像が焼けたということであろう。すなわち、祇園社には牛頭天王の像が安置さ
れていたということである。このことから、祇園の祭神の一つに牛頭天王がいたことが分
かる。

このように、牛頭天王を祭神にしていた祇園社に伝わる文書にも前述した『祇園牛頭天
王縁起』のような吉備真備が牛頭天王に出会ったという内容を記しているものだけでなく、

次に挙げる祇園社に伝わる『祇園社略記』には、吉備真備牛頭天王招来譚が記録されている。

吉備真備奉詔為遣唐使 帰朝乃日建牛頭祠播磨国、数年之后欲勧請其神為鎮護王宮奉
安平安城東方、蓋今祇園是也 三

帰朝の際に、播磨の国に牛頭天王の祠を吉備真備が建て、それを勧請したのが今の祇園社としていいる。『峯相記』ほど、招来について詳しく書いているわけではないが、吉備真備が祇園社の神である牛頭天王を最初に祀ったとしているのである。

また、吉備真備牛頭天王招来譚は祇園社のような大きい神社だけでなく、地方においても語られている。それは、岡山県浅口市鴨方町六条院中にある「真止戸山（まとべやま）神社」である。真止戸山神社は、鴨方町六条院に鎮座している神社である。六条院は、元は六条院村と呼ばれ、鴨方村と合併して鴨方町ができた経緯があり、昔はこの地域では大きな村の一つであった。宮司の中山立夫氏によれば真止戸山神社は、六条院に住む人々の氏神様として崇敬され、現在でも、テンノウサンと呼ばれ、親しまれている。その場所は国道2号線から南に車で五分ほど進んだ真山戸（まつばさ）山の南側に位置し、険しい山道を進んだ先に突如として現れる。御祭神は素盞鳴尊を主祭人としている。当初は、牛頭天王宮と呼ばれていたが、明治元年（一八六八年）、地区名により真止戸山神社と称するようになった。

その創建については、昭和三〇年（一九五五年）の火災により、多くの資料が焼失したため詳しいことは分からない。しかし、昭和二三年（一九四八年）に、当時の宮司の鈴木多喜二氏によって『真止戸山神社誌』がまとめられており、以下のように知ることができさる。

社記に依ると、聖武天皇の天平六年（七三四年）右大臣吉備真備公が播州廣峰神社を創立し、光仁天皇寶龜二年（七七一年）吉備公が奏問を遂げて、同年廣峰の祭神を勧請して今の地に齋祀つたと云ふ之れが即ち當社である。 143

吉備真備が宝龜二年（七七一年）に、播州の広峯神社の祭神を勧請して、この地に真止戸山神社を創建したとされている。さらに詳しく書かれているのがここでの社記で、次のようなものである。

社記

抑當社牛頭天王は素盞鳴の尊靈也。人皇四十五代聖武天皇天平六年甲戌年吉備朝臣真備勅を奉り、播州廣峯において此神を祭る。洛陽祇園の本社なり。吉備大臣その産國なるによりて、四十九代光仁天皇寶龜二年辛亥奏問をとげ、備中の國浅口郡中六條院

真止戸山にはひ祭り近郷の鎮守とあがめ其靈驗日々新なり。144

社記においては、はっきりと吉備真備が牛頭天王を播磨の広峯に祭ったとあり、吉備真備牛頭天王招来譚が語られている。さらに、この真止戸山神社をも吉備真備が創建したとされているのである。このように、地方の一神社にもしっかりと吉備真備牛頭天王招来譚が根付いている。牛頭天王信仰と招来者としての吉備真備が地方にまで広がり、浸透していたのである。



真止戸山神社正面



本殿



創建伝承石碑

145

ii 牛頭天王という異神

実は、前述した真止戸山神社の創建には伝承が残されており、現在の真止戸山神社に石碑として伝えられている。その翻刻が『鴨方町史 別冊』に記録されている。

當社は初め牛頭天王宮と稱し、後更に真止戸山神社と曰ふ。遠く人皇四十九代、光仁天皇の寶龜二年、吉備真備公の創立に係る。是より先、天平勝寶四年、公遣唐副使と為り、船に乗じて、備中甕（もたい）の泊りを過ぎ、當村岩崎に抵り、沿海の住民の疫病猖獗、甚瘼の状を聴き、播州廣峰の牛頭天王を遙拝し、手に船板の破片を取りて、

之に牛頭天王寶印の六字を刻み、隨身をして□拓せしめ、戸毎に之を張る。靈驗赫灼として疫病直ちに迹を絶つ。公帰朝の後、台鼎に登る。老を以て嘉遯し、而して之を此の地に勧請すと云ふ。¹⁴⁶

吉備真備が、遣唐副使として唐に向かう時にこの地に訪れた。その時に、疫病で困っている住民を助けるために、船板に「牛頭天王寶印」と書いたものを写し、各家に張って疫病を絶った。その後、牛頭天王を勧請したとしている。

また、真止戸山神社に伝わる口碑にも同じような伝承が伝えられている。『真止戸山神社誌』に記録されているのは以下の通りである。

昔天平勝寶四年吉備公が遣唐副使として赴かる。航海中、此地の船頭が鼻を過ぎ岩崎に碇泊して食糧を求められたところ、不幸にして此地方は疫病が流行してどの家にも供することが出来ませぬと答へた。吉備公は之をお聴きになり深く憐み、流れ寄った船板の破片を執つて、遙かに播州廣峯神社を念じて「牛頭天王寶印」の六字を書し、帯刀を以て之を刻して里民に與へ、之を押捺して家毎に配與させられたので、神徳を頂悪疫は治まった。吉備公が此土地を去らるゝに臨み樞木杖を留められた。其形が丁字に似たるを以て此あたりを丁（よぼろ）と云ひ初め後訛りて「よろろ」と稱するに至つたと云ふ。また云ふ「よぼろ」は公用の使役を稱すると。後勅命により寶龜二年正式に真止戸山の地に牛頭天王を祀つた。それは廣峯神社より勧請したのであつて、其昔播州に到り、神饌を捧げ神輿に供奉して還つた¹⁴⁷

前述した碑と同じように遣唐副使として唐に向かう際に「牛頭天王寶印」と書かれたものを配り、疫病を抑えている。さらに、口碑では、真備がこの地に杖を立て、その形が丁字に似ていたため、この地を丁と書いて「よろろ」と呼ぶようになったとされている。

これらの伝承には、疫病を封じる神としての牛頭天王像を窺うことができる。しかし、一方では先に挙げた『祇園牛頭天王縁起』のように従わない者の一族を皆殺しにするような荒ぶる神でもある。では、この牛頭天王とはどのような神なのであろうか。

牛頭天王について先に挙げた『祇園牛頭天王縁起』の冒頭を見てみると次のように書かれている。

須彌山半腹有國云豊饒國、其國王名曰武答天王、有一人太子、七歳長七尺五寸也、頂有三尺牛頭、又有三尺赤角、父大王生希代太子者哉思給、去大王位讓 太子、其御名號牛頭天王¹⁴⁸

牛頭天王は須彌山の中ほどにある豊饒国の国王武答天王的太子として生まれる。七歳にして身長が七尺五寸（約二メートル二七センチ）で、頭の上には三尺（約一メートル）ほ

天王と名づけられたとある。巨大で禍々しい姿として描き出されている。それほど力を持った神として認識されていたのであろう。

また、時代は下るが、平田篤胤の『牛頭天王曆神辯』所収の国学者天野信景によって寛永（一六二四〜一六四三）年間に書かれた『牛頭天王辯』に牛頭天王について次のようにある。

牛頭天王 承平官符稱、天神乃武塔天神也、巫祝為素戔
鳥尊、陰陽家為天道神、為泰山府君、 出佛說秘密心點如意藏王陀羅

尼經。義淨三藏 所譯也 凡天王有十種反身。曰武蒼天神。曰牛頭天王。曰鳩摩羅天王。曰

蛇毒氣神。曰摩那天王。曰都藍天王。曰梵王。曰玉女。曰藥寶明王。曰疫病神王。

以牛頭天王為疫病神

三卷、不空三

者出于此矣。

天刑星秘密儀軌。藏之所譯也 有牛頭天王縛擊癘魂。

禳除疫難之事。166

ここでは、牛頭天王は「武蒼天神」「牛頭天王」「鳩摩羅天王」「蛇毒氣神」「摩那天王」「都藍天王」「梵王」「玉女」「藥寶明王」「疫病神王」と十種にも及ぶ名を持っている。『祇園牛頭天王縁起』の中で牛頭天王の父とされていた「武蒼天神」までもが牛頭天王の異称になつていたのである。167また、「巫祝為素戔鳥尊、陰陽家為天道神、為泰山府君」ともあり、巫祝にとつては素戔鳥尊、陰陽家にとつては天道神や泰山府君と、立場によつて牛頭天王がどのような神であるか異なつてゐる。このことは『祇園社略記』にも次のようにある。

或曰、神家ニハ祇園ヲ稱ス素戔鳥尊、佛家ニハ是ヲ為牛頭天王、曆家ニハ配是レヲ天道神ト

ここでは、神家が素戔鳥尊、仏家が牛頭天王、曆家が天道神となつてゐる。おそらく、神家とは神道関係の家、仏家とは仏教関係の家、曆家とは賀茂氏のような作曆を行う陰陽道関係の家であると推定される。信仰ごとに牛頭天王はそれぞれの姿で受け入れられ崇拜されているのである。

以上のように、牛頭天王という一つの姿ではなく、様々な姿でもつて祀られ、崇められているのである。様々な姿を持つ牛頭天王であるが『牛頭天王辯』には「疫病神王 以牛頭天王為疫病神者出于此矣」とあり疫病神としての姿がある。また、『祇園社略記』には「曆家ニハ配是レヲ天道神」とあり、曆家が牛頭天王を祀る曆神としての姿が窺われる。これら疫病神と曆神は、牛頭天王の代表的姿とでもいふべきものである。

① 疫神としての牛頭天王

『百鍊抄』の天延元（九七三）年に次のような記録がある。

六月十五日。公家始自今年被獻東遊走馬等祇園社。依去年皁瘡時御願也。¹⁵²

これは、かつて「祇園御霊会」と呼ばれ、現在、毎年七月に京都で行われている「祇園祭」として知られている祭礼の記録である。ここで注目したいのが、この祭礼が去年の瘡瘡の払いの願いによるものであるということである。つまり、祇園社に瘡瘡避けの願を立てていたということであり、祇園社が疫病を防ぐ力があると知られていたということである。ここですでに、祭神である牛頭天王の疫神としての性格を見ることができている。現在でも祇園祭は疫病を防ぐことを目的に行われている。

さらに、祇園社の疫病を封じる霊験を示す記述が『吾妻鏡』の寛喜三（一一三一）年に見られる。

五月四日去月之此。或僧稱祇園示現。注夢記披露洛中。仍自殿下被送進。將軍家。假令人別充錢五文若三文。可讀誦心經。於即巽方。可修鬼氣祭。然者今年世上云疾疫云。餓死可被除也。疫癘事。五月以後六月十八日以前可蜂起也云々。仍可懸此封。

令信此事者。可為人民安穩天下泰平之由也。今夜御所四角四堺鬼氣御祭等被行之。¹⁵³

ある僧が祇園のお告げとして、夢記を記して京中で披露した。それを受けて疫病や飢餓を除くために、心経の誦読や鬼氣祭を行うよう必要があるとしている。この部分の心経とは、般若心経のことであり、鬼氣祭は陰陽道の儀式の一つである。さらに、五月以後、六月十八日まで、疫癘（えきれい）が流行るので急急如律令の封を掛けるように書かれている。その夜、御所にて鬼氣祭が行われる。このように、祇園の示現、お告げによって疫病の流行が示唆されており、ここでも祇園社の疫病を封じる験力が示されているのである。

また、祇園社の祭神である牛頭天王自体も前述したように『簠簋内伝』において「疫流神」と成ったとある。さらに、『簠簋内伝』に次のような記述もある。

百千若干の眷属を相伴ひ、彼の広遠国に到り、八万四千の温病鬼と成りて、巨且が一族を破没せんと欲す。¹⁵⁴

これは、牛頭天王が南海から本国に帰るときの記述で、眷属たちが「温病鬼」と呼ばれる疫神の一つになり、礼を尽くさない巨旦を滅ぼそうとしているのである。八万四千もの疫神を引きつれる牛頭天王はまさに疫病を広げる疫病の親玉的な存在であり、明らかに疫神としての姿である。

人々は「祇園御霊会」によって、疫神である牛頭天王を祀ることで、疫病を防ごうとしたのである。慶長三（一五九八）年の『感神院祇園牛頭天王御縁起』には、牛頭天王を祀り崇めることで疫病を防ごうとしたことが、ありありと描かれている。

まことに疫病の難をのかれんとほつせん者ハ、六月一日より十五日にいたるまで毎日七へん、南無天疫神、南無牛頭天王疫病消除さいなんおふこと唱たてまつらハ、そくさい安穩寿命長遠ならん、もし不信のやからハ、たちまちに天王の御罰をかうふりて、やく病現存せん事うたかひなし、ふかく此旨をまもるへき者也、¹⁵⁷

疫病から逃れるためには六月一日から十五日の間、毎日七回「南無天疫神、南無牛頭天王疫病消除さいなんおふこと」と唱えなければならぬ。これを行わないものは天王の罰で病気になるってしまう。ここでも、明らかに牛頭天王は疫病を流行らせる神であると同時に、篤く祀ることで疫病から防いでくれる神となっている。『感神院祇園牛頭天王御縁起』という祇園社の文書に書かれていることから、一般に広がっていた信仰ではなく、祇園社自身も自分たちの祭神である牛頭天王を疫神と認識しているのである。

② 曆神としての牛頭天王

上記した現在の廣峯神社の社記に

こよみを司る御祭神

(中略)

当社の御祭神は、五穀豊穰を祈願する農耕の神、建築工事の安全を祈願する方位方崇除の神、そして、商売繁盛、家門繁栄を祈願する国民の生産の神¹⁵⁸

とあるように廣峯神社では牛頭天王はこよみを司る神すなわち曆神として祀られているのである。また、廣峯神社には前述した「九つ穴」と呼ばれる曆と関係のある習慣が残っている点も牛頭天王を曆神として祀っている影響の一つであろう。

また、『簠簋内伝』にも牛頭天王を曆神とする次のような記述がある。

天道神は牛頭天王の御坐方なり。万事に大吉。この方に向きて袍衣を陰す、鞍置き初め、一切求むるところ成就の処なりと云々¹⁵⁷

ここでも牛頭天王を天道神と充てている。何度か登場しているこの天道神であるが、方角神の一つで、月毎にその居場所を変え、その方角が吉方とされた。さらに、『篋篋内伝』には、牛頭天王だけでなく牛頭天王の物語に登場するものたちも暦神とされている。

歳徳神の方

(中略)

右、この方、頗利采女の御坐方なり。八将神の母に御坐なり。しかれども容顔美麗、忍辱、慈悲の体なり。故に諸事にこれを用ふべきなり。

牛頭天王の妻である頗利采女は歳徳神とされている。

八将神の方の事

(中略)

右、八将神とは牛頭天王の子なり。春夏秋冬四土用の行疫神なり。大歳神は厥歳その方なり。この方を以て、諸余の七神を知るべきなり。

第一大歳神は惣光天王、本地薬師如来の垂迹なり。造作に吉、この方に向きて木を栽らず。

第二大將軍は魔王天王、盤牛王の化身と申すなり。三歳宛々塞がり、万事に凶。

第三大陰神は俱魔羅天王、本地は觀自在菩薩なり。この方に向き家造、欽入また嫁姫は大凶

第四歳刑神は得達神天王、本地は毘沙門天王なり。この方に向きて兵具納むるは吉、犯土に凶、種を蒔くべからざるなり。

第五歳破神は良待天王、本地は竜樹菩薩なり。海川を渡らず、衣裳を洗はず、沐浴をなさざるなり。

第六歳殺神待神相天王、本地は千手観音なり。この方に向きて太刀を始めず、遊ぶ魚をなさざるなり。

第七黄幡神は相天王、本地は勝軍地藏なり。この方に向きて太刀を納めず、幡を開くに大吉。然りといへども、松を迎へるは大凶。

第八豹尾神は蛇毒気神、本地は三宝荒神なり。この方に向きて大小便を致さず、六蓄を入れるべからず。この分、よくよく意得るべきものなりと云々¹⁵⁸

本章の冒頭でも示したように牛頭天王の子供たちはそれぞれ八将神に充てられている。

天徳神の方の事

(中略)

右、天徳神は蘇民将来の御座の方なり。武答天神と白すなり。宜しくこの方に向かひ乗船、剛猛に吉、同じく造舎出行等は大吉。爾にこの神は広遠国の主、牛頭天の大旦那にて御座なり。八万四千の行疫流行神もこの方を犯さず。然る間、この方に向かば病を避くべし。大吉の方と識るべきなり。

金神七殺の方

(中略)

右、この方は無数の悪神の中に最も第一となす。「巨旦大鬼王」が精魂、七魄遊行して、南閻浮提の衆生を殺戮するなり。159

牛頭天王をはじめとする神だけでなく、蘇民将来をも天徳神という暦神にしている。さらに、牛頭天王の物語の中で滅ぼされる巨旦までもが凶方の神、金神とされているのである。

以上のように、『簠簋内伝』においては牛頭天王をはじめとして牛頭天王の物語に登場するものたちが暦神とされているのである。つまり、『簠簋内伝』における牛頭天王の物語は暦神たる牛頭天王の由緒を語る物語といえるだろう。陰陽道聖典である『簠簋内伝』で牛頭天王の由緒が語られるということは、陰陽師たちにとって暦神としての牛頭天王が重要な神であったと考えられる。

第三節 播磨と吉備の陰陽師

第二章で見た吉備塚のように吉備真備の伝承地には重なり合うようにして安倍晴明の伝承が語られている。例えば、奈良県桜井市には、吉備という地名が残っている。そこには、吉備大臣屋敷があったという大臣敷や吉備真備の墓と伝えられる五輪塔などがある。吉備の近くには安倍文殊院があり、ここでも吉備真備と安倍晴明の伝承が重なり合うように伝えられているのである。このような重なり合いは陰陽師たちが活躍した痕跡とも言えるだろう。この廣峯神社がある播磨地域には、安倍晴明や芦屋道満の伝承が多く残されており、陰陽師たちが活躍した地の一つである。ここでは、播磨に限定せずに播磨から吉備まで範囲を広げ、そこで活躍した陰陽師たちの活躍と吉備真備伝承の広がりについて考えていく。まず、播磨地方の陰陽師たちについて見ていく。

播磨の陰陽師の存在については、その活動を十二世紀の頃には見ることができ、『今昔物語集』巻二十四「天文博士弓削是雄、占夢語第十四」に次のようにある。

陰陽師天文博士弓削是雄ト云フ者ヲ請ジ下シテ、大属星ヲ令敬ムト為ル間、是雄彼ノ

□ト同宿シヌ。160

弓削是雄という陰陽師がおり、属星の祭を行おうとしている。この弓削是雄は実際にいた人物のようで『三代実録』貞観六（八六四）年八月に次のような記録が残っている。

播磨国飭磨郡人陰陽寮陰陽師従八位下弓削連是雄 101

弓削是雄は播磨国出身の陰陽師であったようである。このころすでに中央から陰陽師が輩出されるのみでなく、播磨の国も陰陽師を生み出す産地の一つであったようである。

また、『今昔物語集』巻二十四「慈岳川人被追地神語第十三」にも次のようにある。

慈岳ノ川人ト云フ陰陽師有ケリ。道ニ付テ古ニモ不恥、世ニ並無キ者也。 102

慈岳川人という優秀な陰陽師がいたことが確認できる。この説話では、ある大納言を様々な術を駆使して地神から救うという活躍を見せる。この慈岳川人も、実際にいた人物のようで、『三代実録』貞観五（八六三）年二月に次のような記録が残っている。

勅従五位下行陰陽権助兼陰陽博士播磨権大掾慈岳川人。 103

ここでは、播磨の出身であったかは分らないが、大掾という播磨国の地方官を務めている。陰陽権助や陰陽博士を兼務している慈岳川人が播磨の地方官を務めるということは、この播磨の地に何らかの陰陽道との関係があることが十分想像されるだろう。

以上のように、平安時代の初めには播磨の国に関わる陰陽師達の活躍が実際に見られ、すでに陰陽師と播磨の国との間には密接な関係があったことが考えられる。さらに、朝廷に仕える陰陽師だけでなく、『今昔物語集』巻十九「内記慶滋ノ保胤出家語第三」には播磨で活動する民間の陰陽師たちの姿が見られるのである。

内記慶滋ノ保胤ト云フ者有ケリ。実ニハ陰陽師賀茂ノ忠行ガ子也

（中略）

材木ヲ儲ケムト為ルニ、「播磨ノ国ニ行テ、知識ヲ曳テ、材木ヲ令取ム」ト思ヒテ、播磨ノ国ニ行ヌ。

（中略）

川原ノ有ル所ニ至ニケリ。見レバ、川原ニ法師陰陽師ノ有テ、紙冠ヲシテ祓ヲス。□此レヲ見テ、馬ヨリ忽ギ下テ、陰陽師ノ許ニ寄テ云ク、「此レハ何態シ給フ御房ゾ」ト。陰陽師答ヘテ云ク、「祓シ侍ル也」ト。□云ク、「然ナ、リ。但シ、其ノ紙冠ハ何ノ料ゾ」ト。陰陽師ノ云ク、「祓殿ノ神達ハ法師ヲバ忌給ヘバ、祓ノ程ト暫ク紙ミ冠ヲシテ侍ル也」ト。□、此レヲ聞テ音ヲ放チ大キニ叫テ、陰陽師ニ取り懸レバ、陰陽師心モ不得ズシテ、手ヲ捧テ祓ヲモ不為シテ、「何ニ、何ニ」ト云フ。亦祓セサル人□レテ居

タリ。□陰陽師ノ紙冠リヲ取テ引き破リテ棄テ、泣、ク云ク、「汝ハ何デ仏ノ御弟子ト成テ後ニ、祓殿ノ神苦シビ給ト云テ、如來ノ禁戒ヲ破テ、紙冠ヲバ為ルゾ。無間地獄ノ業ヲ造ニハ非ズヤ。悲キ事也。只我レヲ殺セ」ト云テ、陰陽師ノ袖ヲ引ヘテ、泣ク事無限シ。

陰陽師ノ云ク、「此レ糸物狂ハシキ事也。此クナ不泣給ヒソ。宣フ事ハ極タル理リニ侍リ。然レドモ世ヲ過又事ノ難有ケレバ、陰陽ノ道ヲ習テ此クシ侍ル也。不然ズシテハ何態ヲシテカ妻子ヲモ養ヒ、我ガ命ヲモ助ケ侍ラム。」¹⁶²

賀茂家出身の慶滋保胤という人物が播磨に行き、法師陰陽師と出会った話である。実は、この慶滋保胤は賀茂家出身にも係わらず陰陽師にはならず仏門へと入った人物である。この慶滋保胤が祓いを行なっている法師陰陽師の紙冠をしていることに腹を立て諫める。しかし、法師陰陽師にとって祓いのような陰陽師の仕事をするのは、生活していく上で仕方のないことだと逆に言い返されるといふ内容である。

この説話から分るように、播磨の国では祓いを行なうなどの活躍をしていた民間の陰陽師がいたようである。さらに言えば、陰陽師の仕事を行なうことで、妻子を養い、生計を立てることができると述べており、また「祓セサル人」と祓いを頼む人々がいいたことも確認することができる。播磨において陰陽師は需要のある存在であったことが窺われるのである。

この他にも『今昔物語集』の巻二十四「播磨国陰陽師智徳法師語第十九」にも次のようにある。

播磨国□ノ郡ニ陰陽師ヲ為ル法師有ケリ。名ヲバ智徳ト云ケリ。(中略)此、偏ニ智徳ガ陰陽の術ヲ以テ、海賊ヲ謀リ寄セタル也。

然レバ智徳極テ怖シキ奴ニテ有ケルニ、清明ニ会テゾ識神ヲ被隠タリケル。¹⁶³

智徳という播磨の陰陽師が描かれており、彼は安倍清明に術比べを挑んだり、海賊を術によって破ったりと優れた能力を持った陰陽師であったようである。

このような多くの播磨の陰陽師の中で、最も有名で高い能力を持った陰陽師として知られているのが、「蘆屋道満」である。『宇治拾遺物語』二八四 御堂関白御犬、清明等、奇特事 卷一四ノ一〇」に次のようにある。

「清明がほかには、知たる者候はず。もし、道摩法師や仕たるらん。糺して見候はん」とて、懐より紙を取出し、鳥の姿に引結びて、呪を誦じかけて、空へ投げ上げたれば、忽に白鷺に成て、南をさして飛行けり。

「此鳥のおちつかん所を見て参れ」とて、下部を走らするに、六条坊門、万里小路辺に、古たる家の諸折戸の中へ落入にけり。則、家主、老法師にてありける、搦捕て参

りたり。呪詛のゆへを問るゝに、「堀川左大臣顕光公の語をえて仕たり」とぞ申ける。「このうえは、流罪すべけれども、道摩が咎にはあらず」とて「向後、かゝる態すべからず」とて、本国播磨へ追下されにけり。166

藤原道長が自分を呪詛しようとしているものが誰か、安倍晴明に占わせたところ、「呪詛を知っているのは、私以外には道摩という法師しかいない」ということであった。そこで、道摩を見つけ出し、黒幕が顕光と分ったので、道摩に罪はないと本国である播磨に帰すという話になっている。ここでは、蘆屋道満という名前は見るできない。しかし、南北朝時代に成立した『峯相記』には次のようにある。

晴明道満ハ一條御宇一雙ノ逸物也。然ルニ道満伊周公ノ語ニ依テ御堂ノ関白ヲ咒咀シ申シ。御出ノ道ニ封物ヲ埋ケリ。晴明是を勘出サル。即白鷲ト成テ飛去リ畢ヌ。此科ニ依テ播磨国ニ流レテ佐用ノ奥ニ住シテ歸洛ヲ遂ズシテ死去シ畢ヌ。彼後胤等家ヲ發シ當道ヲ繼ニ及バズ。當国ニ沈落シテ多ク英賀三宅ノ邊ニ形ノ如ク此藝ヲ繼者アリ。皆此後胤也。167

この『宇治拾遺物語』で語られる物語を挙げ、道摩法師を蘆屋道満としている。南北朝の時代には道摩法師は蘆屋道満と見なされていたということであろう。

このように、十三世紀の初めに成立したとされる『宇治拾遺物語』の中に蘆屋道満の姿を見ることができるのであるが、道満を最も有名にしたものが、説経「信太妻」である。

清明親子、道満、未明よりも参内す。御門、南殿に、出御なれば公家、殿上人、残らず、はなやかなりし、見物なり。内よりの宣旨には、「それぞれ両方、奇特を競べ、いづれにても、勝ちたるを、師匠、負けたるを、弟子にして、いよいよ、行もうべし」¹⁶⁸

「信太妻」では、蘆屋道満は安倍晴明と術比べをしており、晴明の敵役として登場している。道満は勝負に負け、最終的には首を刎ねられ殺されるのであるが、安倍晴明と並ぶ有能な陰陽師として活躍している。「信太妻」の話は、その後、「蘆屋道満大内鑑」として人形浄瑠璃や歌舞伎で演じられ、人気を博すのである。さらに陰陽道の聖典『篋篋内伝（金烏玉兔集）』や『篋篋抄』においても「信太妻」の話をモチーフとして『篋篋内伝（金烏玉兔集）』の由来が語られ、そこでも道満は晴明の敵役として陰陽師の力を發揮している。

多くの媒体において晴明の敵役として語られることで、蘆屋道満は広く知られる陰陽師の一人となっていた。実は、この蘆屋道満はこのような物語の中で語られるだけの存在でなく、『政事要略』を見ると、実際に歴史の中で活躍した人物としてはつきり出てくる。

僧道満年来召、仕彼宅之陰陽師侍¹⁶⁹

これが書かれているのは、寛弘六（一〇〇九）年に検非違使によって作成された呪詛事件に関わる容疑者への尋問の記録である。この呪詛事件というのが、高階光子らの企てによって藤原道長、彰子、敦成親王らを亡きものにしようとするものである。道満は、この事件に関わって高階光子の家に出入りした法師陰陽師の一人として挙げられている。これが、「信太妻」などで語られる蘆屋道満と同一人物であるかは分らない。しかし、検非違使の記録に残っていることから、確かに平安時代中期のころ、道満と呼ばれる法師陰陽師が実在したようである。

このように、実在の人物であったと思われる蘆屋道満は多くの物語や説経の中で語られている。しかも、優れた陰陽師として最もよく知られる安倍晴明の敵役として常に語られているということは、蘆屋道満も同様に優れた陰陽師として知られていたということを示すものである。さらに、播磨出身とされる蘆屋道満をこのように語ることは、播磨の国の陰陽師たちの勢いや有能であることを示すものにもなっているだろう。

また、多くの物語で語られることで、道満は播磨の陰陽師のシンボリックな存在となっていたと推察される。先に挙げた『峯相記』にも「當国ニ沈落シテ多ク英賀三宅ノ邊ニ形ノ如ク此藝ヲ繼者アリ。皆此後胤也。」とあり、英賀（今の姫路市南部）の辺りには道満を先祖とする人々が住んでいたようである。実際、播磨に多くの蘆屋道満に関する伝承地が現在でも残されており、蘆屋道満を崇敬する人々がいたことが窺われるのである。

播磨には古くから陰陽師の集団がいたと考えられ、彼らは蘆屋道満が安倍晴明の敵役であったように、都の陰陽師たちとは異なる存在であったのではないかと想像される。慈岳川人や蘆屋道満のように重用されるものもいたが、多くは『今昔物語集』の祓いを行なったいた法師陰陽師のように、庶民からの依頼によって生計を立てる民間の陰陽師たちであったのではないだろうか。しかしながら、多くの物語で播磨の陰陽師が登場していることから、優れた能力を持った陰陽師集団であったはずである。そのため、播磨は優秀な陰陽師が活躍する地域として広く知られていたであろう。

次に吉備の陰陽師について見ていく。

吉備の陰陽師については、はっきりと吉備の陰陽師と記したものは今のところ確認することはできない。しかし、次に挙げる『文徳実録』天安二（八五八）年九月二日に登場する笠氏は、吉備の陰陽師について考える上で注目すべき存在である。

陰陽権助慈岳朝臣川人。助笠朝臣名高寺。山城國葛野郡田邑郷眞原岳。點・定山陵。三〇

陰陽権助の慈岳川人と陰陽助の笠名高とが、文徳天皇の陵墓の場所の選定を行なったという記録である。笠名高と呼ばれる陰陽師がいたことがここから確認できる。また、時代は下るが、藤原実資の日記『小右記』の長和三（一〇一四）年十月二日に次のよう記録がある。

陰陽師笠若任、持来新曆¹⁷¹

笠若任という陰陽師が、新しい曆を持ってきたとある。ここでも、笠という姓の陰陽師が確認でき、少なくとも平安初期から中期にかけて陰陽師として活躍した笠氏一族がいたようである。さらに、鎌倉時代に書かれた『二中歴』¹⁷²にも、次のようにある。

陰陽師 吉備大臣 僧正波羅門 弓削法皇 玉成春苑 川人滋岳 猪養志斐 奉平縣
名高笠 文喬惟宗 具瞻同 孝秀巨勢 忠行賀 保憲忠行子 光荣忠行子 守道光榮
子 道平 道言守道子 光平道言子弟 陳經道平弟 道榮道平子 家榮道榮子 清明
安倍 吉平時親 有行 国随 秦長¹⁷³

吉備真備や安倍晴明など陰陽師の名人を列挙した中に「名高笠」とあり、『文徳実録』にあげた笠名高が挙げられている。この笠氏の一族は優れた陰陽師の家として広く知られていたであろう。では、この笠氏はどのような人々であったのであろうか。太田亮氏の『姓氏家系大辞典』を見ると次のようにある。

笠 カサ 古く備中に笠國あり（中略）古代以来の大族なり。

- 1 笠国は後の備中國小田郡附近の地なるべし。（中略）
- 2 笠臣 吉備臣の一族なり。笠は地名にして上古・一國を定置したる所なれど、その名亡びて、後世・僅に備中國小田郡に笠岡なる地名止むるのみ。¹⁷⁴

笠氏は備中の国の小田郡、特に今の笠岡辺りを拠点とする古代からの大族であったとしている。また『古事記』にも次のようにある。

若日子建吉備津日子の命は吉備の下つ道の臣・笠の臣の祖。¹⁷⁵

その祖を吉備津日子の命としている。つまり、中央で陰陽師として活躍している笠氏一族は備中の国、すなわち吉備地方の豪族であったのである。平安時代の初期には、すでに笠氏のような吉備地方出身の陰陽師たちが陰陽寮の役職に就き、活躍していたことが窺われる。

また、「下つ道の臣」とは下道氏のことであり、吉備真備の一族である。その下道氏と同じ祖とされているのも興味深い。実際、この笠氏の拠点とされる小田郡は下道氏の拠点でもある。山を挟んで、南側が笠氏の拠点笠岡で、北側が下道氏の拠点で現在の矢掛町あたりになっっている。実は、この矢掛町は真備町の隣にあたり、真備町と共に吉備真備傳承

を伝える地である。また、『政事要略』には次のよう記録が見られる。

時有一優婆塞。自小田郡来。自云。能見鬼。176

小田郡から鬼の見える優婆塞がやってきたとある。さらに、小田郡の北と南を隔てる山は阿部山と呼ばれ、このあたりは多くの安倍晴明や蘆屋道満の伝承を伝える地域でもある。例えば、この阿部山は、安倍晴明が天体観測をした場所と伝えられている。そこには、晴明屋敷跡や晴明神社、地元で江戸時代の頃、信仰されるとされる晴明大権現のほこらが見られる。



安倍晴明ゆかりの地 碑



晴明大権現のほこら



安倍晴明屋敷

177

また、安倍晴明や蘆屋道満の伝承は文献にも見られ、在田軒道貞によつては、貞享元年（一六八四年）に書かれた『吉備物語』上巻備中人物志に次のようにある。

安倍 清明 (中略)

清明とは籠篋抄に云、吉備公八十歳に至て金烏玉兔集を仲丸か子孫に相傳せばやと思ひ玉ふに、関東常陸国筑波根の麓に吉生と云ふ所に又は真壁猫嶋とも云所に在と聞行て見給へば六七計の童子に天より天蓋下りて覆ふ。兒遊ひ居たりそれを問へば仲丸子

孫と云ふに付て此事を譲りあたへ帰り玉ふと。其後彼兒成人の後此書を見れ共合点ゆかず、其孫も得しらず三代五代の孫も知らず、清明か代に成テ朝暮此書を勤学穿鑿し萬々の語り傳へを聞、吉備公の子孫を尋て當国へ来り浅口郡占見の里に居住して吉備公七世の孫保憲を師匠に頼て、毎日下道郡へ通ひ相傳し占方の上手と成侍り。是に依て世間の人々占見たきもの共は清明所へ行しより、浦見の文字を改占見と書侍るとなん。其屋鋪跡とて占見村氏神山の東脇に西のさこと云所に有其家の門前東の畠中に古墳在戌亥の奥の谷に相傳の書を納し石の櫃とてかつを木のなりにて大キサ三間四方計の大石有(中略)或云、下道郡嵯峨野に清明墓印在とぞ。178

道 満

篋笈抄に云、道満は薩摩国の人と云り。然るに當国小田郡尾坂村上谷を過て安倍山へ入事十町許奥谷川より西側へより道満屋敷とて在、北脇の谷に清水湧り。東向に古土居在辰巳に丸山有船子さこと云り。其上の山に石居残り。近き頃迄石塔有しと。なん。世傳に云、吉備公の孫保憲下道郡に居給ひて清明浅口に住侍れば、天文道学文の為に薩摩より當所に住侍し故に安倍山と申侍るとぞ。179

安倍清明は、『金鳥玉兔集』を理解できないために、吉備公七世の孫とされる保憲に師事するために、浅口郡占見に住んだとあり、道満は安倍山の辺りに住んだとある。清明が住んだと伝える浅口郡占見であるが、現在の笠岡市の東隣の浅口市金光町にあたる。高原豊明氏の『清明伝説と吉備の陰陽師』や金光町史によると、この地にも清明屋敷跡や清明塚、清明井戸、道満屋敷、道満池、道満塚など多くの伝承が伝えられている。やはり、この阿部山を中心とする周辺地域は陰陽師たちが活躍し居住する地域であったようである。さらに、この占見がある金光町には、次のような宗教者の活動が見られる。

- 笠岡市の大島(よく太った人一人と瘦せた人一人)が来て、部屋の中に五色の幣台を置き、前申し(その家の事情に詳しい人がやる)と向かい合わせに座る。その時、窓を全開し、外からよく見えるようにする。
- ① その家にある大きな釜に湯を沸かし、
 - ② 柵をグラグラ煮たった釜の中に突っこんで後、それを人(見ている人も含めて)にかかるとように「おんへ、おんへ」と唱えながら振る。
 - ③ 布舞を舞う。(ハブレシキ、ハブレシキと唱えながら)
 - ④ 大夫と前申しがやりとりをする。
(例えば) お前の何代前はこんな悪いことをした。だからお前がこんな病気になる。と大夫が言うとお前申しが相槌を打つ、という具合に。

- ⑤ 三方の上に病人の着物を乗せる。
- ⑥ 最後に大夫がその着物を投げた。その瞬間、それまでじっと見物していた人々は

クモの子を散らすように逃げた。¹⁸⁰

これは、『金光町史』に記載されている「上原太夫」と呼ばれる陰陽師の祈禱の様子である。この他にも、狐憑きや病気の平癒、先祖の霊をおろすなど様々な祈禱を行っていたようである。上原太夫の内部では「祈禱」や「晴明伝の祈禱」と呼んでいたが一般的には「上原祈禱」や「おんへの祈禱」と呼ばれていた。この祈禱は広く浸透していたようで、祈禱行為そのものを方言で「カンバラヲタタク」とも呼び、転じて、上原祈禱の特徴である「洗いざらい言うこと」を言うようにもなった。¹⁸¹

この上原太夫は現在の総社市富原に本拠を置いた陰陽師集団であった。ここでは、笠岡市の大島から来たとなっているが、これは一時的な宿泊地であったようである。その初出は今回、確認できなかったのであるが、『泰福卿記』でその活動は一六七六年以前に遡ることができるとされている¹⁸²。実際に祈禱を見た人々が生存しているようで、近年まで活動が行われていたが、昭和初期のころには終わっていたようである。

吉備地方、特に小田郡では、安倍晴明や蘆屋道満の伝承とともに民間の陰陽師である上原太夫の活躍をはっきりと見ることができた。吉備地方にも、播磨と同様に朝廷に仕える官陰陽師とは異なる民間の陰陽師の集団がいたようである。それは、上原太夫の祈禱のように、昭和初期まで生活の一部として溶け込み、この地域の人々に中につかりと根付いた存在であった。

最後に、享保十三（一七二八）年の谷秦山の詩文を、息子の垣守が集成した『秦山集』に次のような記述がある。

曆道ハ賀茂家代代ノ作業也。然ニ至テ勘解由ノ小路在富卿ニ曆博士絶ヘ子孫沈落ス備
中國ニ¹⁸³

勘解由小路とは賀茂家の流れを汲む陰陽道の家である。その子孫が備中国に流れてきたとある。このことが、歴史的な事実であるかは分らない。しかしながら、陰陽道の大家の一つが備中国に流れてきた可能性があるということは、備中国と陰陽道に何らかのつながりがあったということであろう。今後、さらなる検討を行なっていきたい。

以上、見てきたように播磨と吉備には、はっきりと陰陽師の姿を確認することができた。その背後には、吉備真備や安倍晴明、蘆屋道満といった有名な陰陽師たちの伝承があり、吉備真備牛頭天王招来譚もその一つである。彼らは、中央で活躍する官陰陽師とは異なった民間の陰陽師で、生活の糧として祓いや祈禱などを行う人々であった。そのため、有能な陰陽師の伝承を語ることは自分たちの権威や能力を示すことにつながっていくのである。牛頭天王という陰陽道において重要な神を、陰陽道の祖である吉備真備が招来したと語ることはとても意味のあることであったと推測される。さらに、一般の人々の生活に溶け込み、その地域に根付いた彼らであったからこそ、広く伝承を伝える担い手になったのでは

ないだろうか。

終章 御霊信仰と吉備真備

・今後の課題と展望・

第二章の吉備塚において、吉備真備は、崇るものとして地域の人々に恐れられていた。また、第三章の牛頭天王も崇る神として恐れられる存在であった。このような崇る神としてよく知られているのが「御霊」である。実は、吉備真備自身もこの御霊としても祀られている。

御霊とは、本来は人の靈魂に対する敬称であるが、特に生前知徳に優れていたものが非業の死を遂げ、後に荒ぶる神となって祀られたものである。このような非業の死を遂げた人物に対する畏敬は古くから見られ、『日本書紀』⁵²⁾に物部守屋を討滅した際、その祟りを恐れて死体を八つ裂きにしたが雷が鳴り、豪雨が降ったという記事が見られる。また、『日本霊異記』⁵³⁾には長屋王の遺体を灰にして川に流したところ、それが土佐国に流れ着き百姓が多く死んだという話がかかれていいる。さらに『続日本紀』にも、玄昉が死んだ理由を藤原広嗣の霊のためとしている。

霊に対する恐れは原始の頃から存在していたと思われるが、奈良時代になるとそれは政治と関わっていき、失脚し死んでいったものの霊が恐怖の対象となっていたのである。奈良時代に見られる怨霊に対する畏怖は、平安時代になると、政治と関わって非業の死を遂げた怨霊を御霊として祀る御霊信仰という形ではっきりと現われ、彼らを疫病の原因としていくのである。そこで、御霊を祭りなだめ鎮めるために行われたのが、「御霊会」である。その初見は『三代実録』貞観五年（八六三年）五月廿日の条で次のようにある。

廿日壬午、於神泉苑、修御霊会。勅遣左近衛中将従四位下藤原朝臣基経、右近衛權中将従四位下兼行内蔵頭藤原朝臣常行等、監会事、王公卿士赴集共觀、靈座六前設施、几筵、盛陳花菓、恭敏薰修、延律師慧達為講師、演說金光明經一部、般若心經六卷、命雅樂寮伶人作樂、以帝近侍兒童、及良家稚子、為舞人、大唐高麗更出而舞、雜伎散樂競盡其能、此日宣旨、開苑四門、聽都邑人出入縱覽、

所謂御霊者、崇道天皇、伊豫親王、藤原夫人及觀察使、橘逸勢、文屋宮田麻呂等是也、並坐事被誅、冤魂成厲、近代以来、疫病繁發、死亡甚衆、天下以為、此灾御霊所生之也、始自京畿爰外国每至夏天秋節、修御礼会、往々不斷、或礼仏説經、或歌且舞、令童貫之子靚粧馳射、膂力之士袒裼相撲、騎射呈芸、走馬爭勝、倡優嫚戲、遞相誇競、聚而觀者、莫不填咽、遐邇因循、漸成風俗、今茲春初、咳逆成疫、百姓多斃、朝廷為祈、至是乃修此会、以賽宿禱也⁵⁴⁾

神泉苑において朝廷によって公式に行われた御霊会の記録である。ここでは、御霊とし

て「崇道天皇、伊豫親王、藤原夫人及觀察使、橘逸勢、文屋宮田麻呂」の六人を挙げ、「疫病繁発、死亡甚衆、天下以為、此灾御霊所」と疫病の原因が彼らにあるとはっきり書かれている。御霊が怨霊のような祟りをなすものから疫病を流行らせる行疫神のようなものに変化している。「漸成風俗」とあることから、このような御霊を畏怖するということは京を中心に一般民衆に広がっていったさまをうかがうことができ、広く当時の人々に持たれていた観念であったのであろう。

この行疫神への変化は、牛頭天王のような疫神を祀ることで疫病を抑えようとする「祇園御霊会」へとつながっていくのである。祇園御霊会のはじまりはいくつかの説があるが天禄元（九七〇）年や天延二（九七四）年ごろかと考えられている。¹⁸⁸御輿が出、神泉苑の御霊会と同じように舞や歌が行われていたようである。祇園社において御霊会が行われる背景には牛頭天王が非業の死を遂げたということではなく、疫神としての荒ぶる御霊の性格と牛頭天王が繋がったことにあると思われる。

では、御霊信仰の中で吉備真備はどのように御霊として祀られているのであろうか。京の上下両御霊神社は京中において御霊を祀る代表的な御霊社であるが、その八所の御霊の第一にはしばしば吉備真備が挙げられている。明暦四（一六五八）年成立の京都の地誌『京童』の下御霊の項には次のようにある。

下御霊

当社は八所なり 第一きびのだいじん 第二崇道天皇 第三いよの親王 第四藤原太夫人 第五藤大夫 第六橘大夫 第七文大夫 第八火雷のてんじん すべて八所なり

188

（『京童』）

また、貞享元（一六八四）年成立の京の地誌『菟藝泥赴』の上御霊神社の項にも次のようにある。

上御霊

塔の段の北京極の西二町八所の御霊と申 吉備公 少貳廣嗣 早良親王 藤原夫人 文屋宮田丸 橘逸勢 火雷天神 伊豫親王 此八所の御神者皆疫病守護の神とかや¹⁸⁹（『菟藝泥赴』）

これら『菟藝泥赴』『京童』には、上下の両御霊神社においてははっきりと吉備真備を八所御霊の第一として祀っているのである。この他のいくつかの地誌にも吉備真備を二社の祭神として挙げているものを確認することができる。

上御霊社は平安城鞍馬口通の南にあり祭る神は早良親王、伊豫親王、藤原夫人、文太

夫、橘逸勢、藤原廣嗣、吉備大臣、火雷神等の八所御霊なり¹⁹⁰

〔都名所図会〕

御霊神社 上御霊堅町東側にあり。出雲路の御霊とも称す。位置西面。府社式外也。崇道天皇。伊豫親王。藤原吉子。橘逸勢。文屋宮田麻呂。吉備眞吉備。藤原廣嗣。菅原道真を祭祀す。世に八所御霊とも云ふ。¹⁹¹

〔京都坊目誌〕

下御霊社

八所御霊所謂吉備霊崇道天皇伊豫親王藤太夫橘逸勢文屋宮田丸藤原廣嗣火雷神是也

¹⁹²

〔雍州府志〕

下御霊神社 下御霊前町東側官有地にあり。社格府社。祭神道天皇。伊豫親王。藤原吉子。橘逸勢。文屋宮田麻呂。吉備眞吉備。藤原廣嗣。菅原道真。の八霊也。¹⁹³

〔京都坊目誌〕

このように吉備真備は、京都市上京区にある上御霊神社、下御霊神社において八所御霊の一柱として祀られている。八所御霊とは、先に挙げた神泉苑の御霊の六霊に「吉備真備」と「天神」の二霊を加えたものである。「天神」は地誌によって天神や菅原道真、火雷神と様々な呼ばれ方をしているが、死して雷神となった菅原道真を祀ったものである。つまり、後に加えられた御霊の一柱は「天神」であり、もう一柱は吉備真備なのである。しかし、いつ頃八霊になったのかは、正確には分からない。八所御霊の成立を示唆する今日最も古いものが、十四世紀の頃に成立した『拾芥抄』に見える。

吉備聖霊、崇道天皇、伊豫親王、藤原夫人 藤大夫、橘大夫、文大夫、御霊天神¹⁹⁴

吉備聖霊が含まれており、これを吉備真備と見て間違いないだろう。吉備真備を御霊とし、中世の頃には八霊として成立していたと考えられる。

では、吉備真備が御霊として祀られているというのは、どういうことであろうか。そもそも吉備真備には御霊となる要素がほとんど無い。『続日本紀』天平宝字二年の条に

左、降從四位上吉備朝臣真備為筑前守。¹⁹⁵

藤原広嗣（中略）起兵反。以討玄昉及真備為名。雖兵敗伏誅、逆魂未息。勝宝二年、

左、降筑前守、俄遷肥前守。¹⁹⁶

と、九州へと左遷されてはいるものの、天平宝字八年（七六四年）には中央に復帰し右大臣にまで登りつめている。亡くなったのも『続日本紀』に「薨しぬる時、年八十三。使を遣して弔賻せしむ。」¹⁹⁸とあり、八十三歳という大往生であったようである。さらに、後の桓武天皇の詔に吉備真備を讃えて

故右大臣 往学盈帰 播風弘道 遂登端揆 式翼皇猷¹⁹⁸

と述べられており、御霊のように政敵とされているようなこともないのである。

そこで、注目すべきが吉備真備が怨霊を調伏する力や牛頭天王のような強大な神を勧請する力を持っていたとされている点である。

まず、怨霊を調伏する力であるが、『今昔物語集』卷十一の「玄昉僧正亘唐伝法相語第六」の中の藤原広継の霊についての部分で次のように語られている。

広継悪霊ト成テ、且公ヲ恨奉リ（中略）其後悪霊静ナル事無カリケレバ、天皇極テ恐サセ給テ、「吉備大臣ハ広継ガ師匠也。速ニ彼ノ墓ニ行テ、誘ヘ可キ也」ト仰セ給ケレバ、吉備宣旨ヲ奉、西ニ行テ、広継ガ墓ニシテ誘ヘ陳ジケルニ、其ノ霊シテ吉備殆シク可被鎮ナリケルヲ、吉備陰陽ノ道ニ極タリケル人ニテ、陰陽ノ術ヲ以テ我が身ヲ怖レ無ク固メテ、勲ニ□誘ケレバ其霊止マリニケリ。¹⁹⁸

吉備真備が悪霊となった藤原広継を鎮めるために西に向かい、見事、陰陽の術をもって広継の悪霊を鎮めている。藤原広嗣の霊に関しては先に挙げた『続日本紀』にも吉備真備の左遷の理由として書かれている。同じ『今昔物語集』卷十四の「女、依法花力転蛇身生天語第四」にも次のように書かれている。

大臣、「然レバコソ。鬼ノ来テ人ヲ噉フ也ケリ」ト思テ、弥ヨ慎テ、身ヲ固メ呪ヲ誦シテ居タルニ、後ノ方ヨリ一人ノ女、微妙キ有様ニテ漸ク歩ミ来ル。（中略）君彼ノ墓ヲ掘テ其ノ金ヲ取出シテ、五百両ヲ以テハ法花経ヲ書写シテ我が此ノ苦ヲ救ヒ給ヘ。五百両ヲ以テハ其ノ功ニ君ノ財トシテ仕ヒ給ヘ。此ノ事告ムト思フニ、人皆我が体ヲ見テ憶気シテ死ヌレバ、干今不申ズシテ歎キ思ツルニ、幸ニ君ニ会奉テ申ツル、喜キ事無限シ」ト。大臣此ノ事ヲ聞テ、女霊ノ願フ所ノ事ヲ請ツ。女霊喜テ返去ヌ。²⁰⁰

吉備真備が女の霊の願いを聞いて、女の霊を鎮めている。

また、『江談抄』や『吉備大臣入唐絵巻』において語られている吉備真備入唐説話では、阿倍仲麻呂の霊に助けられながら難題を突破していくのであるが、その鬼霊に衣冠を着けてくるように命じるなど、明らかに鬼霊に対して優位に立ち、あたかも従者のごとく従えている。阿倍仲麻呂は日本へ帰ることができず、唐で無念のうちに死んだ人物であり、物

語の中でも吉備真備以外の人物は仲麻呂の霊を見ると死んでしまうと書かれている。そのような鬼霊に対して対等に向き合い、上から命じるようにできるといふことは、吉備真備が悪霊を憑き従え、鎮めたりなだめたりできる力を持っているといふことであろう。

藤原広嗣や阿倍仲麻呂、女の霊など吉備真備は非業の死を遂げたものたちの霊を慰め鎮めていることが語られている。平安時代の初期の頃には、吉備真備が陰陽道の呪力などによつて霊を鎮めたり調伏したりできる能力を持った人物として知られていたといふことであろう。

このような霊を鎮める能力を吉備真備が持っていたとされることが、吉備真備を御霊の一柱とした理由の一つではないだろうか。霊を鎮めることができるという異能の力を持つ人物として知られていた吉備真備は、他の御霊を治めることを期待され、荒ぶる御霊が集まる八所御霊の中に含まれたと想像される。そのため吉備真備は、非業の死を遂げた人物で無いにも関わらず八所御霊の一柱とされたのであろう。

では、どのような人々の働きで吉備真備は八所御霊に含まれたのであろうか。ここで注目したいのが、上御霊神社周辺に居住していたという唱門師たちの存在である。大正五（一九一六）年成立の地誌『京都坊目誌』の上御霊神社の南側、御霊馬場町の箇所によつて次のようにある。

御霊馬場町 御霊神社の南通御霊町より寺町西入までを云ふ。

(中略)

○唱門師村及池址 當町南方より。相国寺境内北方の竹林及藪下町の西に當る²⁰¹

唱門師村と池の跡があったとしている。また、正徳元（一七一）年成立の地誌『山城名勝志』にも次のようにある。

○唱門師村 彼地唱門師多住居²⁰²

唱門師村には多くの唱門師たちが住んでいると記録されている。この唱門師は第二章で見たように陰陽師的な仕事を行なう集団であった。ここで見ていきたいのが陰陽道と疫病対策との関係である。

奈良時代には、『続日本紀』には、疫病の前触れとして陰陽道との深い関わりのある天文道の異変が書かれているのみである。しかし、平安時代になると陰陽道との関係をはっきりと見ることができる。『日本紀略』の延喜十五年十月十五日を見ると次のようにある。

於建礼門前有鬼氣祭事為除疱瘡也。²⁰³

ここでは、陰陽道の祭りの一つである鬼氣祭が行われている。また、『日本紀略』の天曆

元年八月十四日の記事にも次のようにある。

或令演説仁王經依庖瘡事也。是日。於建礼門前修鬼氣祭。²⁰⁴

天暦元年の疫病の流行にも鬼気祭が行われている。つまり、平安時代には疫病除けの一つとして陰陽道が利用されているのである。

さらに、鎌倉時代になるとその関係は一層強くなり、『吾妻鏡』寛喜三(一二三一)年四月二十九日に次のようにある。

二十九日乙酉。就昨日鳥事。被行御占。泰貞。晴賢。晴幸。重宗。宣賢。成光等参上。病事。(中略)於即巽方。可修鬼氣祭。然者今年世上云疾疫云餓死可被除也。²⁰⁵

ここでは、異変をうけて、陰陽師が怪異を占し、病事と出、鬼気祭が行われている。この他、嘉禄元年、安貞元年に疫病が流行したときも陰陽師が占を行っていたり、様々な祭りを修し、疫病を抑えようとしていることが見られる。このように、鎌倉時代になると疫病対策の一つとして陰陽道が深く関わっているのである。

以上のように、疫病対策には陰陽道が深く関わっていることが分かった。そのため、陰陽師のような仕事をこなしていた唱門師たちが、御霊を祀り疫病を防ぐ御霊会などに関係していた可能性は十分に考えられるだろう。それを示唆するものとして柳田國男が「唱門師の話」の中で次のように述べている。

禁裏へ出た唱門師は言繼卿記の時代には二箇所に分れ住んで居た。即ち北畠の聲聞師と云ひ又は北畠より千秋萬歳参るとある北畠は、前に掲げた上御霊の傍なる唱門師村のことであるらしく、

(中略)

季瓊日録寛正五年の條には、六月十四日の祇園の祭禮にこの北畠から跳戈を出し歌舞をして御所に参るのが舊例だとあつて、此徒が遊藝に由つて御霊会の神事に仕へて居たことが分る。²⁰⁶

上御霊の唱門師たちが御霊会に関わっていた可能性を見ることが出来る。このことから御霊と陰陽師的な存在である唱門師たちが何らかの形で関わっていたことが推測される。吉備真備が御霊として祀り上げられていく背景には、京都における唱門師たちの活躍があった。

しかし、これら唱門師と吉備真備との関わりを直接示す資料は、確認することができない。京都における吉備真備伝承と陰陽道との関係については、今後の課題とし、さらなる調査を行なっていく。

本稿で見てきたように、吉備真備伝承が語られる背後には、必ずといっていいほど、陰陽師たちの活動が見られるのである。学生の一人であった吉備真備が、当時の人々にとって未知の知識や学問を見つけたことで、超人的な人物として伝説化していった。その伝説化の中で、陰陽道と深く結びつき、陰陽道の始祖とされていく。しかも、その担い手となる人々は、幸徳井や笠氏のような上層の陰陽師から、唱門師たちのような民間の陰陽道に関わった人たちと幅広い。いかに、吉備真備が日本の陰陽道にとって重要な人物であったかを如実に示しているのである。

- 1 『続日本紀2・3・4・5』 新古典文学大系 岩波書店 2 一九九〇年九月・3 一九九二年十一月・4 一九九五年六月・5 一九九八年二月
- 2 『意見十二箇条』 続群書類従完成会 一九五九年七月
- 3 『扶桑略記』 『扶桑略記 帝王編年記』 国史大系 吉川弘文館 一九六五年十二月
- 4 『続日本紀』 宝亀六(七七五) 年十月の条(前掲注1) 傍線は岡本による
- 5 『続日本紀』 宝亀六(七七五) 年十月の条(前掲注1)
- 6 『扶桑略記』 天平七(七三五) 年四月の条(前掲注3) 傍線は岡本による
- 7 『続日本紀』 天平七(七三五) 年四月の条(前掲注1)
- 8 『今昔物語集』 新古典文学大系 岩波書店 一九九三年 卷二十四「安倍晴明、随忠行習道語第十六」
- 9 『江談抄』 『江談抄 中外抄 富家語』 新古典文学大系 岩波書店 一九九七年「吉備入唐間事」 傍線は岡本による
- 10 『吉備大臣入唐絵巻』 日本の絵巻 中央公論社 一九八七年 傍線は岡本による
- 11 『江談抄』 「吉備入唐間事」 (前掲注9) 傍線は岡本による
- 12 『陰陽道の本』 日本の闇を貫く秘儀占術の系譜』 学習研究社 一九九三年五月
- 13 『今昔物語集』 卷二十四「慈岳川人被追地神語第十三」(前掲注8)
- 14 『今昔物語集』(前掲注8)
- 15 『今昔物語集』 卷十一「玄昉僧正亘唐伝法相語第六」(前掲注8) 傍線は岡本による
- 16 『今昔物語集』 卷十四の「女、依法花力転蛇身生天語第四」(前掲注8) 傍線は岡本による
- 17 『簠簋内伝』とは正確には『三国相伝陰陽館轄簠簋内伝金烏玉兔集』と称される中世の陰陽道書のこと、内容はこの書の伝授を伝える「清明序」、牛頭天王縁起譚を描いた「牛頭天王序」、暦学について述べた「文殊曜宿経」から成っている。
- 18 『簠簋抄』は中世末期から江戸初期にかけて書かれたと考えられる陰陽道書で『簠簋内伝』の由来及び注釈から構成された書で、著者は特定することが出来ない。その由来は、陰陽道の権威ある聖典『簠簋内伝』正確には『三国相伝陰陽館轄簠簋内伝金烏玉兔集』の日本招来を語っている。内容は、前半で『簠簋内伝』が天竺の文殊菩薩から中国の伯道上人へと渡り、その後、武帝から吉備真備に伝えられ、日本に渡り、安倍の童子に伝授されるまでが描かれている。後半では、安倍の童子とその末裔である安倍清明の出世や活躍を中心に語られている。
- 19 『簠簋抄』 『日本古典偽書叢刊 第三卷 兵法秘術一巻書 簠簋内伝金烏玉兔集 職人由来書』 現代思潮新社 二〇〇四年 傍線は岡本による
- 20 『三国相伝陰陽館轄簠簋内伝金烏玉兔集』 『日本古典偽書叢刊 第三卷 兵法秘術一

- 巻書 簗籥内伝金鳥玉兔集 職人由来書』現代思潮新社 二〇〇四年
- 21 『尊卑分脉』「賀茂」 国史大系 吉川弘文館 一九六六年
- 22 『賀茂氏系図』群書類従 続群書類従完成会 一九六〇年
- 23 『尊卑分脉』「賀茂」
- 24 『賀茂氏系図』
- 25 『賀茂氏系図』
- 26 『古備物語』古備群書集成 歴史図書社 一九七〇年
- 27 『清明伝説と古備の陰陽道』高原豊明 岩田書院 二〇〇一年
- 28 『古備大臣入唐絵詞』の成立と陰陽道』 河原正彦『文化史研究15』一九六三年八月
- 29 撮影は岡本による
- 30 『しのだづま』の発生と物語の成長 松石江梨香 二〇〇五年
- 31 この地は、明治四一年に旧帝国陸軍歩兵第五三連隊が置かれて以来、現在に至るまで官
有地とされており、それが、幸いしてか大きな改変を受けることなく形が保たれている。
- 32 『古備塚古墳の調査』 二〇〇六年 奈良教育大学
- 33 以上は、金原正明氏、長友恒人氏、下岡順直氏、西村誠治氏、山岸公基氏らによってま
とめられたものを岡本が整理したものである。
- 34 『続日本紀』宝亀元年（七七〇年）十月の条（前掲注1）
「古備真備、上啓して骸骨を乞ひて曰さく「側に聞かく、「力任へずして強ふる者則
ち廃れ、心速ばずして極る者は必ず愒し」ときく。真備自ら観て、信に驗と為す
足れり。去ぬる天平宝字八年に、真備の生年数七十に満つ。」
- 35 『続日本紀』宝亀六年（七七五年）十月（前掲注1）
「薨しぬる時、年八十三。使を遣して弔賻せしむ。」
- 36 『南都名所集』勉誠社 一九八一年 傍線は岡本による
- 37 『奈良名所絵巻』『地名研究資料集』クレス出版 二〇〇三年 詞書は岡本が翻刻
- 38 『奈良坊目拙解』奈良市史編集審議会 一九六三年
- 39 『大和志』『大和志・大和志料』臨川書店 一九八七年
- 40 『平城坊目考』『平城坊目考・平城坊目遺考』五月書房 一九九八年
- 41 『大和の伝説』高田十郎 大和史蹟研究会 一九五九年
- 42 鏡神社の宮司梅木春雅氏からの聞き書き
- 43 『古備塚縁起』まほろば 一九六八年
- 44 『古備塚縁起』を整理
- 45 『古備塚縁起』を整理
- 46 『古備塚縁起』を整理
- 47 『大和の伝説』（前掲注41）
- 48 『古備物語』（前掲注26）
- 49 『古備塚縁起』まほろば 一九六八年
- 50 『奈良名所絵巻』（前掲注37） 詞書は岡本が翻刻
『直幹申文絵詞・能恵法師絵詞・因幡堂縁起・類焼阿彌
陀縁起・不動利益縁起・誉田宗厩縁起』日本絵巻物全
集第三十巻 角川書店 一九八〇年
- 51 『不動利益縁起』高橋富士彦
- 52 『東北院歌合絵巻』古美術七十四 三彩新社 一九八五年
- 53 『不動利益縁起』（前掲注51）
- 54 『御参雑々記』『奈良の被差別民衆史』奈良県立同和問題関係史料センター 二〇〇
一年より引用
- 55 『経覚私要鈔』宝徳二年（一四五一年）二月 『経覚私要鈔』 続群書類従完成会

一九七一年 傍線は岡本による

56 『大乘院寺社雑事記』臨川書店 増補 続史料大成 一九七八年

文明九年（一四七七年）五月 傍線は岡本による

57 『大乘院寺社雑事記』文明九年（一四七七年）五月（前掲注 56） 傍線は岡本による

58 『大乘院寺社雑事記』寛正四年（一四六三年）十一月（前掲注 56） 傍線は岡本による

59 『大乘院寺社雑事記』長享元年（一四八七年）十一月（前掲注 56） 傍線は岡本による

60 『吾妻鏡』 国史大系 吉川弘文館 一九六四年 傍線は岡本による

61 『奈良の被差別民衆史』奈良県立同和問題関係史料センター 二〇〇一年による

62 『大乘院門蹟領目録』内閣文庫所蔵 大乘院文書四

63 『大和名勝志』庁中漫録 玉井家文書 奈良市教育委員会文化財課

64 『近世陰陽道の研究』 林淳 吉川弘文庫 二〇〇五年

65 『日本の暦』渡邊敏夫 雄山閣 一九九三年

66 『大乘院寺社雑事記』享徳三年（一四五三年）九月（前掲注 56） 傍線は岡本による

67 『大乘院寺社雑事記』長祿二年（一四五八年）閏正月（前掲注 56） 傍線は岡本による

68 『大乘院寺社雑事記』長祿元年（一四五七年）十二月（前掲注 56） 傍線は岡本による

69 『大乘院寺社雑事記』寛正四年（一四六三年）十二月（前掲注 56） 傍線は岡本による

70 『大乘院寺社雑事記』文明二年（一四七〇年）十二月（前掲注 56） 傍線は岡本による

71 『大乘院寺社雑事記』文明三年（一四七一年）十二月（前掲注 56） 傍線は岡本による

72 『近世陰陽道の研究』 林淳 吉川弘文庫 二〇〇五年

73 『奈良暦に就いて』 『大和志 第三巻第一号』 一九三四年より引用

74 『幸徳井系図』 「奈良暦に就いて」所収

75 『奈良名産史』 藤田文庫 一九三九年 奈良県立情報館オンラインデータベース

傍線は岡本による

76 『近世陰陽道の研究』 林淳 吉川弘文庫 二〇〇五年

77 「口上之覚」『近世陰陽道の研究』より引用 傍線は岡本による

78 『奈良坊目拙解』（前掲注 38） 傍線は岡本による

79 『平城坊目考』（前掲注 40） 傍線は岡本による

80 松石氏の調査によると、常陸の国、猫島では陰陽道の系譜を引く集団によって「随心水」なる七福を生む水を各地に配り歩きその効用や縁起を記すものとして「是を念じて飲みたる者願は忽ち成就し煩は万病に治癒となり七難を除き、七福を生むが不思議の水なり。」という記述があることから『清明傳記』を配るなどし、同時に、各地で安倍清明伝承を語り、自分たちの正統性や活動の根拠としていた。

81 『奈良坊目拙解』（前掲注 38） 傍線は岡本による

82 『土御門泰重卿記』『近世陰陽道の研究』より引用 傍線は岡本による

83 「第二章第一節 i 地誌に描かれた吉備塚」参照

84 「奈良暦に就いて」 『大和志 第三巻第一号』 一九三四年より引用

85 『幸徳井系図』（前掲注 74）

86 『大和名勝志』（前掲注 63）

87 『奈良曝』 大和国史会 一九三九年 傍線は岡本による

88 『奈良坊目拙解』（前掲注 38） 傍線は岡本による

89 『平城坊目考』（前掲注 40） 傍線は岡本による

90 『大和人物志』奈良県名著出版 一九七四年

- 91 『毛吹草』 岩波文庫 岩波書店 一九四三年
- 92 『南都暦』 国立民俗歴史博物館蔵マイクログフィルム「吉川家文書」より
- 93 『南都暦』 国立民俗歴史博物館蔵マイクログフィルム「吉川家文書」より
- 94 『奈良暦に就いて』(前掲注73)より引用
- 95 『中尾家文書』 「奈良暦に就いて」所収
- 96 『大乘院門蹟領目録』(前掲注62)
- 97 『大和名所図会』 地名研究資料集 クレス出版 二〇〇三年
- 98 『祇園牛頭天王縁起』(『神道大系 神社編十 祇園』 林屋辰三郎・宇野日出生校注 神道大系編纂会 一九九二年 所収)を岡本がまとめた
- 99 『簠簋内伝』(前掲注20) 傍線は岡本による
- 100 『続日本紀』 天平七(七三五)年四月の条 (前掲注1)
- 101 『続日本紀』 天平宝字七(七六三)年八月の条 (前掲注1)
- 102 『日本の楽器』 田辺尚雄 柏出版 一九六四年
- 103 『邦楽百科辞典』 音楽之友社 一九八四年
- 104 『扶桑略記』 天平七(七三五)年四月の条 (前掲注3)
- 105 『扶桑略記』 天平七(七三五)年四月の条 (前掲注3)
- 106 『江談抄』 吉備入唐間事 (前掲注9)
- 107 『碁』(ものと人間の文化史) 増川宏一 法政大学出版局 一九八七年
- 108 『碁』
- 109 『吉備真備その伝承』 高見茂 山陽新聞社 二〇〇〇年
- 110 『宝蔵』 明治書院 一九三二年
- 111 鳥取県庁企画部広報課ホームページ (<http://www.pref.tottori.jp>)
- 112 『野馬台詩』の謎 歴史叙述としての未来記』 小峯和明 岩波出版 二〇〇三年
- 113 『野馬臺詩餘師』 一八四三年
- 114 『江談抄』 「源中将師時亭の文会の篤昌の事」 (前掲注9)
- 115 『野馬台詩』の謎 歴史叙述としての未来記』 小峯和明 岩波出版 二〇〇三年
- 116 『簠簋抄』(前掲注19) 傍線は岡本による
- 117 『簠簋抄』(前掲注19) 傍線は岡本による
- 118 『政事要略』 国史大系 吉川弘文館 一九六四年 卷九五
- 119 『新猿楽記』 平凡社 一九八三年
- 120 『新猿楽記』
- 121 『覚禅鈔』 大日本仏教全書 鈴木学術財団 一九七一年 北斗法、属星祭傳來事
- 122 『日本古典偽書叢刊 第三卷 簠簋内伝金鳥玉兔集他』 現代思潮新社 二〇〇四年
深沢徹他の注より
- 123 『吉備物語』(前掲注26) 傍線は岡本による
- 124 『続日本紀』 天平宝字四(七六〇)年の条 (前掲注1)
- 125 『続日本紀』 宝龜六(七七五)年十月の条 (前掲注1)
- 126 『日本古典偽書叢刊 第三卷 兵法秘術一卷書 簠簋内伝金鳥玉兔集 職人由来書』 現代思潮新社 二〇〇四年三月
- 127 『倭片假字反節義解』 群書類従 経済雑誌社 一八九四年 傍線は岡本による
- 128 『日本文法大辞典』 松村明 明治書院 一九七一年より。その他、悉曇学の影響説、漢字音の反切説、国語音節表説などがある。
- 129 『日本国見在書目録』 続群書類従 続群書類従完成会 一九六一年
- 130 『絵本三国妖婦伝』 高井蘭山 国立国会図書館近代デジタルライブラリー 一八八四年

- 傍線は岡本による
- 131 「大阪天満宮の講について」享保九年〜慶応二年・「近江晴子 大阪の歴史 一九九九年
- 132 以上四枚の写真是岡本が撮影
- 133 金戒光明寺ホームページ (<http://www.kurotani.jp>)
- 134 『峯相記』 続群書類従 続群書類従完成会 一九三三年 傍線は岡本による
- 135 廣峯神社社記 廣峯神社
- 136 以上二枚は岡本が撮影
- 137 『神社啓蒙』『兵庫神社誌』(兵庫県神職会 一九三八年) 所収 傍線は岡本による
- 138 『播磨鑑』 播磨史談会 一九〇九年 傍線は岡本による
- 139 『牛頭天王曆神辯』『新修 平田篤胤全集 第七卷』『『新修 平田篤胤全集 第七卷』 平田篤胤全集刊行会 一九七七年) 所収
- 140 『玉蘂』 思文閣出版 一九八四年 傍線は岡本による
- 141 『祇園社略記』 『神道大系 神社編十 祇園』(前掲) 所収 傍線は岡本による
- 142 宮司中山立夫氏談
- 143 『真止戸山神社誌』 鈴鹿多喜二 真止戸山神社社務所 一九四八年
- 144 『真止戸山神社誌』
- 145 以上三枚は岡本が撮影
- 146 『鴨方町史 別冊』鴨方町史編纂委員会 一九九三年三月
- 147 『真止戸山神社誌』鈴鹿多喜二 真止戸山神社社務所 一九四八年
- 148 『祇園牛頭天王縁起』『神道大系 神社編十 祇園』(前掲) 所収
- 149 『牛頭天王辯』『新修 平田篤胤全集 第七卷』(前掲) 所収
- 150 「疫限の国社」の縁起譚では牛頭天王の物語が語れているのだが、牛頭天王が武塔の神になつてゐる。
- 151 『祇園社略記』『神道大系 神社編十 祇園』(前掲) 所収
- 152 『百鍊抄』 『日本紀略後編 百鍊抄』 国史大系 吉川弘文館 一九六五年 天延元年(九七二)年
- 153 『吾妻鏡』寛喜三(一一三二)年 (前掲注 60)
- 154 『簠篋内伝』 (前掲注 20) 傍線は岡本による
- 155 『感神院祇園牛頭天王御縁起』『神道大系 神社編十 祇園』(前掲) 所収
- 156 廣峯神社社記 廣峯神社
- 157 『簠篋内伝』 (前掲注 20)
- 158 『簠篋内伝』 (前掲注 20)
- 159 『簠篋内伝』 (前掲注 20)
- 160 『今昔物語集』卷二十四「天文博士弓削是雄、占夢語第十四」(前掲注 8) 傍線は岡本による
- 161 『三代実録』国史大系 吉川弘文館 一九六六年 貞観六(八六四)年八月
- 162 『今昔物語集』卷二十四「慈岳川人被追地神語第十三」(前掲注 8) 傍線は岡本による
- 163 『三代実録』貞観五(八六三)年二月 傍線は岡本による (前掲注 161)
- 164 『今昔物語集』卷十九「内記慶滋ノ保胤出家語第三」(前掲注 8) 傍線は岡本による
- 165 『今昔物語集』卷二十四「播磨国陰陽師智徳法師語第十九」(前掲注 8) 傍線は岡本による
- 166 『宇治拾遺物語』新古典文学大系 岩波書店 一九九〇年「一八四 御堂関白御犬、晴明等、奇特事 卷一四ノ一〇」傍線は岡本による
- 167 『峯相記』(前掲注 134) 傍線は岡本による

- 168 「信太妻」『説教節』 東洋文庫 平凡社 一九七三年傍線は岡本による
- 169 『政事要略』 (前掲注 118) 傍線は岡本による
- 170 『文徳実録』 国史大系 吉川弘文館 一八九七年 天安二(八五八)年九月
傍線は岡本による
- 171 『小右記』大日本古記録 岩波書店 一九五九〜一九八六年
長和三(一〇一四)年十月 傍線は岡本による
- 172 山本信吉氏によると「文中に引用された書目『簾中抄』等によって上限は鎌倉時代前期、下限は現在最古写本である尊経閣文庫本の書写年代によって鎌倉時代後期と考えられる」と言われている。
- 173 『二中歴』 改定史籍集覧 近藤出版部 一九〇〇年 傍線は岡本による
- 174 『姓氏家系大辞典』 太田亮 角川書店 一九六三年 傍線は岡本による
- 175 『古事記』 新潮日本古典集成 新潮社 一九八六年五月 傍線は岡本による
- 176 『政事要略』 (前掲注 118)
- 177 以上三枚は岡本が撮影
- 178 『古備物語』 (前掲注 26) 傍線は岡本による
- 179 『古備物語』 (前掲注 26) 傍線は岡本による
- 180 『金光町史』金光町史編纂委員会 一九九八年の記録を岡本がまとめた
- 181 『金光町史』 (前掲注 181)
- 182 『金光町史』 (前掲注 181)
- 183 『秦山集』谷干城により出版 一九一〇年 傍線は岡本による
- 184 『日本書紀』日本古典文学大系 岩波書店 一九六七年三月三十一日
- 185 『日本霊異記』新日本古典文学大系 岩波書店 一九九六年
- 186 『三代実録』貞観五(八六二)年五月 傍線は岡本による (前掲注 161)
- 187 『八坂神社の研究』久保田収 臨川書店 一九九〇年による
- 188 『京童』 新修京都叢書 光彩社 一九六七年 傍線は岡本による
- 189 『菟藝泥赴』 新修京都叢書 光彩社 一九六八年 傍線は岡本による
- 190 『都名所図云』 新修京都叢書 光彩社 一九六八年 傍線は岡本による
- 191 『京都坊目誌』 新修京都叢書 光彩社 一九六八年 傍線は岡本による
- 192 『雍州府志』 新修京都叢書 光彩社 一九六八年 傍線は岡本による
- 193 『京都坊目誌』 (前掲注 192) 傍線は岡本による
- 194 『拾芥抄』増訂故実叢書 吉川弘文館 一九二八年
- 195 『続日本紀』天平勝宝二(七五〇)年正月の条 (前掲注 1)
- 196 『続日本紀』宝龜六(七七五)年十月の条 (前掲注 1)
- 197 『続日本紀』宝龜六(七七五)年十月の条 (前掲注 1)
- 198 『続日本紀』延暦二(七八四)年三月の条 (前掲注 1)
- 199 『今昔物語集』卷十一「玄昉僧正亘唐伝法相語第六」(前掲注 8) 傍線は岡本による
- 200 『今昔物語集』卷十四「女、依法花力転蛇身生天語第四」 (前掲注 8)
- 201 『京都坊目誌』 (前掲注 192)
- 202 『山城名勝志』 新修京都叢書 光彩社 一九六七年
- 203 『日本紀略』国史大系 吉川弘文館 一九六六年 延喜十五(九一五)年十月
- 204 『日本紀略』天暦元(九四七)年八月 (前掲注 205)
- 205 『吾妻鏡』 寛喜二(一一三二)年四月 (前掲注 60)
- 206 『柳田國男集十一』筑摩書房 一九五五年「唱門師の話」

【参考文献一覧】(年代順)

- 『右大臣吉備公傳纂釈』重野安繹 吉備公保廟会事務所 一九〇二年
『兵庫神社誌』兵庫県神社職会 一九三八年
『小田郡誌』小田郡教育委員会 一九四一年
『真止戸山神社誌』鈴鹿多喜二 真止戸山神社社務所 一九四八年
『柳田國男集十一』筑摩書房 一九五五年
『人物叢書 吉備真備』宮田俊彦 吉川弘分館 一九六一年
『日本の楽器』田辺尚雄 柏出版 一九六四年
『奈良市史』奈良市史編集審議会 一九六八年
『姫路市史 史料編1』姫路市史編集委員会 一九七四年
『新修 平田篤胤全集 第七卷』平田篤胤全集刊行会 一九七七年
『真備町史』真備町史編集委員会 一九七九年
『日本陰陽道史総説』村山修一 塙書房 一九八一年
『矢掛町史』矢掛町史編集委員会 一九八二年
『論集 空海といろば歌 弘法大師の教育 下巻』久木幸雄・小山田和夫
思文閣出版 一九八四年
『総社市史』総社市史編集委員会 一九八五年
『日本陰陽道史話』村山修一 大阪書籍 一九八七年
『碁(もの)と人間の文化史』増川宏一 法政大学出版社 一九八七年
『八坂神社の研究』久保田収 臨川書店 一九九〇年
『陰陽道叢書』村山修一ほか 名著出版 一九九一年
『神道大系 神社編十 祇園』林屋辰三郎・宇野日出生校注 神道大系編集会
一九九二年
『鴨方町史 別冊』鴨方町史編集委員会 一九九三年三月
『陰陽道の本 日本の闇を貫く秘儀占術の系譜』学習研究社 一九九三年
『近世陰陽道史の研究』遠藤克己 新人物往来社 一九九四年
『吉備真備』真備町教育委員会 一九九五年
『吉備真備』天平の光と影』高見茂 山陽新聞社 一九九七年
『金光町史』金光町史編集委員会 一九九八年
『本地垂迹信仰と念仏―日本庶民仏教史の研究―』今堀太逸 法蔵館 一九九九年
『実像吉備真備』小野克正 一九九九年 手帖舎
『〜天平のマルチ人間〜吉備真備とその伝承』高見茂 山陽新聞社 二〇〇〇年
『播磨国広峯神社古文書の研究』神栄赴郷 二〇〇〇年
『奈良の被差別民衆史』奈良県立同和問題関係史料センター 二〇〇一年
『清明伝説と吉備の陰陽道』高原豊明 岩田書院 二〇〇一年

- 『陰陽道の講義』 林淳・小池淳一 嵯峨野書院 二〇〇二年
『はりま伝説散歩』 橘川真一 のじぎく文庫 二〇〇二年
『野馬台詩』の謎 歴史叙述としての未来記』 小峯和明 岩波出版 二〇〇三年
『近世陰陽道の研究』 林淳 吉川弘文庫 二〇〇五年
『読み替えられた日本神話』 斎藤英喜 講談社 二〇〇六年
『はりま陰陽師紀行』 播磨学研究所 のじぎく文庫 二〇〇六年
『陰陽師 安倍晴明と蘆屋道満』 繁田信一 中公新書 二〇〇六年
『吉備塚古墳の調査』 奈良教育大学 二〇〇六年
『鳥取県の祭り・行事』 鳥取県祭り・行事調査報告所 鳥取県立博物館 二〇〇六年
『陰陽道の神々』 斎藤英喜 思文閣出版 二〇〇七年
『吉備公遺蹟』 佐藤繁雄 マビカメラ
『廣峯牛頭天王』 廣嶺忠胤
『広峯神社沿革考』 西脇芳一

【参考論文一覧】（年代順）

- 「吉備大臣入唐絵詞」 矢代幸雄『美術研究第二十一号』 一九三三年十月
「奈良暦に就いて」 田村吉永 『大和志 第三卷第一号』 一九三四年
「吉備大臣入唐絵詞（原色版）」 松下隆章『美術研究第百八十三号』 一九五六年二月
「粉河寺縁起繪と吉備大臣入唐繪」 梅津次郎『日本絵巻物全集第五卷 粉河寺縁起繪・吉備大臣入唐繪』 角川書店 一九六二年八月
「吉備大臣入唐絵詞の素材について」 森克己『日本絵巻物全集第五卷 粉河寺縁起繪・吉備大臣入唐繪』 角川書店 一九六二年八月
「吉備大臣入唐絵詞」の成立と陰陽道』 河原正彦『文化史研究 15』 一九六三年八月
「大和のまれびと」 梅木春和 『まほろば 11』 一九六七年
「羽易のやま」考』 楠木正雄 『まほろば 11』 一九六七年
「吉備塚縁起」 梅木春和『まほろば 12』 一九六八年
「吉備大臣入唐絵詞」の吉備真備』 久保田淳『国文学 20』 一九七五年十一月
「吉備大臣入唐絵巻」考証』 小松茂美『日本絵巻大成 3 吉備大臣入唐絵巻』 中央公論社 一九七七年七月
「吉備真備の説話について」 南里みち子『福岡女子短大紀要 20』 一九八〇月一二日
「吉備真備について」 末沢又彦『秋田論叢 7』 一九九一年三月
「異国への視線・説経『信太妻』と『吉備大臣入唐絵詞』『宿曜経』など」 深沢徹『日本文学第四四卷第九号』 一九九五年九月

「大阪天満宮の講について・享保九年（慶応二年）」近江晴子 大阪の歴史 一九九九年
「吉備大臣入唐絵巻とその周辺」小峯和明『立教大学日本文学』二〇〇一年
『簞篋抄』と『清明傳記』・信太妻伝説と地方的展開」松石江梨香

「説話・伝承学 第十六号」二〇〇八年

「被差別民衆史の中の陰陽師」吉田栄治郎『歴史民俗学 25号』二〇〇六年

「幕末奈良陰陽師の活動」小田真裕『国文学解釈と鑑賞平成19年10月号』

二〇〇七年

「呪術の歴史と民俗」小池淳一『歴史研究の最前線 史料の新しい可能性をさぐる』

二〇〇七年

「南都暦師・陰陽師の読書・吉川家文書を素材に」小田真裕

『呪術・呪法の系譜と実践に関する総合的調査研究』二〇〇七年

「原初的巡礼・隔夜参詣をめぐる」根井浄 二〇〇八年度説話・伝承学会春季大会

発表資料

【参考辞書一覧】（年代順）

『佛教大辞典』望月信亨 法蔵館 一九三二年

『姓氏家系大辞典』太田亮 角川書店 一九六三年

『日本文法大辞典』松村明 明治書院 一九七一年

『増補 大日本地名辞書』吉田東伍 富山房

一九七二年（一九〇〇年（初版））

『日本歴史地名大系』平凡社 一九八一年

『日本古典文学大辞典』岩波書店 一九八三年

『邦楽百科辞典』音楽之友社 一九八四年

『角川日本地名大辞典』竹内理三 角川書店 一九九〇年

『日本国語大辞典』小学館 二〇〇一年

【参考文献一覧】（本文初出順）

『続日本紀 2・3・4・5』新古典文学大系 岩波書店

2 一九九〇年・3 一九九二年・4 一九九五年・5

一九九八年

『扶桑略記』『扶桑略記 帝王編年記』国史大系 吉川弘文館 一九六五年

『意見十二箇条』続群書類従完成会 一九五九年

『江談抄』『江談抄 中外抄 富家語』新古典文学大系 岩波書店 一九九七年

『吉備大臣入唐絵巻』日本の絵巻 中央公論社 一九八七年

- 『吉備大臣物語 大東急記念文庫本』 『日本絵巻大成3 吉備大臣入唐絵巻』 中央公
論社 一九七七年
- 『今昔物語集』 新古典文学大系 岩波書店 一九九三年
- 『不動利益縁起』 『直幹申文絵詞・能恵法師絵詞・因幡堂縁起・頼焼阿彌陀縁起・不動
利益縁起・菅田宗廟縁起』 日本絵巻物全集第三十巻 角川書店 一
九八〇年
- 『籛籛抄』 『日本古典偽書叢刊 第三巻 兵法秘術一卷書 籛籛内伝金烏玉兔集 職人
由来書』 現代思潮新社 二〇〇四年
- 『籛籛内伝金烏玉兔集』 『日本古典偽書叢刊 第三巻 兵法秘術一卷書 籛籛内伝金烏
玉兔集 職人由来書』 現代思潮新社 二〇〇四年
- 『賀茂氏系図』 群書類従 続群書類従完成会 一九六〇年
- 『尊卑分脉』 国史大系 吉川弘文館 一九六六年
- 『吉備物語』 吉備群書集成 歴史図書社 一九七〇年
- 『南都名所集』 勉誠社 一九八一年
- 『奈良名所絵巻』 『地名研究資料集』 クレス出版 二〇〇三年
- 『奈良坊目拙解』 奈良市史編集審議会 一九六三年
- 『大和志』 『大和志・大和志料』 臨川書店 一九八七年
- 『平城坊目考』 『平城坊目考・平城坊目遺考』 五月書房 一九九八年
- 『大和の伝説』 高田十郎 大和史蹟研究会 一九五九年
- 『東北院歌合絵巻』 古美術七十四 三彩新社 一九八五年
- 『御参雑々記』 『奈良の被差別民衆史』 (前掲) 所収
- 『経覚私要鈔』 続群書類従完成会 一九七一年
- 『大乘院寺社雑事記』 臨川書店 増補 続史料大成 一九七八年
- 『吾妻鏡』 国史大系 吉川弘文館 一九六四年
- 『大乘院門蹟領目録』 内閣文庫所蔵 大乘院文書四
- 『大和名勝志』 庁中漫録 玉井家文書 奈良市教育委員会文化財課
- 『幸徳井家系図』 『奈良曆に就いて』 (前掲) 所収
- 『奈良名産史』 藤田文庫 一九三九年 奈良県立情報館オンラインデータベース
- 『口上之覚』 『近世陰陽道の研究』 (前掲) 所収
- 『土御門泰重卿記』 『近世陰陽道の研究』 (前掲) 所収
- 『奈良曝』 大和国史会 一九三九年
- 『大和人物志』 奈良県名著出版 一九七四年
- 『毛吹草』 岩波文庫 岩波書店 一九四三年
- 『南都曆』 『吉川家文書』 国立民俗歴史博物館蔵マイクロフィルムより
- 『中尾氏所蔵文書』 『奈良曆に就いて』 (前掲) 所収
- 『大和名所図会』 地名研究資料集 クレス出版 二〇〇三年
- 『祇園牛頭天王縁起』 『神道大系 神社編十 祇園』 (前掲) 所収

- 『宝蔵』 明治書院 一九三二年
- 『野馬臺詩餘師』 一八四三年
- 『政事要略』 国史大系 吉川弘文館 一九六四年
- 『新猿樂記』 平凡社 一九八三年
- 『寛禪鈔』 大日本仏教全書 鈴木学術財団 一九七一年
- 『倭片假字反節義解』 群書類従 経済雑誌社 一八九四年
- 『日本国見在書目録』 続群書類従 続群書類従完成会 一九六一年
- 『繪本三國妖婦伝』 高井蘭山 国立国会図書館近代デジタルライブラリー 一八八四年
- 『峯相記』 続群書類従 続群書類従完成会 一九三三年
- 『廣峯神社社記』 廣峯神社
- 『神社啓蒙』 『兵庫神社誌』 (前掲) 所収
- 『播磨鑑』 播磨史談会 一九〇九年
- 『牛頭天王曆神弁』 『新修 平田篤胤全集 第七卷』 (前掲) 所収
- 『玉蘂』 思文閣出版 一九八四年
- 『祇園社略記』 『神道大系 神社編十 祇園』 (前掲) 所収
- 『牛頭天王辯』 『新修 平田篤胤全集 第七卷』 (前掲) 所収
- 『百鍊抄』 『日本紀略後編 百鍊抄』 国史大系 吉川弘文館 一九六五年
- 『感神院祇園牛頭天王御縁起』 『神道大系 神社編十 祇園』 (前掲) 所収
- 『三代実録』 国史大系 吉川弘文館 一九六六年
- 『宇治拾遺物語』 新古典文学大系 岩波書店 一九九〇年
- 『信太妻』 『説教節』 東洋文庫 平凡社 一九七三年
- 『文徳実録』 国史大系 吉川弘文館 一九七七年
- 『小右記』 大日本古記録 岩波書店 一九五九〜一九八六年
- 『二中歴』 改定史籍集覧 近藤出版部 一九〇〇年
- 『古事記』 新潮日本古典集成 新潮社 一九八六年
- 『秦山集』 谷干城により出版 一九一〇年
- 『日本書紀』 日本古典文学大系 岩波書店 一九六七年三月三十一日
- 『日本靈異記』 新日本古典文学大系 岩波書店 一九九六年
- 『京童』 新修京都叢書 光彩社 一九六七年
- 『菟藝泥赴』 新修京都叢書 光彩社 一九六八年
- 『都名所図会』 新修京都叢書 光彩社 一九六八年
- 『京都坊目誌』 新修京都叢書 光彩社 一九六八年
- 『雍州府志』 新修京都叢書 光彩社 一九六八年
- 『山城名勝志』 新修京都叢書 光彩社 一九六七年
- 『拾芥抄』 増訂故実叢書 吉川弘文館 一九二八年
- 『日本紀略』 国史大系 吉川弘文館 一九六六年

- 『看聞御記』 統群書類従 統群書類従完成会 一九三〇年
『吉備之志太道』 真備町公民館 一九六〇年
『長秋記』 増補史料大成 臨川書店 一九六五年
『日本書紀』 日本古典文学大系 岩波書店 一九六七年
『古戦場備中府志』 吉備群書集成 歴史図書社 一九七〇年
『倭片假字反節義解』 群書類従 経済雑誌社 一八九四年
『吉備之志太道』 真備町公民館 一九六〇年
『吉備大臣聖廟旧蹟録』 真備町公民館
『吉備寺記』 未詳
『釈日本紀』 『日本書紀私記 釈日本紀 日本逸史』 国史大系 吉川弘文館
一九六五年